北村謙次郎著

北邊慕情記

長篇随筆

東京大学書房版

だいじな記録

坪田譲治

私が満州え行つたのは、一九四二年即ち昭和十七年二月初旬と覚えております。浅見淵氏と同行しました。同行というより、浅見さんにつれて行つてもらつたわけです。その頃もう、満州え行くのはやかましくなっていて、警察の特高課というのに呼ばれて、いろいろと聞かれたものです。

作家が満州国を訪ねた最後か、どうかは知りませんが、大分後の方だったと思います。今にして思えば、寒い季節であり、戦争は始つていたし、充分歩き廻ることは出来ませんでした。然し、行つてよかつたと思います。私はその何年か前、中国や蒙古に行き、その後には、ジャワの方えも行きました。いづれも、一月から七八ヶ月の旅行ですから、その国、その土地を、一目見た程度です。だから、それらの旅行のことを特別に材料として書いたこともありません。みん

な、頭の奥深くにしまい込み、時々、とり出して見る程度です。その程度ではありますが、忘れることのできない、その場面が、東洋や日本の地理や歴史の一コマのように思はれ、何とも貴い感じであります。

私が上海から南京、北京を経て、内蒙古の包頭え行つたのは、一九三八年即ち昭和十三年の夏であります。途中張家口だの、厚和だの、大同だの、綏遠だの、その他砂漠地帯の忘れた処に立寄つて、北京から一週間もかかつて、目的地包頭につきました。その汽車の中であります。若い一人の日本の婦人が子供をつれて乗つていました。和服であるし二つか三つの男の子と話す言葉で、私は彼女が日本の田舎の人であることを知りました。それも農家の人らしいことにも気がつきました。そこで、聞いて見たのです。

「どちらえ行かれますか。」

行く処の名は忘れましたが、間もなく汽車が止って、その婦人は下りました。そこがスイエンでもなければ、大同でもなく、全然小さい駅なんです。そこで、その婦人の夫は駅長をしておるとききました。その頃、中国の鉄道では、駅の屋根に望楼があつて、そこに日本の兵隊さんが見張つていました。駅のまわりは鉄条網がはりめぐらされていました。そんな処え、この婦人は、風呂敷一つくらいの軽装で、つい、となりの村え、お里帰りのように下りて行きました。

この情景を、私はよく思出して見るのです。

また、前記の通り満州を訪ねた時、私は黒河まで行つたのですが、そこは黒竜江をへだてて、ブラゴエチエンスクと向い合っていました。黒竜江には厚い氷がはつており、眼前のブラゴエの家々からは、ストーブの煙が幾十筋となく昇っていました。そんな町の、雪の中を歩いている時、私は何とも可愛らしい、日本の子供に出あいました。幼稚園生くらいの年頃で、良い防寒の服装をしていました。私は思わず、

「坊ちやんは日本人ですか。」

と、聞いたくらいです。

よく思出して見る光景です。

然しフィリッピンから、セレベスえ行く飛行機が、二三時間行つた海上で方角がわからなくなつた時には、私もちよつと動揺しました。海軍の飛行機でしたが、海の上をグルグル、グルグル何回となく廻るのですが、セレベスの山が見えないらしいのです。その時、空の四辺に立つていた大雲の峰の美しさ。今でも私は忘れません。南方の海上には、毎日のように、空に雲の花が咲いていると思つたり、こんな景色こそ、仏典にある極楽や浄土のイメージだと思つたりしました。

然し私のこんな思出はホンの一瞬、泡が水の上に浮いて消えたようなものです。それに比べ

て、この北村氏の満州の思出は十年の歳月がかかり、日本の国力をかけてのものでありました。人間一人のものではありません。民族の思出、時代の夢とでもいうのでしょうか。とにかく、二度と帰つて来ない、民族の夢の記録です。こういうものは、将来永く残しておき、その頃の歴史を書くものの材料にしなければならないと、私は考えております。とにかく、貴重な記録です。

偶言

小田嶽夫

北村謙次郎君とはこの数年間親しく往来しているが、彼が満州にいた頃にはよく知らなかった。そんなわけで昭和十四年に満州へ旅行したさいにも、特に会う機会をもとめもしなかった。ただ私の親しい友の木山捷平君とは彼も親しく、高円寺の駅近くの木山君宅で、将棋をさしていたところへ、彼が満州から来て、ひよつこりあらわれたことが、二度ほどもあつた。二度ともだつたか、一度だけだつたか、彼にさそわれて、新宿へ飲みにでかけたのをおぼえている。その二度目は、彼が出版のためにやつて来たのであり、滞在期間も少し長かつたので、有志のもので、新宿の「聚楽」で、彼の歓迎だか歓送だかの会を催したことがあり、私も出席した。

井伏鱒二、亀井勝一郎、大宰治、山岸外史、木山捷平、そういう人々が出席したようだが、十人ぐらいの小体の会であつた。

その席で山岸外史君が、

「どうだ、満州で親分（文化界での意味だろうが）になるのはむずかしいか」と、ふと言つたが、それにたいし、彼は

「うむ、親分になるのはそうむずかしくはないだろうが、満州の森鷗外になるのはなあ…」と、意気けんこうとして答えた。山岸君よりも、何オクターブも調子の高い答えで、ちよつと一座を緊張させた。

たしかに彼は気負っていたにちがいないが、しかしその言葉がべつにコッケイにも、不自然にも感ぜられなかったのは、やはり彼の自負が大きく、満州での彼の文学、文化面での実力の裏付けがあつたからであろう。

そんなふうに満州での生活に夢をふくらませていた彼であったから、敗戦後の、満州壊滅後の彼は、彼自身意識するとしないとにかかわらず、羽毛をすつかりむしりとられた鳥であつたことはまちがいないであろう。

戦後の騒然とした東京は誰にでもそうだったが、彼には殊の外なじみにくかっただろうし、かてて加えて文芸ジャーナリズムは駈け足状態で変転していく有様で、彼には本格的に文学に打ちこむ情熱は容易にはわいて来ないふうであった。

米塩の資のための仕事の余暇には、彼はもつぱら庭いじりに精を出したり、三十一文字に感懐を托しているように見られたが、しかしそんなあいだに彼はいつのまにかこの「北辺慕情記」をものにしていたのであった。

この書は彼としては書かずにいられなかつた青春史でもあろうが、こういうものを書く彼の心のどこかに、自分の文学について、満州国と運命を共にするという意識がひそんでいはしないだろうか。もともと浪漫派の彼、一応そうあるのもむしろ当然とも思う。しかしその考えに彼がまさかほんとうに殉ずる、とは私は思つていない。逆に、彼が若々しく再生するのは今ではないか、と満腔の期待をかけるものである。

よろこびの言葉

中谷孝雄

北村君は、むかし僕たちがやつていた『日本浪曼派』の同人であつた。その北村君が、当時新興の満州国へ渡つたのは確か昭和十二年のことだつたと記憶するが、渡満後の北村君の活躍ぶりには、遠く内地から見ていても、まことに花々しいものがあつた。

その後『日本浪曼派』からは緑川貫、横田文子、檀一雄らの諸君が相次いで渡満したが、北村君はよき先達として、これらの諸君を喜び迎へ、助力を惜まなかつた。

昭和十六年の夏、僕は満鉄の招きを受けて満州へ旅行し、一夕、寛城子の小宴席に北村、緑川の諸君と会し、歓談深更に及んだ。僕はその席に於ける諸君の健んな意気を見て、遠からず満州の野にも浪漫の花々が咲き匂うことであろうと、甚だ満足を強くしたことであつた。殊に北村君は、当時在満作家の指導的存在であつたから、元気いつぱい、大いに飲み、大いに談じ、尽きるところを知らなかつた。

僕の満州旅行は、ほぼ二ヶ月に及んだが、その後はいつもかけ違つて、北村君と再び会う機会はなかつた。しかし帰国の後も、満州を思うことに、北村君の存在はいよいよ重もしく、君に対する期待は大きかつた。

が、時は移り、事情はすべて一変した。――偶々、北村君は僕を訪れ、在満時代の思ひ出を一本にまとめたから序文を書けという。僕は、僕らを捨てて去つた二十年の歳月の彼方を思ひ、君の新著の成つたことに深い喜びを感じることが当事なかつた。

僕は、君がこの書の上梓を機会に、再び在満時代のごとき大勇猛心を発して、新しい仕事に動んでくれることを祈つてやまないのである。

序に代えて

昭和二十年七月、私は三江省鶴立県公署の企画室で、執筆中の原稿を中止しようと考えていた。とうてい書き続けることなど、不可能にちかい当時の情勢であった。

「鶴立県開拓十年史」と題したその原稿は、毎日新聞支社長菅方弁氏の斡旋により、同紙上に最初の二三回分が掲載されはじめたばかりだった。しかし、もはや日本からの新聞は届かなくなっていた。まして原稿を送ることは、戦中の戦手に違いなかった。ソ連が参戦することなど、誰ひとり考えるものはなかったが、その代り大連、奉天が米機の行動半径に入り、爆撃のニュースが、ひんぱんにこの北辺の町にも取沙汰されていた。家族が住む新京も、いずれ爆撃の目標にされようとの噂を耳にするに及んでは、即刻仕事を中止し、いったん新京へ引返すのが妥当であろうかと、焦慮のうち幾日かをすごした。

何とも奇妙な縁だが、この幽きのさいちゆう、時期こそ二三箇月前に溯るが、私は北満僻地のこの小さな県公署所在地にありながら「旅信」という短章集の出版祝いを開いて貰う幸運に浴していた。企画課長廿利栄治氏、街で石炭業を営む田村某夫妻、それにたった一軒の書店、浜中書

店の経主人である浜中某女といった内輪の友が主賓者となり、七八名が集まることになった。街にある中国飯店の一室を借り、水入らずの「同が一卓を囲んで高粱酒の杯をあげ、すでに新京へ飜訳した記録もまだ新しいが、その寄贈本も、出版元から直接届けられたものでなく、女丈夫のような浜中の若い娘が、お手のものの配給網を利用して何十部かをとりよせてくれたという因縁つきのものだった。彼女は私の仕事の一つだった開拓図書館を建設するに当ってもとても献身的で、飯嶋していた国境長官舎へ一千部にあまる図書を集めるのに尽力したり、一路に牡丹江の配給社へ陳情に出張するほどの熱意をしめしてくれたりもした。店には高血圧で不自由な体を薄く動かすだけの老父と、これもあまり丈夫でない母との二人を抱え、独身の彼女が、よく赤手をふるって店の経営に当っていたのだった。この大阪風はんの名を忘れたことは遺恨事の一つであるが、十五年の歳月は、著者をきさ仮借なく、不自由そうだった浜中の老父に近い老境へ追い込んだのであってみれば、万事万理の老衰よりも大日に見て貰えるかもしれない。

七月末、私は希望通り新京へ帰り、郊外なる寛城子の自宅に入った。芸文報国隊が組織されたのはいつだったか記憶にないが、廿柏正幸隊長の下に、金沢覚太郎、山田清三郎両氏など世話役に廻り、八月に入ってから奉天烈石場見学に行ったりした。爆撃の報に背とならず、ここふる連

日のように、ハヤブサ戦闘機が東の空さして飛翔し去つた、若鷲たちはいずれも日の丸鉢巻に大刀を席に引きつけ、もはや最後のいでたちだつた。爆撃機ならぬ戦闘機に爆薬を装填し、自爆を決意した夥しい若鷲群が、続々と九州、沖縄さして投入されたあと、精鋭を誇号した関東軍航空隊が、どのような姿で残されたか、思うだに想像を超えるものだつたであろう。

B29の爆撃を恐れた市民の耳に、背後からのソ軍進入が伝えられたのは、八月九日と記録される。新京に小規模ながら爆撃が加えられ、最初は米機来襲と誤認されたのが、やがてソ軍参戦と聞いて色を失つたのは、全満同胞のうち、わけても国境に近く住む邦人だつたことは容易に察しがつく。

寛城子が白城子方面からの戦車進攻路に当ると聞くや、附近に多かつた関東軍々属並びに家族、満鉄社員などが、真先きかけて列車による退避を開始した。諸方に戦車壕を掘る人夫風俗の情ない兵隊が出没しだした。颯爽たる騎兵の姿などもちらほらして、商店街の邦人らとても残存したわが家の主婦は、時折り炊事の用に馳りだされた。

三江省北端はすなわちソ連領に接する。鶴立県には有数の炭鉱地鶴岡がある。いま、四方から進攻を開始したソ軍が、どうしてこの炭山を一目標としないことがあろう。私の脳裏に浮ぶのは、親しくこの脚でめぐり、この眼に捉えた県下十八の開拓団の運命だつた。明けて翌二十一年

は、彼らが入植して満十年に当る。「開拓十年史」は、その慶祝の日のためにも用意された一事業だつたが、今や発表の見込みが立たなくなつた以上に、こんどこそ永久に陽の目を見ぬ悲運に曝されそうである。それどころではない。浜中の娘主人はどうなつたろう。他にも大勢いた親しい人達は、どうなることだろう。

私は日ごと暗憺とした思いで、遠い北辺の空を見やるばかりだつた。

八月十五日、私たちは附近に住む白系ロシア人たちを混えた五六人で、終戦の詔勅を聞いた。日本語を解する彼らは、重大放送と聞くとともに、進んで陪聴を申しこんできたのだ。一緒に起立して詔勅を聞いた彼らは足音を忍ばせ、無言のまま部屋を立去つて行つた。それはあたかも、喪に服する人の列を見るかのようであつたが、最後の一人は、ふと歩みをとめると、囁くような小声で云いのこした。

「運命です。しかし日本、また復活するでしょう。どうか元気なくさないで下さい」

町の郵便局に駐屯していた憲兵隊分署から、時を移さず全員退去の命令が出た。私たち家族は、同じ残存組の美術家奥山禎三君と相談の結果、命令に順うよりほかないとの結論にたつし、リュックに鞄一つの軽装で、足弱の妻子ともども新京を目ざすことになつた。避難者の群は、埃つぽい軍用路を、喪家の犬のごとく黙して歩んだ。一丁ほど前方に、背に毛布と蒲団の包を背負

つた奥山君の姿が、印象的だつた。彼の妻君は、まだ幼い二人の愛児を、一人は背負い、一人は抱く姿が痛々しかつた。

八月十五日――奇しくもそれは八年前、私と妻の二人が、日本から新京へ到着した紀念日でもあつた。平和な日なれば、記念の一餐が設けられるところだつたでもあろう。

鶴立県の人々が、多くの犠牲を払いながら、辛くも新京へ辿り着いたのは、それから約一箇月余を過した後であつた。途中綏化で足どめを食つた彼らは、想像に絶する掠奪暴行の憂目に逢いながら、漸くにして新京神社の境内に入京第一歩を印したのだ。神社の神体はとうになくなり、うつろな本殿の屋上に、古巣を忘れかねた飼鳩が哀れに啼くばかりだつた。

浜中の娘も、他に親しかつた誰それも、どうやら元気な顔を見せてくれた。私はそのころ露天の居酒屋を開いていたが、間もなく店の前の空地にけなげにも豆腐の立売りを始めたのが、大阪育ちときく浜中の娘だつた。老父は自暴自棄の飲酒が祟り、高血圧が嵩じて命を絶つたと聞いた。

若い私たちであつてさえ、商売ものの酒に鬱を晴らすだけの日常だつたのだ。拳銃と自動機銃と短剣と――世界がとたんに中世に引繰り返つたような、命を的の明け暮れを、私たちは僅かに残る生命の灯をかきたて、互いに相励ましながら、それからの長い辛い「籠城」の苦役につかなければならなかつた。日々に思うところは過去八年の国の歩みであり、もつとそれ以上に溯る先輩知友の経営の跡であつた。苦い追想の中にも、甘美な慕情のゆらぐ刹那を、私はこよなく愛した。

それからさらに十五年過ぎた。あの凄まじい風の日に、あのような姿で私の知れる多くの知友が、朔北の風土と人生に深く馴染んだという事実を、私は永遠に忘れることないであろう。

著　者

題簽　伊福部隆彦

目次

だいじな記録　坪田譲治……一
偶言　小田嶽夫……五
よろこびの言葉　中谷孝雄……八
序に代えて……一〇
一章　文話会のこと――新京・大連の文話会員――秋の例会――満映創立の頃……一一
二章　新京の宿――「大新京日報」――今井一郎――新聞小説……一六
三章　南京の黄灑――岡田益吉――「満日」の懸賞小説――北尾陽三――その頃の稿料……一八
四章　栄ビルの生活――ニッケルの娘たち――文祥堂と木崎竜（仲賢礼）……二四
五章　日独防共協定――満映の内紛――うらぶれた風景――坪井与……二九
六章　横田文子――扇芳グリルその他――一匡街の家――酒場「ほがらか」――倉

林正蔵……三三
七章　高粱社――第一期新京文化人――「セダン満州」――古長敏明――真殿星麿――城島舟礼と同英一……三六
八章　大塚淳と新京ブラスバンド――和泉徳市――杏花村のこと――公園異変――李香蘭一挿話……三九
九章　森繁久弥と新京放送局――金沢覚太郎――電々会社の人たち……四三
十章　「作文」のこと――「満州文芸年鑑」――昭和十三年日本文壇――寺崎浩――「医科」――「眠剤」と「氷花」「青き夜の医者」……四七
十一章　寛城子の満映企画室――近藤伊与吉――古いロシヤ料理店「文芸集団」……四三
十二章　職業作家と勤労者文学の問題――ホテルの菊地寛一行――「文話会通信」……四五
十三章　「満州行政」――満州国官史タイプ――新京イデオロギーと自由主義……四八
十四章　ふたたび一匡街の家――大同劇団と藤川研一――森斌――新京文化人いろはかるた……四四
十五章　近東綺十郎（桟朝申）――大連詩壇のことども――「寒外詩集」その他――「亜」――加藤猛太郎……四七
十六章　「高粱」休刊――「新京日日新聞」――「わが鎮魂歌」――「新京」――

「文芸集団」――冬木羊二――竹内正一……五〇
十七章　矢原礼三郎――ふたたび木崎竜――杉村勇造と秀刊誌計画――佐藤好郎と三枝朝四郎……五三
十八章　「満州浪曼」創刊――根岸寛一ヤキノ光雄（満男）の満映入り――荒牧芳郎
十九章　マキノ素描――高原富士郎――「満州浪曼」劇刊祝宴――小林秀雄と林房雄の講演――逸見猶吉……五七
二十章　「満州浪曼」目次――「満州作家選集」――大内の諸家紹介――「満州文学二十年」……五五
二十一章　「満州文学研究」――蘇一郎（大町一枝）――「興亜文化出版社」と「満州浪曼」の改装版――「満州浪曼叢書」――望月百合子――北小路功光――「満州文芸年刊」第二集――石森延男その他……五九
二十二章　驢皮影児――輯安吉蹟――大著「通溝」……六五
二十三章　満映の文化映画――満鉄映画と芥川光蔵――ホラ信こと森信のこと――上村哲弥……六九
二十四章　酒仙奥田技佐のこと――「満州行政」の劇作――「或る環境」……六三
二十五章　横田文子の二作品――緑川貢――「満州新聞」文化部――藤井図夢――奥山

禎三……九六
二十六章　ふたたび「氷花」――城小碓（本家男）――「鴉の裔」（高木恭造）と「崖つぶの歌」（坂井艷司）――「第八号転轍記」（日向伸夫）……一〇〇
二十七章　大連の諸雑誌――「作文」創刊から四十集まで――同人の著作――「満州文芸年鑑」第三集……一〇四
二十八章　お偉方の文章――木下杢太郎の満州文学論――諸団体一覧――甲斐水棹と同雅人……一一〇
二十九章　文話会本部の移転――吉野治夫と新夫人――大連の文芸講演会……一一四
三十章　「芸文志」創刊――その第二、第三集――古丁――爵青その他――秋螢の満系文学評――山丁――爾軍……一一八
三十一章　「芸文志」創刊披露宴――いわゆる東北作家たち――秋螢論「建国前の文芸」……一二二
三十二章　秋螢論「建国後の文学」――三郎、悄吟夫妻――「鳳凰」――「明々」――「城島文庫」――「刊文叢行会」――「文選」――暗い描写――「東方印書館」……一二六
三十三章　「芸文志」の作家とその作品――「華文毎日」――「斯民」――呉郎・呉瑛

夫妻――「明々」の特集――「新しき感情」――古丁――一挿話……一三〇
三十四章　小林秀雄の古丁評――古丁・爵青の対談……一三五
三十五章　古丁・爵青の離反――ソ軍進駐――中ソ友好協会――激しい非難――終戦後の小松と疑遅……一四〇
三十六章　満系創作集「原野」――満系係家の大内隆雄評――悄吟作「ソフイヤの嘆き」……一四四
三十七章　路傍の老タバコ売り――文話会の作家派遣――熱河行……一四八
三十八章　ふたたび「文話会通信」――後藤和夫と筒井俊一――バイコフ登場――「偉大なる王」……一五二
三十九章　壇一雄登場――ふたたび逸見猶吉――八丁と田毎……一五六
四十章　或る挿話――美少女俊子――内田辰次……一六一
四十一章　満日文化協会の創設時代――その創立会議――その事業――満州国々展――栄厚のこと……一六五
四十二章　満日文化協会刊行図書――藤山一雄――ふたたび三枝朝四郎――文化協会役員……一七一
四十三章　ハルピン交響楽団――新京楽団――朝比奈隆と八木一平――招かれた日本楽人たち……一七六

四十四章　十五年度作品評――「緑の歌」その他――民生部文化科設置――文話会総会と会活動……一八一
四十五章　文話会の役員と顧問――三浦直彦――三井実雄――瀬沼三郎……一八五
四十六章　「黄土坡美術協会」――「三人会」――ふたたび城島舟礼と同英一――甘粕正彦の横顔……一八八
四十七章　檀・逸見交友――川端康成と村松梢風――喫茶店ポポフ――「満州国各民族創作選集」……一九二
四十八章　岸田国士の翼賛会入り――芸文指導要綱――文話会解散――文芸家協会設立……一九六
四十九章　中谷孝雄来満――浅見淵の遠征――文芸家協会々員名――石河潔――「芸文」創刊……二〇二
五十章　建国十周年記念祝典――「満州民族慣習制度研究」――現住気族の音楽調査――丸山和雄――菊五郎来演――娘々祭点描……二〇九
五十一章　檀一雄帰る――「芸文」作品抄――「北窓」――「満州短億小説集」……二一四
五十二章　対米英戦と満系知識層――佐渡漁業開拓団――芸文人の外的活動――本年度の単行本――「建国列伝」その他……二一八
五十三章　木山捷平大旅行のこと――二度の来満――鶴立県にて……二二三

五十四章　「満州文芸春秋社」――藤沢閑二――永井竜男――池島信平――香西昇――式場俊三――徳田雅彦――小松正衛――ふたたび甘粕正彦の横顔……二二七
五十五章　十八年から二十年にかけて――徳田秋声逝く「縮図」――「細雪」　諸家の訃相次ぐ……二三五
五十六章　航空文学会――「八雲」――奉天飛行場見学――ソ連参戦――芸文報道隊解散――国展散華……二四〇
五十七章　邦人引揚げ――高橋匡四郎――江上波夫――滝川政次郎――栗原信――最後の饗宴……二四五

一章

文話会のこと——新京・大連の文話会員——秋の例会——満映創立の頃

満洲文話会という在野の文化綜合団体が創設されたのは昭和十二年、発祥地は大連であった。同時に奉天、新京に支部が設けられ、それぞれ活動を開始しだしていた。筆者が新京へ行ったのは十二年の初夏だったが、その秋ごろには、すでに文話会の例会に出席している。新京の例会は、ほとんど必ずといっていいほど、大同大街に面した大興ビルの地下室にある青葉グリルというので開いた。このビルは正面が憲兵司令部で、通りひとつ隔てて関東軍司令部があつた。憲兵隊と軍司令部のお目こぼしにあずかつたような恰好で、地下工作をやつていたというと大ゲサになるが、お茶とお菓子でカンタンな文学美術論などを上下していたにすぎないから、いたつて罪は軽いのだ。憲兵隊や軍司令部は大事ないが、大興ビルの三階に満日文化協会があり、理事の杉村勇造氏がひとかたならぬ文話会ビイキだった。多分その関係から青葉グリルが選ばれたのだろうし、のちに文話会の本部が新京に移つたとき、文化協会の一室に事務所をおくようになつたの

も、由来するところ甚だふかく古いわけだつた。このころ例会によく顔を見せた人に、金沢覚太郎、今井一郎、三枝朝四郎、今村栄治、松本光庸、長谷川濬、美濃谷善三郎、江草茂、藤沢忠雄、たまに木崎竜（仲賢礼）坪井与、晶埜ふみ、矢原礼三郎、山崎末治郎、新井練三などの諸氏があつた。もつといた筈だが、すぐは思い出せない。

（註・大内隆雄氏の「満州文学二十年」には、次のような人々の名が載つている。堀善照、椿沙智、奥一、今村久米子、境野重明、大坂巌、高木喜久蔵、竹田譲、今村栄治、江草茂、桃北好澄、大内隆雄、今井一郎、宮川靖。このうち宮川、今井、大内が委員に決した。これは同年八月、支部設立に際して集まつた人々で、のち武本正義、美濃谷善三郎、山川博、佐藤四郎、夏本草朗、池辺青李諸君が加わつた。大連では七月、随筆集「実験簿余白」を出した紫藤貞一郎博士を中心にして座談会が開かれたが、この時の出席者は井上麟二、橋本八五郎、西村真一郎、岡二郎、奥行雄、川口彦太郎、筧太郎、吉野治夫、滝口武士中島新、八木橋雄次郎、藤井図夢、秋原勝二、城小雄、田川亮、坂井艶司、福家富士夫、上村哲弥諸氏であつた。八月例会には、更に糸山貞家、大谷健夫、大野斯文、横沢宏、高尾憲太郎、松畑優人、青木実、坂口千馬太、平井孝雄、島田幸二（町原幸二）小山田忠雄、秩父忠敬、古屋重芳の諸氏が加わっている。彼らの多くは、後年それぞれの分野に活躍した人々である。なお「満州文話会通信」第一号は同年九月十五日に発行された）云々。

このグリルの片隅でやつているスキヤ風の屋台のソバがうまく。よく食べた。しかも板前はど

こで習いおぼえたものか、中国人だつたから、いま考えると不思議である。無口で、いたつて不愛想だが、日本人流にテキパキしてきれいずきだつた。

ソバ屋ついでに書いておくが、ほかに康徳会館地下室の和食堂のソバ屋があり、吉野町に東京庵というのがあつて、いずれもよく行った。筆者の住んだ寛城子には湯屋がなく、市中の銭湯の帰り、東京庵でソバを食いながら女房と待ちあわせたりした。それから寒い北風のなかを、馬車で寛城子へもどるのだが、何しろ二十年まえのことだ、若さの故か、寒さもさほどでなかつたような気がする。

昭和十二年秋の文話会例会には、一つの思い出がある。その年満州映画協会が創立され、常務理事林顕蔵、企画部長山内友一、業務課長山梨稔、製作課長亀谷利一といつたスタッフで、ニッケの二階に陣どり華々しく業務を開始していたが、配給部門はどうやら軌道にのりかかつた――というものの、バラバラだつた配給網を一手に引き受けた混乱は蔽うに由なく、配給の一係長などは連日のごとく「首をくくらんならんぞ」と、青くなつて会議室を出入りする、廊下にも事務室にも、遠方から出てきた映画館の主人や支配人が、陳情のためにウロウロしている。――といつたしまつで、製作部の名はあつても、スタジオはまだ出来ず、いつたいどういう映画を作るつもりかということも判つていなかつた。スタヂオは郊外の寛城子に作る予定とのことで、亀谷氏

その他、懸命に奔走中のようだつたが、ちようど東京から、近藤伊与吉氏が招かれて満映入りしたのを機会に、文話会で満映の製作「方針」といつたものを聞く会をひらこうということになつた。で、秋の一夜、例の青葉グリルに十二三人の会員があつまり、説明役の近藤氏があらわれるのを待つたがいつこうあらわれる気配がない。とうとうおしまいまで氏は顔を見せなかつた。ところが当夜あつまつた会員というのは、約四分の一か三分の一くらいが満映の連中で、中には松本光庸とか坪井与のような製作課の課員もいた関係から（坪井氏は欠席か？）近藤氏がいなければいないで、それ相当に活潑に、製作映画の予想が話題にのぼつたのは当然だつた。で、それから幾日かたつて、土地の新聞から求められて「文芸時評」式文章を艸したとき、連載三回の一回分だつたかを、当夜の印象を綴つて宛てることとなる。さて、その記事が朝刊に発表される。筆者も当時は満映の下つぱだつたから、「お早う」と会社へ顔を出す。とたんに亀谷課長から「ちよつと来てくれ」という伝言がきた。課長室には、顔をしかめた亀谷氏のそばに、坪井君がニヤニヤ控えている。亀谷の机の上には、朝刊の切抜きが一葉、そこには筆者の署名が見え、いたるところ「要注意」の赤線が引いてある。結果は明かである。まだ正式に決定も発表もせぬ満映作品に対して、よくもあれこれ勝手な批判を下し注文をつけた。責任軽からずというお小言が待ち受けていたわけである。満映作品は中国人向けのもので、日本人を対象とせずというのが、大体

の方針だつたようだが、それでは困るから、日本人向けの映画も作つてくれというのが文話会々員の希望で、筆者は正直にそれを伝えただけなのだが、下つぱ社員が出過ぎたことをするなとばかり、亀谷はムキになつたらしい。

世はまさに統制時代、満映はその先端をいこうとして張りきつていたやさきだ。お許しもなく社員が勝手な文章を発表したら、蟻の一穴になりかねぬと考えたのも無理でなかつた。然しその辺に、当時の日本人の統制「歓迎」の気風が見られたことは確かであつた。亀谷ばかりではない。いずれそのような姿勢をとらざるを得ない民間人が多かつたのが事実である。が、そんなことは別として、満映はぞくぞく演員（俳優）を募集し、養成しだしていた。鄭暁君といつて、かつての栗島すみ子を大味にしたような美人も居り、劉恩甲というデブの三枚目役もいた。例の季香蘭が入社したのは、もつとずつとあとの話である。劉恩甲は松本監督の手で「明星誕生」に出演したが、その後二十年たつて、つい先年のこと、ひよつくり香港から日本へ来遊し、古き松本監督と久濶を敍した。松本君のグチ話を聞き終るや、劉君は破顔一笑して「先生、頭使う人、どうしてもお金モウカリませんですネ」と、慰めてくれたそうである。松本監督以て瞑すべきか？

その頃坪井君のとつた写真に「万里尋母」というものもあつた。「クオレ」の中の一篇を中国風に翻案したもので、主人公の少年は、実は一美少女俳優の扮したものだつた。

二章

新京の宿――「大新京日報」――今井一郎――最初の新聞小説

筆者が新京へ移つて、まず住んだのは、ダイヤ街の佐藤という親戚の家だつた。主人は簡易ラジエーター（温水暖房）の施工を請負う会社の社長で、家には工事関係者の夫婦が幾組も同居している状態だつたから、筆者一人が間借りしたところで別に目ざわりにもならぬ風だつたが、遠慮したというわけでもなく、そのうち新発路附近に下宿をみつけて転居した。佐藤の家では、同居人たちの晩の酒が遅くまで続き、気づかずに風呂の戸をあけると、子分の芸者上りの細君が、すらり白身を後向けにしているというようなこともあつて、筆者の従姉にあたる佐藤の妻が、教育上面白くないとでも思つて転居を勧めたのだつたかも知れない。ところが、引越し先きの下宿が、恐るべき南京虫の巣窟だつたには、移つた晩から、目を丸くして一驚した。夜半、灼熱感に襲われて目をさますと、シーツから壁から畳から、数百に上る大小の南京虫の行列なのである。手が触れると、ふくれ切つた南京虫は雑作なくプツリつぶれる。シーツは一夜で真赤に染り、壁

は点々と黒いしみで汚れる。

そんな荒行をつづけながら、移るアテもなく、約二箇月ほどじつと耐えた。朝はセーラー服を着て、手に鞄をもつて出る二十歳位とみられる娘が夕方になるとピンクの寝巻きのまま食堂で飯を食うのを、いつたい何者かといぶかりながら、同じテーブルで下味い賄飯を食つていた。昼間、階段の途中で、固くなつて立ちすくむ傍を、黙つて追い抜いたこともある。割に純な顔立ちだつたが、考えてみると、孤児院と称して歯磨など売つて歩く種類の少女ではなかつたかと思う。

そんな味気ない日を二箇月ほどつづけたあげく、崇智路の奥にある小ましな下宿をみつけ、ようやく転居することが出来た。秋が深く、興安大路の並木の葉が、青いまま、造り物のように、乾ききつて梢にへばりついていた。孤児院の少女はもういなかつたが、その代り南京虫も影を消し、食堂の食事もいくらかマシなようで、どうやら我慢して過せそうだつた。近くに日本人主人と中国人ボーイだけの餃子舗があり、日曜日の昼はよくそれをとつて食つた。同じ満映の佐々木勝造君があとから住み、北海道出身の山川という乱暴な画家が前から住んでいた。彼はあとになつて林房雄氏が来遊したとき、カフエーでビール瓶の武勇伝を演じたと伝えられた男である。林房雄氏も被害者なら、その他にもだいぶ彼の武勇伝の被害者となつたものがいた筈である。同じ画家だが、大新京日報（後の満州新聞）の文化部長だつた今井一郎君は長者の風があり、よく筆

者に忠告してくれた。

「きみ、とにかく書くことだよ。書いている奴がけつきよく勝つよ」

彼は口でそんなことを言うばかりでなく、間もなく新聞の学芸欄に小説欄を設け、四五十枚ほどの短篇を、つぎつぎ四五人の作家に書かせた。冬木羊二、長谷川濬その他がかき、筆者も「鶴」という小説を今井氏の挿絵で掲載させてもらつたが、これが新聞小説というものを書いた最初であつた。大新京日報は、ちようどそのころ、社長に「人絹」の和田日出吉氏を迎えようとする前のことだつたと記憶する。興安大路の秋は、筆者にとつて忘れられぬ追憶である。あの辺から崇智胡同あたりにかけ、静かで閑雅な日本人住宅街がつづき、樹木の多い庭などもあつて、それぞれなごやかな生活が営まれていたのだが、惜しげなく、根こそぎその生活が破壊されようと、あの頃誰が想像したことだろう。

三章

南京の黄瀛——岡田益吉——満日の懸賞小説——北尾陽三——その頃の稿料

やはり崇智路に住んでいた頃、南京に健在とばかり思つていた詩人黄瀛氏の訃を知り、同じ大新京日報に五六枚の追悼文を書いたことがある。つづいて宮川靖氏が別の新聞か雑誌に、やはり追悼文を書いたことも記憶に残つている。同じ大陸の地つづきに住み、塹壕の中で射殺されたと聞く黄君の死を思うことは、しきりに茫々たる悲哀を感じさせ、二三日のあいだ、筆者は彼の書いた文章や詩を読み返して、人生朝露の感を深くしていた。その後この報道は誤報と分り、最近はまた草野心平氏が終戦後、黄氏の特別の配慮を受けたいきさつをも聞いた。いま黄君は、台湾に健在のように聞いている。詩人黄瀛は、文話会と何の関係もないが、ちようど手許に、彼の書いた文章と詩をのせた雑誌「文芸プラニング」がある。黄瀛の名を思い出す人も、今は稀になつたであろう。彼の詩集「景星」や「瑞技」を知る人も少くなつたであろう。まして小冊子「文芸プラニング」にのつた彼の作品を知るものは、もつと少かろう。筆者は赤松月船氏の紹介で黄君を知り、同君の努力で同誌に宮沢賢治、安藤一郎、岡崎清一郎、木山捷平、石川善助諸氏の詩を集めることが出来た。死んだと聞いた黄君が、無事であると聞くのも嬉しい。

次に録すのは昭和六年三月刊行の「文芸プラニング」に寄稿してくれた作品の一篇である。

金陵・天韻楼茶社にて

僕はだまつている
歌い姫はつぶら眼、かなしいウインクをする
胡弓は唄を消さない程度に唄を引きのばす

僕はやつぱりだまつてる
だまつて考えてる
人々は僕よりも一層上に浮んでいる
歌い姫と僕と二人きりでいる

音楽が間が抜けてると僕は云う
蛇皮線がふるえてる

瓜子児をたべる物音のみきこえて
僕は茶社におるのではない
熱い手巾を投げつけられて
僕は顔をふき乍ら唄に引きずられている

冬の硝子窓は水蒸気でけぶつている
かなしいオリエンタリズムをかろく呼吸する
僕はこの色彩の中の白か黒か
卓上にもたれてちがうことばかり考える

歌い姫はつぶら眼、見れば見るほど誰かさんに似てゐる
僕はだまつてる考えてる

今井一郎の名が出た序でに、思わず筆が新聞小説のことまで先走りしたが、当時の大新京日報が小説欄を提供したのは昭和十二年冬――ひよつとすると十三年春か初夏のことで、その頃筆者は崇智路の下宿を去り、新発路の宝山百貨店の裏手に新築された栄ビルというアパートへ転居していた。記憶が少しアイマイだが「鶴」はこの栄ビルの三階の部屋で執筆したのではないかと思う。或いは崇智路の下宿で執筆の依頼を受け、栄ビルへ移つて完稿したのか、とにかく引越し引越しの多忙の間のことでどうもハッキリした記憶がない。それはともかく、この一篇は割に評判がよく、そのころたしか弘報処の役入をしていた岡田益吉氏が、何だか大変いい言葉で批評してくれたのも憶えている。岡田氏は後に協和会の弘報科長だかを勤めた人で、略して岡益の愛称で

呼ばれ、フランス文学の岡田真吉氏の令兄に当るということだつた。初めから協和会の弘報科長だつたと、さいきん二三の人が云うのを聞いたが、氏が弘報処の長谷川、木崎竜、磯部秀見諸氏と関係深かつたところから、何となく弘報処出身の印象が拭いきれないのである。この点は、なおよく聞いた上で訂正したいと思つている。眉の太い俊敏な印象だが、いかにも夢の多い満州国官吏の典型といつた人柄だつた。後に大内隆雄が新京日日に「新京文化人いろはがるた」なるヨタをとばしたが、中の「ち」の部に曰く「ちの気の多い岡益さん」

さて、地元の大新京日報が活発に動き出すいつぽう、当時大連で発行していた満州日日新聞も、負けじと学芸面の強化に努めだした。これは偏えに、当時在社中の吉野治夫氏の主唱にかかるものだつたのであろうが、満日は大新京と行き方を変え社告を出して広く長篇小説（といつても百何回ぐらいのものだつたが）を募集した。吉野君は昭和六、七年ごろ、やはり満日が募集した長篇小説の一等当選になつたことがあり、後に彼とつきあうようになつたとき、切抜きを見せられたことがある。題を「海と空と」といい、彼の才気を知るに足る作品だつた。その吉野君が昔を思い出し、今度は選者の側に回つたと考えると、微笑させられるものがあるではないか。ところで、このとき応募作品には一等該当者はなく、二等二人の作品が掲載されたが、その一篇が北尾陽三「舗子（プーズ）」もう一篇は漣晶子「ザオドスカヤ街」という、ハルピンを背景とした作品だつた。きわだつて優れたところもない代り、当時の満州作家のものとして、共に水準を抜く、ソツのない作品だつたように思う。北尾氏は当時大連に住んでいたが、この作品発表を機会に新京に移り、満映製作部に入つて監督助手をつとめることになつた。実はこれも少し年代がずれるので、昭和十四年代のことになるのであるが、新聞小説が話題にのぼつた序でに書いておくのだ。北尾君は満映スタジオが寛城子から南新京へ移つても依然として勤務し、終戦と同時に未練げなく、エッサッサと中共の文化工作隊（？）に突つ走つた。そのとき偶然路上で出会い「小生の蔵書は、全部貴兄に贈呈するから、早いとこ取りに来てくれ」と云い残したまま立ち去つたが、ソ軍進駐のごたくさ騒ぎで、本をとりに行くどころでなく、それつきりになつて日本へ引揚げた。

爾来十一年、風の便りに聞けば、北尾君は今なお中国に健在とのことである。（本稿を書いたあと彼はめでたく興安丸で日本へ引揚げた）

さて、満日の懸賞金、大新京の稿料といつたものは、果してどれくらい出したものだつたろう？　満日の賞金は聞きもらしたが、大新京はたしか一枚五六十銭、四十枚二、三十円まで行つたかどうか？　それでも満映の給料がタカダカ百三、四十円ぐらいのもので、他に二三十円でも副収入があれば、大いに活計（！）の足しになるわけだつた。新聞ばかりでなく、五六種の雑誌

が、いずれも多少ずつ稿料を出してくれたおかげで、筆者らは大いに鼓舞激励された。自然怠け者になり、やがて満映の口を棒にふることになるのだが、それは後の話である。当時の雑誌を列記すれば新京では「満州行政」編集部に大坂巌氏がいて文芸欄に相当のスペースをとり原稿料はだいたい内地なみだったように記憶する。

「モダン満州」は小原克己が社長、奥一が編集。城島舟礼の「月刊撫順」が「月刊満州」と改題して新京に乗り込んで来たのもこの頃だった。民生部の傍系の結核予防協会の機関誌「健康満州」は編集者の江草茂が一般文芸作品を大いに歓迎した。

奉天では「観光満州」改題「観光東亜」三宅豊子編集。大連では「新天地」「満蒙」「満州評論」が建国前からの古い老舗を誇っていた。

四章

栄ビルの生活——ニッケの娘たち——文祥堂と木崎竜

筆者が移り住んだ栄ビルというのは、吉野町のカフェー「銀パレス」の経営主だった坂井某の二号氏が引受けて経営することになったもので、アパートの下の一廓に、彼女らの家族が住んでいた。中国人コックを雇って小さな食堂をも営み、すでに姥ざくらながら、人形じみた美貌の同女が、よく料理の出し入れを監督していた姿を思い出すことができる。いつ笑うか分らないような、妙に冷たい表情だったが、頭はいいらしく、それに、前垂れがけで働くのも辞しないといった、けなげで勝気らしいところもあり、二号らしいジャラジャラしたところのない、むしろさっぱりした感じの女性だった。

前に書いたことのある筆者の従姉なども、子供の学校関係で知合い、親しく行き来して、気のおけない奥さんという風に批評していたようである。栄ビルはすなわち坂井ビルのもじりだったわけだ。

このアパートには、新京の特殊会社の社員が主に住んでいたが、満映の管理課もぬけめなく坂井二号氏に直接交渉して、そうとう多数の部屋を契約した。一、二階は六畳三畳の二間で家族もちが住み、三階は六畳一室で独身、単身赴任者が住んでいた。松本光庸、（満映監督）佐々木勝造（雑誌「満州映画」編集）藤島某（満映宣伝）仁礼某（同配給）などの諸氏が二階、上田某、筆者、のちに荒牧芳郎（日活脚本部時代、五人の斥候兵、限りなき前進などの名脚本を書いた。

氏の入社は越えて十三年だつたと記憶する）などが三階の住人だつた。

この三階の窓からは、正面に宝山百貨店の屋上庭園と、一隅に立つ高い白亜の塔が見え、夜になるとネオンがきれいに光つた。アパートといつても、建具や畳は新しく、ラジエーターも完備して、厳寒も春の暖かさだつたから、たつた一間ながら、ようやく落着くところへ落着いたような安心感があつた。新婚早々の松本夫妻など、ことさらその感が深かつたろう。電気ミシンや蓄音器などとりそろえ、新生活をたのしんでいたようである。

満映本社のあるニッケというのは、日本毛織のたてた大きなビルで、満映は二階にあつたが、一階にニッケの売場と喫茶店があり、東京直輸入と称する娘たちが群をなしていた。そのせいか筆者など、二階より一階をぶらついているときの方が多かつた。朝飯ヌキで出社すると、まず喫茶室でコーヒーをのむ。そんなじぶんに、平気でコーヒーをすすつているのは、筆者ひとりだつた。が、こちらにしてみれば、そのコーヒー一杯が朝飯のつもりだから、文句はいつてもらいたくなかつた。ただし美少女を眺めたいクセはあつても、べつに話しあつたり散歩に誘いたがつたりするクセはなかつたから、いくら朝からコーヒーでねばつても穏かなもので、あとはそのまま二階へ上つて仕事するだけのことだつた。

東京直輸入と書いたが、もともとニッケの本店は東京にあり、新京店は、女も男も東京で採用

したのを、そのまま連れてきたのだから、直輸入が当り前の話である。彼らは店の裏手にある寮に入り、娘たちだけ一団となつて一種の女護ガ島を作つていたようだが、のぞいたこともないので、生態はわからない。さぞ賑かな反面には、知らぬ他郷へ出て、思い屈する娘たちも多かつたのではないかと想像される。

しかし売場や喫茶店で働く彼女たちは、お月さまのように明るかった。今でも彼女たちの何人かの顔をハッキリ思いだせるほどだが、誰もみな一様に、明るく微笑していた。これはおそらく、店のしつけがそうさせたものだろう。売場で働く娘たちというものは、叱られたか喧嘩したか、どこか屈托そうな顔をしたのが多いものだが、ニッケの娘たちは、いつもにこにこして、天空快濶で、悪びれたところがなくて好ましかつた。

その魅力にひかれたように、じつに大勢の新京人種がニッケにあつまり、そこへまた東京直輸入らしい「カツドウヤ」が二階から下りてきて立ちまわり、昼すぎるころになると、店ぜんたいが、何となくむうつとむれたような雰囲気につつまれた。新京人種というのは、お茶ばかりのんで、駄弁つてばかりいるヒマ人ぞろいの印象を受けたのは、筆者のみでなかったろう。謹直な杉村勇造氏（さいきん、考古学視察団員として中国に使した）や新井練三氏（当時行政学会理事）などという中老紳士まで、来客たちを引きつれて喫茶室の一隅にたむろし、筆者らもよく「こつ

ちへいらしやい」と呼ばれて一座した。

こういつた一見ムダのような雰囲気が、ニッケばかりでなく、当時の新京ぜんたいを覆つていたようで、いわば建設途上の夢想や衝動が、たがいに相手をもとめあい、一種のカルシス作用を行っていたものかと思われる。文芸界自体についても、例外でない。

「だから当地では、一種不可思議な衝動のみ充満し、議論が多く、何かもどかしい気持ちばかりで明け暮れするのではないか」と、当時、満州芸文界の足が地につかぬ状態を批評して書いたこともあつた。

この気持ちは、ずつと後までつづき、会とか、団体とか、ひたすら統制的になつていく時代風潮というものを嫌悪させるもとになつた。いわば「ひつそりとして、こつこつと」という文芸の本道が見失われそうな傾向に対して、筆者らは最初から或る危惧をいだいていたのだ。が、当時のわれわれは、まだのんびりしたものだつた。よく相手をさがして、ニッケから文祥喫茶店あたりをうろつきまわつた。

「木崎（仲賢礼）さんなら、ついさつきまでおいでしたけれど」文祥堂の、これも微笑を忘れない娘たちの返事をきき、がつかりして外の人混みへまぎれこんで行つた記憶が、何度あつたことか。

この文祥堂というのも、銀座の文祥堂の支店で、康徳会館の地下室全体に印刷工場を、一階に文房具売店と喫茶室を設け、佐藤好郎という若主人が、ひろく商売の手をひろげていた。喫茶室はニッケの半分ほどで、それに輿まつているだけ、やや暗い感じがある代り、それだけしつとり落着いた雰囲気で、木崎や別役憲夫（弘報処）長谷川濬（同）などと、よくここで落合つた。木崎が長谷川を紹介してくれたのも、ここだつた。この三人のうち、木崎、別役ともに、すでに故人である。

五章

日独防共協定――満映の内紛――うぶれた風景――坪井与

日独防共協定の結ばれたのが昭和十二年、次で十五年には日独伊三国同盟が締結される。すなわちその空気を反映して十二年、十三年にかけて設立発展した満映は国策会社の名で呼ばれ、配給面では米英映画をボイコット、製作部はひたすら「健全娯楽」の名による指導映画の製作に乗り出すことになつた。

当時満映は劇映画を娯民映画、文化映画を啓民映画と称した。これを満系大衆が「誤民映画」「欺民映画」といい変え、さんざん嘲笑したという話が残っている。娯も誤も発音はウー、啓も欺もチーで、民を誤り民を欺くというのだから、政府にとっては頭のいたいシャレだった。

それはともかく、満州へ来る外画は、日本内地から輸入する以外上海、天津からのルートがあったが、この方針の下に、すべて米英画が締め出されたおかげで、せっかく上海や関東州内の大連あたりでチャップリンのライムライトが当っていると聞いても永久に満州にいては見られないという結果を招くことになった。何しろ軍報道部が睨みをきかせ、しきりに号令をかけはじめの時代だったから、満映の禄を食みながらアメリカ映画が見たいなどとは、義理にもいえたものでなかった。当時企画課では、映画とともに撮影機具類をドイツからとりよせる計画をたて、はるばる大連へ寄港したドイツの潜水艦（?）が満州特産の大豆と引換えに、プリント、撮影機その他をおいて去ったというニュースが流れたほどで、たのもしいような、くすぐったいような情勢が、日に夜に身辺にせまってきていた。

もう少しあとになると「新しき土」のファンク博士が来満し、満映に新しい撮影機を寄贈して行ったこともある。枢軸国一本槍でいこうとする空気は意外につよく、筆者などは途惑いするばかりだった。企画課長山内あたりから「自由主義的」と称してケチをつけられたのも、そのころ

の記憶である。

ところがその山内なるものが、どうしたきつかけからか、社内にごたごたをひきおこし、あげくのはてに退社して大連へ去ったのは、十三年のいつごろだったか？　つづいて製作課長亀谷も辞めて北京の華北政府に去り、理事長林に代って旧日活の根岸寛一、マキノ光雄（当時牧野満男）両氏があらわれることになるが、それはいずれも後の話だ。

何しろ山内は軍のおぼえめでたく（彼は報道部の柴野某とかたく結んでいた）満映創立の一員でもあったから、退陣のどさくさはいつまでも尾を引いたが、結局それも、業務課長山梨あたりとのサヤあてに起因するものらしかった。

この間に筆者は配給という不思議な係りから宣伝に移り、八月、いったん東京へ帰って帰任したら、いつの間にか製作部に籍を移されていた。当時ニッケの喫茶室で会った理事の林顕蔵が、筆者を顧み「製作へ移ったろう？」とにやっと笑った顔を思い出す。これでとにかく、シナリオでも書いていればよい身分になったわけである。

それと前後して、郊外の寛城子に、演員（俳優）宿舎とスタジオが出来上った。これはいずれも寛城子なる廃駅（もと北鉄線のハルピン、白城子線の分岐駅。シベリヤ出兵のとき、日本軍はここに集結して出発した。そのため新京と寛城子をつなぐ道路は、後まで軍用路と呼ばれた）の

ホームを利用したり、機関庫を改造して作り上げたもので、この機関庫改造のスタジオは、化物でも出そうな、ガランとして荒れはてた感じのしろものだつた。プラットホーム利用の俳優部屋にいたつては、おそらく前代未聞だろう。二丁もつづく細長いホームの上に、宿舎、講堂、食堂といつたたぐいが建ちならび、指導役の近藤伊与吉氏が、講堂の舞台で熱心に俳優学（？）を教えていた。ただし夜になると附近の満系警官が大つぴらに女優部屋にチン入、俳優学を実演していたというから世話はない。

当時いちはやく、坪井与、矢原礼三郎などの諸氏は寛城子に移り矢原はロシヤ人家庭に下宿、坪井は同僚と一軒借りきつて住んでいた。いつたい寛城子という部落はロシヤが北鉄を管理していたころ、社員の聚合住宅を建設したところで、北鉄接収後、駅は廃駅となり建物から風景までしぜんと色あせ、錆びついて行つた。駅附属の食堂では接収前後まで、うまいロシヤ料理を食べさせたそうで、当時を知つている藤山一雄氏（新京博物館副館長）など、しきりに美味をたたえたものだが、満映のスタジオが出来るころには、もちろん食堂も何もなく、僅かに残つた白系ロシヤ人のうらぶれたさまだけが、そこはかとない異国情緒をただよわせていたにとどまる。

坪井が住んだのは、大通りに面した相当大きな一軒家で椅子テーブル、ベッドから電蓄まで備え、そこへ赤い絨氈など敷いていかにもロシヤ人町らしいハイカラな生活をたのしんでいた。筆

者が訪れたのは夏だつたが、二重窓をしめきつた室内は、冷たい空気が重くよどんでいた。聞いてみると夜だけ窓をあけて冷たい空気を入れ、昼は二重にぴつたりしめきる。壁の厚さが一尺余もあるので、こうすればぜつたいに、冷たい空気が逃げないということだつた。この調子だから、冬は室内でペチカを焚きさえすれば寒さの心配がないというのも、満州生活に馴れそめの話らしく、なるほどと頷けた。

六章

横田文子――扇芳グリルその他――一匡街の家――酒場ほがらか――倉林正蔵

その寛城子へ、早くこちらも移りたいと思いながら、なかなか空家がなく、筆者はしばらく前記の栄ビルで足踏みしていた。日本浪曼派の横田文子が来満、大新京日報の今井君のもとで仕事するようになつたのは、おそらくこの前後のことではなかつたか？　彼女は新京に着く匆々、栄ビルの借間を訪れ、佐々木勝造、筆者を加えて三人、ダイヤ街の「祇園」というおでんやで、歓

迎会と称してぐでんぐでんに酔つぱらつた。近くに扇芳グリルという大きなバーがあり、そこの養女が満映に勤務していた関係から「つけ」がきき、臨時の歓迎会などにはもつてこいとあつて、その夜もたいていそのへんを飲み歩いたものと思う。

佐々木も筆者も相当な飲み助だが、横田女史も「女史」がべそをかきそうな酒豪だ。負けずに新京の酒を浴びたことだろう。

扇芳グリルは、毎度いい気になつて利用させてもらつたのはいいが、同じ満映の仕事机で、つい鼻のさきにいる養女のおそえさんから、これまた毎々〃つけ〃の請求をされるのには降参した。おそえさんは、タイピストプールではややお姐さんの方で、いささか丸顔なのが難だつたが、どうして目尻のきりりとしまつたオリエンタル美人だつた。

「祇園」は名の示すとおり、主人夫妻が京都出身だつたようで、頬にホクロのある京美人のおかみさんが、のんびりお酌をしてくれた。夫婦ともいつも機嫌がよく、酒もおでんもうまかつた。ダイヤ街をすこし行くとロータリー、麦などという洋式バー。生州、天平、土筆などという和風料亭があり、吉野町までたどりつくと、八丁、陣太鼓その他の縄のれんが、ずらり軒を並べていた。八丁の常連になつたのはずつと後の事で、十三年頃は前記の扇芳グリル、祇園、新発路附近のコップ酒屋などで気焔をあげていた模様である。要するに、豪華高級な料亭などは、今も

昔もあまり縁はなく、せいぜい縄のれんで安酒の酔いを買うのがおちだつた。

そうこうしているうちに、ようやく寛城子の一匡街というのに、小さな家がみつかり、待望の引越しをするはこびとなつた。前から寛城子住いの村山某という製作部員にみつけてもらつたもので、鍵の手に曲つた長屋の一劃だつた。

隣り近所は、ほとんど全部関東軍の軍属で、軍用路の途中にある糧秣部隊の勤務者ばかりだつた。筆者が引越す前後には、横田女史も寛城子に移り住み、ニッケの宣伝美術を引受けていた奥山禎三君、やがて北尾陽三（現大塚忠義）十四年になると緑川貢の諸君など住むようになり、せまい寛城子は急に異風の人種で賑かになつた。もともとここはシベリヤ出兵当時から、軍隊相手の料理屋がいくつか出来、軍用道路の終点から真直ぐ北に向つて、二西街という道路の両側に一種の繁華街を形づくつていた。満州事変直後、初期の大同学院が寛城子の奥に設けられたころは、毎夜のように不気味な銃声がこだまし、商売も上つたりとなつてさびれきつてしまつたが、それを我慢しぬくうち、こんどは軍属や満映の職員相手に、ささやかながら食堂兼酒場として発足し直した店が何軒か残つていた。

筆者らもごたぶんにもれず、演員（俳優）食堂のお世話になる一方には、これらの食堂で朝夕の食事をとり、酒を酌む習慣だつた。

食堂ではないが、酒場専門のに「ほがらか」という小さな店があり、毎晩のように常連がクダをまいていた。主人は大阪辯の小男で、チョビ鬚など生やしていたが至つて気の好い男だつたのに、たまたま協和会分会で隣組の仕事を手伝つていた関係から、戦後シベリヤまで引張られたのは、連行そのものがいかにデタラメだつたかを示す一例だつた。この酒場には画家の倉林正蔵君あたりも、たまに顔をみせたようだ。彼は終戦後東京に住んでマチス展やピカソ展の黒幕となり、はてはスペインの闘牛を呼ぶと称して遠路スペインへ行つたとか、上陸禁止を食つて退却したとか賑かな話題をまき、あげくの果ては南米からヨーロッパへ渡ると宣言して離日していらい、何の音沙汰もない。倉林天一坊とでも名乗つてはどうかと思われる、不思議な人物である。しかし寛城子時代は二人の愛児にそれぞれミーチャとかハーチャとかのロシア名前をつけ、細君ともども夕方の野道を散歩しながら「晩酌に白酒（バイチュー）と発音していた）をちよつとやると、いいきもちですね」と、無邪気に眼を輝かすような罪のない青年画家であつた。

七章

高粱社――第一期新京文化人――「モダン満州」――古長敏明――真殿星暦――城島舟礼――同英一

寛城子の六月は楊柳の花絮がいちめんに空をとびかい、いま東映重役におさまつている坪井君はそれを「六月の雪」と称して珍重していた。うつかり歩くと、むせつぽくなるほどの柳絮である。満映の演員諸君が賑かに談笑しながら、柳絮の中を馬車で走る姿も印象的だつた。楊柳の林の奥には、丸屋根に十字架をかかげたロシア寺院があり、祝祭日や死者の葬礼があるごとに、寂しい鐘の音をつたえていた。

そのころ二酉街の奥には、奥一君が「高粱社」の看板を掲げて住んでいた。昭和十三年（康徳五年）といえば、彼自著にかかる「よたモンの満州」を出版した前後あたりと思われるが、海外拓植学校出身のこの風変りなジャーナリストは「高粱」という雑誌を出す一方、印刷業兼出版、さては新聞配達店まで手をのばして、さいはての道の奥なる奥ピンの本領を発揮していた。彼の名と同時に思いだされるのはそのころ大同劇団の統領、いま日本教育テレビで活躍中の藤川公成（研一）満映の藤沢忠雄（終戦後引揚げて死亡）江草茂、古長敏明、磯部秀見、小原克巳、大内隆雄（山口慎一）今井一郎（引揚後死亡）池辺貞喜などといつた人々で、奥一はのち小原克巳と一緒にモダン満州社を興し、消えかかつた高粱社の灯を色赤く染め変えて再出発した。小原克巳は終戦直前、いち早く軍の飛行機で日本へ引揚げ、終戦の不運には逢わずじまいという幸運を味わつたが、せつかくの内地住いは運が向かなかつたか、神田の羽田書店の理事をしていると聞い

たのも束の間、いま大阪で鳴かず飛ばずの隠居生活というのは彼らしくない老け方である。古長敏明はそのころ国通発行の満文雑誌「斯民」の編集部にいたと思うが、本職は画家というのに引揚後は大分で新聞社の論説委員になり、結構責を果たしているというから器用な人物である。しかし本職は画家というより無類の酒豪ということにあつたようで、この方の本職は論説委員の肩書きにかけても、多々益々弁じているかもしれない。新京時代には、訪客が帰りじたくにかかるや、すばやく履物を隠して帰らせないといつた「隠君子」だつた。

真殿星麿という、まるでペンネームのような姓名の持主は、天野光太郎という本名めいたのがペンネームで、新京公会堂の主事を勤めながら、その筆名で「モダン満州」や城島舟礼の経営する「月刊満州」にせつせと随筆を書き、後に「苺にくさる」という、これまた難解な題名の随筆集を世におくつた。テアトル東京の松本光庸君によれば、集中に同題の一文があり、旅行さきで山ほど苺を貰つてクサらせたとか、クサつたとかのテーマにちなむ題名だそうである。氏は終戦後郷里奈良で「奈良新聞」を経営しているうち、病歿したと聞いている。この新聞は松本君も関係し、やはり亡くなつた今井一郎君が関係している点で、無関係の吾々にも一抹の関心を抱かせる。

「月刊満州」（前身は月刊撫順）の創刊も昭和十一年（康徳三年）の筈で、初期新京文化の一

翼を担うものであつた。この経営者城島舟礼は早く世を去り（昭和十九年三月）愛婿城島英一君また戦後行衛不明と伝えられたまま、今もつて消息をきかぬ。吉野治夫君などと同じく、召集を受けて戦死したか、或いはシベリヤ抑留中に病死したか、いずれかではないかと察しられるが、後に語る「黄土坡」美術グループの総帥だつただけ「消息不明」は悲しい。もと帝大経済科の出身だが絵は見事で（ホロンバイル草原の二重虹という油彩を、檀一雄君が激賞していた）それに人物の幅の広さと、批評眼の精緻さで「黄土坡」グループにとり、なくてならぬ偉材であつた。（本稿後、英一君は北満の某所で病歿したこと、遺族は九州に健在である旨を聞いた）

八章

大塚淳と新京ブラスバンド——関屋悌蔵・和泉徳市——杏花村のこと——公園異変
——季香蘭一挿話

やはり十二、三年の夏ごろ、児玉公園（旧名は西公園）へ散歩に行くと、池の手前にある低地で、よく大塚淳氏の指揮する吹奏楽団が、ズッペの「軽騎兵」とかビゼーの「カルメン」といつた通俗音楽を演奏しているのに出遇つた。屋根もない草地に立つたまま、ここへ散策にくる日満

系大衆のために、軽妙な楽音をきかせてくれていたわけである。大塚淳はもと上野音楽学校の出身で、日本での業績は知らないが、新京へ移つたころは年すでに五十近く、でつぷり肥つた立派な体軀の持主だつた。鼻下に短い髭を蓄へた童顔を緊張させながら、懸命にタクトを揮つていた。

この楽団は新京特別市の直属で、副市町関屋悌蔵氏、教育科長和泉徳市氏などの主唱で出来あがつたものときいている。たまたま和泉氏の夫人は、ピアニストとして令名高く、この人が夫君を動かした力も大きかつたろう。

大塚氏の存在は、音楽的に不毛であつた新京に、音楽の芽を植えつけた意味で特記していいものであるが、後述するごとく、あと二三年するうちに、氏が創設した新京音楽院の中に新京楽団が発足、氏はその初代指揮者として、立派に音楽の花を開くことになつた。

前に書いた児玉公園というのは、日露戦役に勇名を馳せた児玉大将の名を記念したもので、入口を入つた直正面に、マントをひるがえした馬上の大将の銅像がたつていた。

高粱社の奥一の説によれば、このあたりはむかし杏花村と称した一村落で、古い文献にその名が見えるところから、思いたつて附近を探索したところ、まさしく「杏花村」の由来を記した碑を発見、快心の笑みをもらした。序でに彼はその碑文によつて「杏花村物語」なる一篇を草し「モダン満州」に発表したというが、筆者は未見である。ただし、奥君も知らぬ戦後の公園異変

を書いておけば、終戦後、児玉ジェネラルの銅像は、何者かの手によつて（朝鮮系といわれる）いち早く横倒しにされ、馬の脚が虚空を掴んでのけぞつていた。（菊地康雄君が「芸文」誌上に、ただ首がもがれただけのように書いているのは、記憶ちがいのようである）のみならず、園内には関東軍の放棄した重油罐が四散し、筆者の義従兄にあたる満州暖房主佐藤兵逸が、二十八年に病歿したときなど、もちろん終戦直後のごたくさで焼場もないところから園内の一隅を堀り、罐ごとの重油を借用して遺骸を荼毗に附した。その骨あげのとき、筆者も立会つたが、関東軍の重油がききすぎたせいで骨を拾うのが困難なほど、きれいさつぱり燃えつくして「あつ」と驚嘆した事実がある。ばかりでなく、どこともしれず銃声がこだまし、耳もとをピューンと銃丸がつつ走る不気味さだつた。

かくて曾ての杏花村は、恐ろしく血なまぐさい無人の境と化したわけであるが、しかしその後十余年を経て、いままた和かな杏花村なり、或いはまた新中国にふさわしい公園なりが復活しているかどうか？

さて冬ともなれば、公園の池は厚く凍結し、大小のスケーターが、縦横に快走していた。この公園と、大同大街の先きにある大同公園とはとにかく夏冬を通じ、また日系満系を問わず、多くの市民が、こよない安息の場として利用していたようである。

ところで、さきに李香蘭が満映に入社したのは、ずつと後のことのように書いたが、さいきん南部喬一郎氏の一文を読んだところ、昭和十三年七月入社と記してある。十三年といえば寛城子のおんぼろスタヂオが漸く開所したばかりで、李香蘭の嬌姿など見たこともないように思うが、これは筆者らが、鄭暁君や白光など、純血種の艶姿に見惚れすぎていたせいかもしれない。

現に当時、スタヂオで働いていた松本監督の説によれば、たしかにそのころ、寛城子スタヂオに李小姐があらわれたことがあるという。してみれば十三年の夏、すでに彼女が満映演員であつたことは、ほぼたしかと見ていいであろう。彼女はその前年、奉天の日本人学校に在学中、同地放送局の新人コンクールに登場、局長東儆蔵氏に見出されたのが縁で、つづいて新京放送局から全満に放送し、その後満映入りとなつたものと聞く。とにかく中国語が達者なところから、一応中国系俳優として売り出そうと話がきまり、早くも近藤伊与吉氏に連れられて東京行きとなつたというのも、南部氏の記すとおりである。

ここで思い出したが、その後新京のヤマトホテルで折から渡満した陸軍の某大将だかの招宴があつたとき、同席の李香蘭に歌を所望したところ、附添いの近藤伊与さん（或いは別人か？）の意見で、李香蘭は芸者にあらずという尤もな意見から、お断り申し上げることになつた。そこでその偉い大将が、カンカンになつて怒つたという話があるが、何も大将が怒るほどのことはある

まい。また李小姐にしても、今の山口淑子おばさんなら、そんな野暮は云わなかつたろう。歌おうが歌うまいが、大して「蘇州夜曲」だかの障りになる話でもなかつたろう。

九章

森繁久弥と新京放送局——金沢覚太郎——電々公社の人達

李香蘭がラジオ畑から現れて映画界入りした事情は、美空ひばりなどの場合に似ている。と同様に、いま喜劇俳優としてユニークな地位をきずきあげた森繁久弥が、もとをただせばやはりラジオ畑の出身で、おまけに李香蘭、森繁ともに曾ての新京放送局が生みの親なり育ての親であつたというのも奇縁である。

新京放送局が、満州電信電話会社の一翼として開局したのは、たしか昭和八年の筈である。昭和九年、筆者は大連に在り、「満州日報」の学芸記者としてラジオ記事を扱つていた関係から、奉天十キロ、大連二十キロなどと並べて、新京百キロと記入したあとは、当日の放送番組を紹介するのが日課の一つとなつていた。どうして新京放送局だけが、そんな桁はずれの大きな出力を

もつていたかといえば、それはいうまでもなく新興国の首都として、広い満州全土に電波を流すべき立場にあつたのと、もうひとつは、ソ連領から流されてくる強力な電波に対抗する必要から空前の百キロ放送という構想が生じたわけであつた。いま日本教育テレビにいる新京放送局副局長金沢覚太郎によれば、昭和八年新京放送局開局、十年新京中央放送局と改め、長谷川政雄、道満謹吾両氏が初代の局長となつた。十六年満系局長の下に金沢氏が副局長となり、電々会社の外局として放送総局が成つた。十九年金沢氏は現職のまま芸文協会事務局長となり、同時に武本正義氏（現ラジオ東京調査局長）が副局長となつて放送の実際事務に当つた——というのが、同放送局成立ちの荒筋である。

当初の放送局が、新京市内のどこにあつたかは聞きもらしたが、筆者が新京に移り住むにいたつた昭和十二、三年の頃には、大同広場に面したクリーム色四層楼の、広壮な電々会社の中にスタジオを設け、巨大な放送アンテナが三基、郊外の寛城子北端に聳えていた。霜氷る夜々、爛々と光る北斗七星の下に、塔の上に点火される真紅の信号燈の、何と印象的だつたことか。もうだいぶ前のことになるが、新潮社からボグダーノフの「赤い星」という小説が出版されたことがある。塔の上の信号燈を望見するたびに、筆者はこの「赤い星」を思いださずにいられなかつた。広い地平線。その遥か彼方に、地続きのソ連がある。「赤い星」の国があるのだと、遠い感懐を

誘はれながら、塔の信号燈を見上げたものだ。

大同広場の電々公社には、放送局に前記の金沢氏や武本氏があつたほか、あちこちの部署に、種々雑多な人種が巣食つていた。巣食つていたという云いかたは穏かでないが、満映などと同じく、この会社にも本職のほか原稿をかいたり絵をかいたりといつた人種が実に多く、それはまともな給料取りの図以外に、多分に「巣食つている」印象を人に与えるものがあつた。いちいち名をあげるのは控えるが、このような「巣食つている」人種の一人として、人知れぬ苦労を積んでいたのが、他ならぬ森繁だつた。彼の存在は、あまり名乗り栄えもしないアナウンサーの一人にすぎなかつたのである。

彼の経歴については、別に書く人もいようし、現にご当人が自叙伝（？）を発表中（これは後に随筆集「こじき袋」として出版された）のようだから、ここで詳しく書くことは避けたいが、ざつと一筆がきにするならば、彼は母校早大を出ると、ロッパ一座で芝居を演ずる身となつた。そうこうするうちN・H・Kに転じたのが機縁で、新京放送局のアナウンサー募集の選に入り、遠路満州国入りをするようになつたのが、昭和十二年のことだつた。

さてアナウンサーとしての彼は、べつに出色の異材というわけでもなく、また職業自体が、目立つことを要求する性質のものでなかつたから、ただ走りまわり喋りまわるだけの、いたつて地

味な存在でしかなかつたのはやむを得ないだろうが、それでいて当時大同劇団の藤川研一など、時に触れ折りに触れては「森繁が、森繁が」と吹聴し推賞していたところをみると、すでに当時この舞台監督兼俳優である藤研あたりは、森繁に「名優」的素質を見出していたのかもしれない。しかし彼ならずとも、多少なり森繁を知る者なら、あの自嘲的風貌やしぐさのほかに、どこか詩情をたたえ、哀愁をおびた話術や歌いまわしに、余人の及ばぬ特異性が存することを嗅ぎとつていたに違いない。そしてそれが、早く新京放送局時代、何人かの心に触れることがなかつたとは云えない。すくなくとも、そのことが、ありそうなこととして、回顧されるのである。

藤原義江が来満したのは昭和何年だつたか、いまハッキリしないが、そのとき森繁は臨時召集だかに引掛り、月余にわたる入隊の身だつた。そして藤原義江の歓迎会が新京ヤマトホテルでひらかれたとき、幸運なる彼はちようどその日が除隊の吉日だつた。勇躍して森繁は坊主刈のまま宴会場へかけつけることになる。宴が進んで、ぼつぼつ隠し芸が出かけたころ、除隊したばかりの森繁に、番が廻つてきた。つかつかと藤原義江の前へ歩みよつた彼は、椅子の上に立上るや坊主頭をふりたてながら、臆面もなく「荒城の月」を唄いだしたというのだ。いうまでもなく「春高楼の花の宴」は藤原義江お得意の一曲である。出席の一同が、森繁の強心臓にど肝をぬかれているうちに歌は終つたが、あとで藤原義江が、不思議そうな顔で人に語つた。

「ぼくが唄うより、よつぽど藤原義江に似ていたよ」

このことがあつて、森繁の名は、一躍して新京中に鳴りひびいたとある。

しかし、それにしても運というものは分らない。終戦がなく、そのまま彼が新京に住んでいたとしたら、とうてい今の彼の活躍ぶりなど、想像できないわけである。時代的にいえば、彼も戦後派の一人ということになるのだろうが、しかし彼の本領は紀元何千年いらいの「ニッポンジン」にあるようである。それにホロンバイル草原の宏漠性が加わり、李香蘭とは違う国際性や知性の味つけが加わつて、不思議な将来性を予約させるまでになつたと見てよいであろう。

十章

「作文」のこと――「満州文芸年鑑」「昭和十三年の日本文壇」――寺崎浩――
「医科」――「眠剤」「氷花」「青き夜の医師」

満州文話会の「事業」は、本部が大連にあつた関係から、すべて在大連の委員たちによつてまかなわれていたようだ。雑誌「作文」は大連の詩人小説家が主体となり、昭和七年十月創刊された同人雑誌で、文話会と直接の関係はなかつたが、同人に青木実、吉野治夫その他、文話会員な

り委員なりが大勢加入していたところから、あたかも文話会の母胎乃至は推進力たる観を呈した。同誌は十三年冬から十四年春にかけて三十五集、同年十一月には三百ページに及ぶ四十集を出し、全国同人誌中にあつて異常といつていいほどの文学的熱意をしめした。いま手許にある感想文「地元文芸評」（筆者著「月牙」）を見ると、この年新年号の同誌には、竹内正一「ギルマンアパート点描」三宅豊子「或る旅の記」など発表され、同じ集に吉野治夫の「手記」がT氏文学賞を受けたと、後記に述べてある――云々と、紹介している。

このT氏文学賞というのは、自分で書いた文章ながら、よくわからない。城小碓氏の設けたG氏文学賞というのがあり、これはその誤記か誤植としか思えない。なお同じ感想文に「満州文芸年鑑」の名がみえている。これはまさしく文話会の一事業で昭和十二年第一巻を上梓、十三年第二巻、十四年第三巻まで上梓して中絶したものと記憶するが、それにしても貧乏な文話会が、よく根気よく、あれだけの出版を敢行したものと思う。第一巻は二百ページそこそこだつたが、だんだんページ数も増し、一種の「代表作選集」の役割を兼ねて、当時の満州文芸界を鳥瞰するのに、唯一の便利な資料となつていた。第一巻には竹内正一の佳作「友情」その他が収めてある。比較するわけではないが、昭和十二、三年という時代感覚をハッキリさせるために、十三年秋の日本文壇における作者、作品名をあげれば（十二年は欠）だいたい次のようになる。これは筆者

が、八月東京へ出張して帰つた直後、新聞にのせた「文芸時評」が、やはり「月牙」に収めてあるのに依つたもの。

折から日本は非常時体制がいよいよ完備し、しかも去年は大風害、この夏は関西の大水害というように、天災まで抜目なく猛威を振つていた時節であつた。

「陽なた丘の少女」「もぐらどんもぽつくり」いずれも中村地平。「セル（小品）」豊田正子。「藁」中山義秀。「ぬすみぎき」深田久弥。「徐州戦記」（三百枚）火野葦平。「静かな魂」阿部知二。「胡蝶と鯉」坪田譲治。「鮑慶郷」上田広。「晩夏」窪川稲子。――以上。

断わつておかなくてはならないが、もともと気ままな乱読ぶりであるうえ、気ままに月評にとりあげただけなので、以上は十三年初秋における発表作のほんの一班をあげたにとどまるわけである。「日本評論」が「精神総動員の再出発」なる特集号を出し、石原純博士その他に書かせたのも、この秋のことだつた。同じ雑誌に上林暁が「ちちははの記」を書き、寺崎浩が「大陸の祭典」を書いている。ここで考えると、寺崎氏が新京、哈爾賓などへ旅行したのはやはり十三年春あたりのことだつたのではないか？　新京文話会は、例の青葉グリルに氏を招いて一夕話を聞いた。亡くなつた今井一郎氏が幹事役で、こまめに動いていた姿を思いだすが、何を話合つたか、まるで記憶にない。ただ寺崎氏が「新京の駅を出たら、何ともいえない変な匂いを感じたが、あ

れは何の匂いでしよう」と尋ねたのに、今井君が即座に「馬糞の匂いでしよう」と答えていたのを思いだす。新京の街々に馬軍が走り、遠慮なく馬糞を散らす。それが文字どおり黄塵となつて、旅行者寺崎氏の鼻をくすぐつたというわけだ。後に新京の馬車は、馬のお尻の下にズック製だかの馬糞受けをつけて走ることになつたが、こんな馬の「おむつ」は馬車夫の関知の埒外にあつたとみえ、たまりさえすれば片つ端からふるい落していたから、結局何の役にたつしろものでもなく、馬自身にとつても、ずいぶん邪魔なものがぶらぶら揺れているだけのものだつた。これと類似の役立たずの標本は馬車夫のマスクで、これは新京にペストがはやつたとき、偉いお役人の工夫でつけさせることになつたものだが、連中はすつかり邪魔にしてアゴのさきにぶらさげて走つていた。檀一雄君がそれを見て「みんなおまじないと心得とるんじやろう」と冷かしたのは無理のない話だつた。

さて、新京駅からすぐ左折すると、まつすぐ行つたつき当りが城内で、賑かな中国人街を形成していたし、駅の近辺にも中国飯店が蝟集していたから、例の豚料理やニンニクの匂いも、不思議なカクテルをなして寺崎氏の嗅覚をおそつたに違いない。かくて「何ともいえない変な匂い」となつたわけだろうが、質問されてわれわれに即答出来なかつたところは、暗々裡に感覚が満州ずれして鈍磨し去つていたからか。

閑話休題として、序でに書きとめておきたいのは、同じ文芸誌「医科」の名である。これは奉天にあつた満州医科大学（前身は南満医学堂。大正五年から九年まで木下杢太郎氏が在任した）文学部から出されていたもので先輩として高木恭造、冬木羊二（白石義夫）福家富士夫その他の諸氏があり、以下何号かにわたり多数の文芸家を生みだしている。高木氏は主として詩の分野で活躍し、冬木氏は「青き夜の医師」福家氏は「眠剤」なる創作集を出して特異の作風を誇つていた。前者は昭和十三年、モダン満州社から、後者は十二年、たしか自家版として刊行されたものである。

この二冊と、十三年刊行の竹内正一氏（作文同人）の「氷花」は、つつましやかながら充実した短篇集として、今なお忘れかねる刊行物であつた。前述の通り、筆者は寛城子なる一匡街の家から、道のりにすればほんの二三丁さきにある満映スタジオに通つていたわけだが、それは例の駅ホーム改造の俳優部屋まで行く途中にあつた坪井与君の家の並びにある、ロシア人家屋を改造した事務所だつた。樹陰のふかい事務所には初夏の木洩日がおち、誰も監督するものもない部屋部屋に、専門、にわか仕立て（筆者らもその組だつた）の各シナリオライターが好き勝手な方角へ机を向きかえながら、それでも神妙にシナリオ原稿を書いていた。

十一章

寛城子の満映企劃室——喜多広行——近藤伊与吉——古いロシア料理店

その作者部屋（？）には、お昼ちかくなると喜多広行なる中国語の達人で、容貌から風格まで中国人そつくりという、あたかも水滸伝中人物のような豪傑が飄然とあらわれ

「さあ昼飯にしよう。パンとカルバス、それに白幹児はどうかね？」

などと皆から代金を徴集し、お供をつれて二酉街の中国人雑貨屋へ出張する。ここはロシア人部落だけあつて、パンやソーセージ類は質もよく種類も豊富だつたし、バター、牛乳、蜂蜜何でもござれの重宝さだつたから、安上りで手軽な食事といえば、この喜多式がいちばんてつとり早かつた。白幹児というのは、今はどなたもご承知のとおり中国焼酎の一種だ。アルコール度数四五十度におよぶのまであり、陶製の壺から半斤入り、一斤入りのブリキの漏斗で汲んで売つてくれた。慣れないうちは独特の臭気にヘキヘキするが、慣れれば強烈、透明の液体に、何ともいえぬ魅力を感ずるようになる。もちろん質は上等から下等まで幾種類もあり、熱河産のもの、白城

子産のものなど上質とされたようだが、それにもまして北京・石河荘附近の白幹児となると果物に似た芳香を放ち、とろりとした舌ざわりが何ともいえずよかつた。いずれにせよ火をつければぼうつと青紫色の焔をあげて燃え、火鍋子（ホーコーズ）の燃料になるくらいだから、日本人には少しきつすぎると思われるほどのアルコール飲料である。寛城子にこそなかつたが、新京市内には三四箇所の醸造所があり、いずれも何々泉とか何々湧などの屋号を冠して発売していた。とにかく中国に同化しようというからは（どうも本気のようだつた）ことさら汚穢な料理屋で白幹児を飲み馴れるのが序の口であると、これも喜多先生あたりに吹込まれたのが悪縁となり、終戦後などはことさら高価な日本酒は飲めず、飲みおぼえた白幹児に酔いしれ、あたら体をそこねたその道の紳士も、幾人となくいた筈である。

またまた閑話休題となるが、とにかく勤務中、勤務先きで酒を飲むなどは、どこの国にもない図だつたろう。それにしても昼の一、二時間を、車座になつて白幹児を飲み、カルバス（モスクワ風ソーセージ）を噛るのが、まるでピクニックにでも出かけたようで何ともいえず楽しく、とうていやめられるものでなかつた。先達の喜多豪傑ときてはよほど中国化していたとみえ、こんな芸当は平気なばかりか、中国語だとドモらないくせに、日本語となると「ドド」とドモる。そのドモリの長広舌を聞き流しながら、みんないい気持ちで大平楽をならべていた。ニッケ桜上に

あつた満映本社の連中などは、この不良グループを何と評していたことだろう。が、近藤伊与吉先生が李香蘭を売込みに東京へ出張して帰つたときなど、企劃室の面々を引連れて昼頃から附近のロシア料理店へシケこみ、ビールとウォッカでしたたか酔わせてくれた記憶もあるから、寛城子といえば、自他ともに一種の「治外法権」が意識されていたようでもある。ちなみに近藤氏がロシア料理をご馳走してくれたのは九月半ばか末のことで、さわやかな秋風とともに、窓にたらしたレースのカーテンに、やや暑い午後の陽がさしていたのを思いだす。この料理店はビア樽然と肥りかえつた老ロシヤ人寡婦が経営し、中は相当に広かつたが、客は日に四組か五組あるかないかといつた心細さだつた。とにかくひつそりしたもので、あれでよくやつていけると感心されるような不思議な経営ぶりだつた。中央にグリーンのラシヤを張つたポケット式（?）の撞球台が鎮座し、片隅にカッチンカッチン佗しい時を刻む大時計とならんで、わずかにあり日の栄華を物語るようだつた。北鉄時代（ロシヤ統治期）には、さだめし音楽なども鳴りひびき、綺羅を飾つた北鉄従業員たちで賑わつたことだろうと想像されるだけの店だつた。一日の勤務を終えて家へ帰つても、そこも全く佗しい長屋住いで、遠く輝く新京の街の燈火を見やりながら、チェホフの「燈火」を思いだしたりツルゲーネフの「煙」を思いだしたりした。どこかその辺に、そういつたロシヤの作家でも住んでいそうな錯覚もあつたのだ。

十二章

職業作家と勤労者文学の問題——ホテルの菊池寛一行——「文話会通信」

前に「貧乏な文話会」と書いたが、全くその通りで、例えば文芸年鑑を発刊するにしても、どこにも発行を引き受けてくれる書店はなく、会の会費や、特志な会員の拠金くらいを頼りに、とにかく上質の紙を使つた、相当頁数のある年鑑を出すのであるから、編集費も原稿料も出る道理がない。

満州で出版業をもくろむことなど、夢にも考えられない時代だつた。出版するとしても、ごく狭い、限られた範囲のものばかりで、文芸物に手を染める冒険など、誰ひとり敢てするものはなかつたわけだ。それがあと二三年すると、急に文芸専門の出版社が、そこにもここにもウヨウヨ輩出するようになるのであるから、時代の変遷というものも不思議である。とにかくそういつた時代に、何ら報酬を期待せず、こつこつ自分らの手だけで、まがりなりにもこの種の事業が実現したというのは、その衝にあたる人々が他に商売をしているとか、或いは満鉄その他から給料を

受け、生計に苦しむことなかつたから初めて出来たので、このことはひいて満州の文芸というものを、特殊な色調で染め上げる結果をも招いた。後に青木実氏などによつて「勤労者の文学」なる旗印しがあげられるにいたつたほど彼ら文筆人は或る独得の社会環境におかれていたわけだ。

生計に苦しまずに創作生活が送れるということは、或る意味では理想的なことである。しかし勤労しながら創作するというのはどう考えてもこれは二重生活である。何かの意味で、矛盾や桎梏の起らぬ筈もないし、自然と創作生活に遠ざかるということも起りがちであろう。

菊池寛氏や小林秀雄氏、横光利一氏が、そろつて来満したのは昭和十六年と記憶するが、このとき宿舎のヤマトホテルを訪れた筆者が、初対面の菊池氏に向つて、臆面もなく質問したのも、同じこの問題についてであつた。そのころ筆者はすでに満映をやめ、創作専門で立とうとする矢さきだつたが「勤労しながら」文学をやろうという人の多い満州に住んでいては、自ら異端の感を拭い得ない。かたがた自分の考えをジャスティファイするためにも、こういつた先輩の助言が欲しかつたのだ。

菊池氏は機嫌よく筆者を案内し、人気のない廊下の片隅におかれた長椅子に招じてくれた。そしてどこかせかせかした口調で、しかし考えるに及ばずといつた調子で、即座に断定した。

「ぼくらの友人を見ていても、食つて行く途のついている人たちは、だんだん創作しないようになつて行つたね」

見ていると氏は、脚が太儀なのか、片脚を折り曲げて長椅子の端しに載せかけている。綺麗に拭つてはあるのだろうが、靴穿きのままで、靴のかかとがソファの覆ひをこすつているといつた始末だ。

背が低くて、丸まつちい菊池氏が、ソファの上で片脚をかかえるような恰好で、文学初歩の問題を教えてくれる図は、今から思うと気の毒でもあり、岡本一平の漫画めいた感じもあるが、氏自身も新聞の通俗ものしか書かなくなつた——それすらも、もう書かなくなつた——当時の心境を思うと、案外こんな文学初歩問題も人から問われてみれば、切実な答えを与えずにいられぬものだつたかもしれない。

こうして話しあつているところへ、ぶらり小林秀雄氏があらわれた。案内役らしい人が一緒だつたが、長椅子の前へ立ちどまると、すぐ菊池氏の方から問いかけた。

「吉林はどうだつたかね」

「ええ。鵜飼いを見せてもらいましてね」

小林、横光の両氏は、新京から二三時間ほどの古都吉林の観光に出かけたらしい。菊池氏は疲れて留守番役にまわつた——というところだつたらしいのである。

お互いに話があるようすなので、筆者は匆々に辞去したが、つまりこのころまで「勤めながら書く」或いは筆一本で立つといつたごく初歩の問題が、筆者らをも含めて、相当大きく立ちふさがつていたわけだ。が、専門化への声は、案外早くおこり、昭和十六七年ごろから新聞雑誌が競つて文学ものを高く評価し、それに伴つて文芸図書出版の途が開けて行つたのも、考えてみれば当然の成り行きだつたのだろう。

このころ大連文話会は、四六版四頁の「文話会通信」を発行し、会員執筆メモなる欄を設けて、あらゆる作家の毎月の作品名を調査し網羅していた。小説ばかりか、片々たる雑文の名まで収載されていたから、あの根気よさには頭が下る。こういうことは専門作家などには、到底出来ない芸当で、素人で、事務的な律義さがなくては、とても真似の出来ないわざであつた。

この「文話会通信」は、後に（十五年）二十四頁に増頁され、中に満文版四頁を挿入して、本格的に会員の動静、寄稿を収録する機関となつた。

十三章

「満州行政」――満州国官吏タイプ――新京イデオロギーと自由主義

雑誌「満州行政」は新京興安大路にあつた満州行政学会の機関誌で、満州国官吏が会員である関係から財政的基礎はしつかりしたものだつたが、行政・法律等の評論が主体となり、しぜん誌面が固くなりがちなのは止むを得なかつた。これを救おうとして、ひろく在満の作家に呼びかけたのが、理事長新井練三氏であり編集長の大阪巌氏だつた。

新井氏は古い早大出身で、頭髪をいつも真中からきちんと分け、仕事が終るとヤマトホテルの撞球室に現われてキューを玩ぶといつた、どこかイギリス紳士を思わせる温厚な人柄だつた。が、べつに気取つたところなどなく、会えばよくニッケのお茶を誇つたり、ホテルの昼食に誇つたり、とかく若いものと一緒に雑談するのが楽しみのような、ごく砕けた態度の持主だつた。（この種のオールド・リベラリストが新京のみならず、当時の満州全域に意外に多く点存したことは、誰しも知る事実である。前に書いた城島舟礼氏がそうだつたし、満日文化協会の杉村勇造氏また然りであつた）

この好紳士を助けて側面から文芸欄、随筆欄などの拡充に努めたのが大阪氏であるが、これはまた信州の山村から出て来たばかりのような、失礼ながら朴訥そのもののような人柄で、相当な年配とみえたが、若い文筆人に対しても慇懃な物腰を崩さず、訥々と語る話しぶりに真率さが溢れて、誰にも好意をもたれた。昭昭十二、三年から十四、五年にかけ、事実満州行政が文芸面に

寄与したことは相当なもので、少くとも満州の作家・文筆人と称する人で、一度や二度同誌に寄稿しなかつたものはあるまいと思われる。ことに同誌の特色は毎号にわたり満系作家の飜訳作品を掲げたことで、訳は主として大内隆雄（山口慎一）が当つていたようだが、かなり長い作品まで掲載していたところに、並々でない熱意を窺うことができた。

大阪氏はじつによく新京の街々を歩き、こまめに小説や評論や随筆を依頼して廻つていた。後にも書くが、酒仙奥田技佐（鈴木梅太郎博士の愛弟子と聞いた）のお酒随筆が二三号に亘つて掲載され、生唾をのみのみ愛読した記憶も懐かしい。一体に満州の雑誌は、他の雑誌もそうだが、随筆・人文料学的研究といつた方面にかくれた執筆者を探し出し、その研究発表が予想以上の収穫をあげていたあたりに注目すべきものがあつた。大連で出ていた「満蒙」もその一つで（というより、その随一のもので）同誌創刊はもちろん「満州行政」などより古く、だいたい大正期に溯る筈であるが、同誌について青木実氏の（「北窓」第七号）云つていることが、ちようど筆者の前説を裏書きしているようなので、ここに写させてもらう。

「時事的論文には大きな特色を見せなかつたが、満州・支那・蒙古に関する民俗学的問題や、地誌、歴史、考古学的研究には、方法論の如何は一応問題外として、相当な業績を残したといえよう。たとえば満、支に関する風俗、習慣、信仰といつた問題など、同誌の索引（昭和十年に第

一号より一八〇号までの総目録が刊行されている）によつて検索すれば、大概の事項は研究発表されている」

これは春山行夫氏の「満州の文化」から孫引きさせて貰つたものだが、この所説は大なり小なり満州の雑誌全部について当嵌ることなので、いま中国の世となつても、いずれも一応研究の対象として保存されているのではないかと想像される。ただしその当時も思い、今もその感じを拭いきれないことの一つは、読者がだいたい満州国官史ということになると、せつかく文芸作品をのせたところで果してどの程度に読まれるか、何らか反響があるのかないのか、どう考えても悲観的な結論しか出てこないのは寂しいことであつた。なるほど新聞雑誌に必ず「月評」ふうの文章が載り、ひろく各雑誌の作品が論じられはしたが、それはそれきりのもので、読者と作者との間に、常に或る溝渠、ズレといつたもののあることは否めなかつた。商業雑誌でない以上、これはしかたのないことであつたが、しかしそのためにも、権威ある綜合雑誌が生れなければなるまいと誰しも考え、ひいて両三年後には、実際それにこたえる新雑誌の誕生を見るようにもなつたのであつた。

その頃の満州国官吏というと、よく飲みよく遊びもしたようだが、協和服を着込んで建国精神や協和理念を説くあたり、颯爽たる気概にむしろ筆者などアテられ気味で、渡満当初はひどく当

惑したことを思いだす。新京だけならまだしも、彼らは日本へ出かけようが大連あたりへ出張しようが、臆面もなくこの「満州風」を吹きまくつたから、ずいぶんヘキエキする向きが少くなかつた筈だ。そこでこの「風」を新京イデオロギーと尊称し、満鉄マンあたりによつて代表される自由主義的な大連イデオロギーなるものが、はつきりこれと対立することとなつた。もともと関東州や満鉄附属地に住み、長年に亘りこつこつ一家をなしたという連中は大正年代の思潮を背景とすると同時に、自由港大連の影響もあつて、考え方が小市民的、自由主義的なのは当然である。これを大きく支えるのが、満鉄という大温室であつた。平たくいえば大学出を列車車掌として使用し、行く行く幹部に育て上げるという資本主義下の満鉄背広服式考え方と、軍部や協和会を背景とし、強力な統制国家を推進させようとする満州国官吏の協和服式思想との対立ともいえるものであつた。別にいえば新京イデオロギーなる思考形式が、ナチやファッショの影響もあつて恐ろしく鼻柱が強く、けつきよく「乃公出でずんば」式のヒロイズムが鼻につく気配が濃かつたのに対し、いつぽう日本の非常時体制をも併せ考えるとき、十年一日のような、そしていかにも腰弁的で個人的な立身出世主義のかたまりともみえる大連イデオロギーなるものが、逆に古風な感じで映つたことも事実だつた。

とはいえ、この二つの考えはあくまで概括的で便宜的な分類にすぎず、大連に住んでも国家統

制の理念に生きる人も多かつたろうし、新京に住みながら、あまりに過度の政治意識に反撥し、軍部独裁、思想統制の独善にあきたりない、いわゆる自由主義的な生きかたに共感する人士も少くなかつたことは、前にも少し触れたとおりである。

筆者なども、どうしても協和服というユニフォームになじむことが出来ず、背広一色で通したのは、楽屋をあかせば服も着物も一通り揃えているのに、余計な制服など新調するに及ぶまいといつた、甚だ個人的な考えから出たものだつたが、一方にはご時勢に反撥する天邪鬼な気持ちが多分に存したことも否めない。

序でながら、前引した「満州の文化」のうち（雑誌）の項目に「満州国からは二八六種の雑誌（康徳七年度末）が発行されているが、その大部分は学界、官署、会社などの機関誌乃至専門雑誌で、日本に見るようなジャーナリズムによるものは、若干のものがやつと芽を出しはじめたにすぎない」と述べているのは至当である。同書の記述は年代が少し後にズレるが、その中に引用された雑誌名の主なものだけ拾えば次のとおりになる。

「芸文」「作文」「満州詩人」「北窓」「収書月報」「書香」「大陸科学院彙報」「地質調査所彙報」「国立中央博物館時報」「大陸科学」「満州経済」「満州評論」「満州行政」「満蒙」「新天地」「旬報」「モダン満州改題満州」「観光東亜」「満州観光」「満州グラフ」「協和」

そのほか筆者の記憶する中に「女性満州」「満蒙評論」「健康満州」「馬事公論(?)」「宣撫月報」「満州映画」「ますらお」「満州短歌」などがある。

十四章

ふたたび一匡街の家——大同劇団と藤川研一——森斌——文化人いろはがるた

筆者が住んだ一匡街の家というのは、もとロシア人の住宅をこまかく幾つにも仕切り、日本風に造作し直したもので、あわせて七八家族も住んでいたろうか。文字どおりの七軒長屋だか八軒長屋である。

さて昭和十三年秋になると、坪井与君は新妻を迎えて新京市内に移り、詩人の矢原礼三郎君また市内へ去り、寛城子の異色人種にも多小の異動があつた。家探しというのはそのころもなかなか厄介で、筆者らはじつと居据るよりほかなかつたが、当時ふと耳にしたとこによれば、まことに偶然事ながら、筆者の家には、前に藤川研一夫妻が住んでいたことがあるらしい。藤研といえばそのころ大同劇団の主宰者で、よき協力者森斌君と並び、押しも押されぬ一方の旗頭としてお

さまつていた。が、その彼も寛城子時代はいわゆるご難時代だつたらしくつぶさに浮世の辛酸をなめていた——と、当時を知るという近所のオジさんだかオバさんの話をきいたことがあつた。何度も書くとおり、まつたく佗しい棟割長屋の一軒に、あの「雨ニモ負ケヌ」藤研が、どんな顔して毎日を送つていたか、またそんな事実があつたかなかつたか、つい確かめる暇もなかつたが、偶然同じ家に住んだという「伝説」だけ披露したくて筆が横すべりした。

高粱社の奥一説によれば、もと築地小劇場出身の藤研は、昭和七、八年ごろ（大同一、二年）地方巡業の劇団長として渡満、吉林あたりでご難に見舞われ、劇団解散の悲運に陥つた。夫妻は辛うじて新京へ引上げたが、どうにも将来の見通しがつかない。それがかれの寛城子時代ということになるわけだが、やがて大同三年は康徳元年と改まり（昭和九年）満州国の基礎がようやく固まると同時に、政治思想上の支柱たる協和会の運営が軌道に乗るにいたつて、藤川君の上にも明るい日ざしがさすことになつた。だいたい協和会の板垣守正（板垣退助の孫で土方与志の従兄弟に当る。劇作家として活躍。昭和二十六年夏歿）当時の情報処（後の弘報処）勤務の磯部秀見、岡田益吉諸氏の合作にかかるものときいているが（財政的には新京副市長関屋悌蔵、甘粕正彦両氏の後援があつたという）藤川を主班とする大同劇団なる演劇団がみごとに誕生、協和会の専属として地方宣撫工作の大役を買つて出るはこびとなつた。ときに康徳四年（昭和十二年）秋

のことだつたが、これはちようど満州映画協会設立と時を同じくしている。ただし実際の創立は満映より一週間か十日早かつたそうで、おまけに「大同」というのはニッケで相談会のとき、ふと往来を見やつた藤研が「ここは大同大街。よし、そのまま頂戴しよう」とさつそく劇団名に援用した、という楽屋オチのような裏話もついている。

爾来劇団は何ら経営上の苦慮なく、民情なお定かでない熱河その他に地方巡演をこころみ、満系俳優による民族協和の文化工作に熱意を傾けた。が、一、二年のうちには日系俳優をも集め、公会堂、満鉄クラブなどを利用して新劇上演につとめたことは、誰しも知るとおりである。手許に上演目録がないので脚本名をあげることは困難だか、後年日本で巡演のときは東宝劇場、東京劇場などで長谷川濬作「国境地区」牛島春子作「王属官」もつと後には亀屋原徳作「貝殻島にて」など上演したことが思いだされる。（満語劇部はゴーゴリ「検察官―巡閲使と改題」その他を上演している）

そこでまた余談になるが、康徳八年（昭和十六年）夏ごろ、当時新京日日新聞社にいた大内隆雄ほか二三の悪童が、文化人いろは歌留多なるものを戯作、同紙上に掲げて物議をかもしたことがあつた。その「う」の部に「うわき性なは藤川研一」とあり「ゐ」の部に「ゐなか廻りの森斌さん」の句がみえる。藤研のどこが浮気性なのか、筆者にはよく分らない。或いはあちこち事業

に首をつつこみたがる性質があるというふうにでも解釈すれば、後年（終戦後）東京へ現れるとみるや、たちまちリリヤ・アルバ株式会社を組織して理事におさまり、細川ガラシヤ夫人伝を映画化すると大宣伝をブツたのも束の間でいつの間にか関西へ姿を消し、消したと思つたとたんに東映プロデユーサー、お次には教育テレビ局で新たな熱意を燃しているなどいつたあたりに、その片鱗が見られるのかもしれない。森斌はもと画家出身だが（昭和十九年比島で陣歿）経営の才を買われて劇団入りをしたといわれる。この人の「田舎まわり」は大同劇団同人として当然すぎる行為で、前述のとおり協話会専属の宣撫工作員だつたことを思えば充分納得いくことである。（註・この歌留多は概してヨタが多かつたが、最後の「京」の部の「京の夢根岸の夢」あたり、日活からマキノ光雄とともども満映入りした根岸寛一氏の人柄を偲ばせてやや妙というべきか）

なお十三年秋には同人誌「満州浪曼」が生れ藤川君は論説欄に「満州演劇の建設」という論文を寄せている。大連の演劇人糸山貞家氏と並び、彼もまた精力的な一演劇人であつた。

十五章

近東綺十郎（桟朝男）――大連詩壇のことども――「塞外詩集」その他――「亜」
――加藤猛太郎

昭和十三年初夏には、近東綺十郎が哈爾賓から北京の華北交通公社に転じた。彼は満州文学草わけの一人として早く昭和五、六年ごろ大連で出た「大陸文学」「街」などに詩や小説を書き「線」（これは「作文」の前身と目される）の青木実や竹内正一などと並んで将来の活躍を予想させていた—と大内の「満州文学二十年」に紹介されている。詩篇「遼河の春」書出しは次の通りである。

「冷えた陽炎よりも動かない大地はまだひ乾びた恐竜の木乃伊の如くによこたはる、最後の馬賊を撃ち殺した巡警の最後のピストル。つい一週日前の北団林子（緩化）からの通信である」

また小説では「街」に出した「雨と肉体と」という、大内評によればやや傾向的な作品があつた。昭和五、六年といえば、大連で新しい詩の運動が盛んだつた頃で、五年には安西冬衛、滝口武士、加藤郁哉、小杉茂樹、島崎恭爾、城小碓らの詩をあつめた「塞外詩集」が発刊され、このうち安西氏はすでに「軍艦茉莉」によつて日本詩壇にも名を知られており、その前年に出た古川賢一郎の「老子降誕」さらに古く溯れば大正十三年から昭和二年にわたる北川冬彦、安西冬衛氏らによる「亜」の運動はとくに清新強力なものとして詩壇の歓迎を受けるといつた調子で、満州文芸の発祥はまず大連におこり、しかも「詩」がその中心をなしたというのは、大連の歴史が古いと同時に、大阪商船ラインによる対岸は門司・神戸であり、一方また外国航路による遠望がカ

ルカツタでありマルセーユであるなどの海洋的気象に負うところ多かつた故かと想像される。

（春山行夫氏「満州の文化」は満州詩人について次のようにいう。満州の詩人については一般にあまり多くのことが書かれていないが、前にも触れたように、満州文学がこれらの近代詩人をもつていることは——註・春山氏は安西、古川、滝口諸氏のほか城小碓、八木橋雄次郎、井上麟二、島崎曙海、逸見猶吉、小杉茂樹、野川隆、岩本修蔵、高木恭造諸氏の名を列記し、中でも逸見については「新古典主義的な感覚と一種の近代的野性をもつている点できわめて独自であり、満州詩人中で最高位を占めるものであろう」とのべている——日本を除いて、隣接せるロシアにもシナにもみられないところでその点を大きく評価しなければならない）云々。

そのころ近東（桟朝男）は旧長春に住んでいたらしいが、上述のごとき空気を吸つて、まず詩によつて文筆活動を始めたというのも、自然なことであつた。が、筆者が新京（長春）に移つた昭和十二年、近東はすでにハルピンに移り次で北京転出という順序となつて、遂に在満中彼とは顔を合わす機もなく過ぎた。昭年十七年偶然上京、これも東京支社詰となつて在京中の彼に会つたのが初対面ということになる。このとき紹介の労をとつてくれたのが満日東京支社の加藤猛太郎君で（支社長は現パ・リーグ会長中沢不二雄氏）折から東宝劇場で上演準備中だつた拙作「春聯」の舞台稽古にこの三人が立会つたことは、前に「文話」誌上に近東が親しく書いてくれてい

る。このときの初印象は、スマートな外貌の蔭にいかにもがつちりした体軀が精力的充溢をしのばせ、なるほど、東京文話会の支部長役にふさわしいと思われたが（会社勤務のかたわら、彼はそのころ文話会の仕事でひろく各方面と折衝の任に当つていた）もろくも一昨三十三年病歿したのは惜しいし意外でもある。

十六章

「高粱」休刊――新京日日新聞――「わが鎮魂歌」――「文芸集団」――「新京」
冬木羊二――竹内正一

奥君の高粱社がモダン満州社に移行したことは、前に書いた。が、その中間に雑誌「新京」の介在することを洩らしている。高粱は七年九月創刊以来、時に休刊しながらも十年十月まで続いたが、遂に当月号を以て休刊の余儀なきにいたつた。折から大内隆雄、近東綺十郎の両名は「新京日日新聞」に仲よく机を並べ、文芸欄編集に力をいたすいつぽう「高粱」あたりにせつせと寄稿していたが、せつかく寄稿家の願ぶれも充実した十月号をもつて廃刊の憂目に逢つたのだ。終

刊号には、露西亜墓地の秋（吉見明）秋草の想出（佐和山一郎）秋の女（群家陸夫＝近東綺十郎）文芸家とダンサー座談会（大内・近東・佐和山などに対し、ダンサーは新京会館今村久米子ほかが出席）他に「九月の文芸界」とか「映画のページ」とか「十月のレコード界」などと一通り賑かである。

で、この「九月の文芸界」なる一文を一瞥すると「日日文芸座談会」「高木恭造氏『わが鎮魂歌』（椎の木社版）上梓」「新京日日短篇小説募集（一等五円二等三円）」「雑誌『医科』発刊」などの報告が見える。この「新京日日」の小説募集は後に多数作家を登場させる機縁を作り、ひいては雑誌「文芸集団」を刊行させる遠因をなしている点で注意してよい。当選作家名は分らないが、めぼしい人々の名を拾うと次のようになる。今村久米子、今村栄治、下島甚三、庄野ふみ（晶埜ふみ）泉徹雄、棚木一良、桃北好澄、大脇一雄、高木喜久蔵、佐和山一郎。右のうち一二を除けば、たしか全員文芸集団同人であつたと記憶する。今村久米子はダンサーをしながら小説をかき、姓は同じでも別に関係はない今村栄治は半島人というのに朝鮮語を知らず、日本語で小説を書くという変り種、後に文話会の事務局員として吉野治夫君を助けた。高木喜久蔵はたしか明治製菓勤務だつたと記憶する。しかしこの「文芸集団」も六号でつぶれた。

ここで前に戻つて「新京」のことに触れるが、これもまた非常に短命で、十三年五月には早く

も小原克己、奥共同経営になる「モダン満州」へと移行している。この表題はいうまでもなく当時文春社発行「モダン日本」をもじつたもので、内容もそれよりもつと濃い通俗性に平塗りされ、例えば創刊匆々から「平康里（ピンカンリ）（中国遊廓）哲学」「シナ風呂哲学」といつた塩梅で、イロケとニンニク臭がぷんぷんしていた。経営もだいたいカフエー、料理屋の広告で賄うといつた、いわば現在の（以前と多少は変つたらしいが）「観光新聞」式編集と経営で繁華街にどんどん販売網をひろげて行つた。筆者らにとつてこそ縁の遠い雑誌だつたが、弘報処の丸山海介こと磯部秀見など、毎号にわたつて川柳的ウンチクを傾け、のちに「満州浪曼」同人たる長谷川濬あたりも準同人格として寄稿したほか、十三年には奉天医大出身の冬木羊二こと白石義夫の「青き夜の医師」をモダン満州社出版として上梓したことは前にも書いた。因みに冬木氏は「サンデー毎日」に「青島から来た女」が当選、後に映画化されて評判になつた作家で、作風にやや通俗味は見えるが、医科出身らしい緻質さと真面目さで異色を放つていた。「青き夜の医師」はやはり今年度出版の竹内正一「氷花」（作文社刊）と並ぶ好収穫となつたわけである。

竹内氏は早大在学中、たしか浅見淵氏と同期だつた筈で、昭和六年ごろの大連時代から各種雑誌に作品を発表、前にも触れた「友情」「ギルマン・アパート点描」その他の作品が、ほぼ一冊の作品集をなすまでになつたところから自家版として三百部を上梓したものであつた。しかしせ

つかくの好短篇集が、限定版であるため広く一般の眼に触れないことを惜しみ、次の機会には、ぜひこの中からも幾篇かを抜いて一冊とするよう、当時の月評に書いたことが思い出される。哈爾賓に住むようになつてからの彼は、周囲に群れる白系ロシア人の生活に観察の眼を向け、独特の詩情をたたえた短篇を次々に発表するにいたる。

十七章

矢原礼三郎——ふたゝび木崎竜——杉村勇造と季刊誌計画——佐藤好郎と三枝朝四郎

この年の秋、矢原礼三郎君が新京のアパートに移つたことは前章に書いたが、いざ転居を前にした一日、筆者と二酉街の日の出食堂だかで別盃を酌みながら、雑誌発行の計画を語つたことがある。その頃までには彼も満映の脚本を一本や二本仕上げていたと思うが、題名などハッキリしない。しかし、もともと関東州旅順出身のこの少年詩人は、先輩に北川冬彦があり、大連の詩誌「鵲」に関係するかたわら東京で出る「麵麭」などにも寄稿するという調子だつたから、本格的に映画一筋に打込むには多分に詩的情調が強すぎ、本人自身がそれとなくその間にギャップやズ

レを痛感する気配が濃かつた。

で、別盃のときも会話は自然と映画そこのけで、まず雑誌計画から話がほぐれたのも当然だつた。

「この秋のうちに、ぜひ雑誌を出したいんだよ。それも、どこへ出してもヒケをとらないようなのを出したいのだ」

矢原はもちろん大賛成で

「それはいい。市内へ引越しても大いに協力するよ」

矢原とはそれで別れたが、暫くして弘報処なる木崎竜（仲賢礼）に会い、同じ計画を語るはこびとなつた。（矢原は終戦後東京に住んだが昭和二十四五年のころまだ若くして逝いた）

当時木崎は長谷川濬、故別役憲夫らと一緒に同人雑誌「白想（パイシャン）」を計画中だつたが、うまく軌道に乗らない旨を仄聞、いつそ新同人を集め、新しい計画に乗り換えてとは申入れることになつたわけだ。木崎という人物はスタイリストの面影があり――彼も今は故人なので、批評めいたことは避けたいが――とにかく文学というものを生活から截断した別の高みにおいて仰ぎ見るていの、どこか「文学部教授」といつた風貌があつて、反撥するものは先ずそこに反撥し、キザで鼻もちならぬように思いこまれてしまう損なところがあつた。現に筆者なども最後ま

でこの感を拭いきれぬ一人だつたが、そのくせ彼の別の魅力は捨てかねた。文芸の士としては、或いは教師としてさえ、彼は臆病で内気すぎ、どこか精彩に乏しい憾みはあつたが、それよりもむしろ実務の人として彼は適任であり勤勉であつて、加えて人を捨てない長所をあわせ備えていた。要するに常識円満人型であり、他人の胸裡を読み理解する能力に秀でているとこに、及びがたい徳を感じとつていたのだつた。

がそれにも限度があり、勤勉な能吏といつても、所詮は文芸の糧に育てられた夢多い一個の才子である。というところに、筆者らが彼の存在を必要とし、むしろ便宜としたい配慮があつた。文芸と俗事の中間に立ち、両者をとりもつ位置にあると思われるところに、彼を頼りとする理由があつたのだ。

だいたい木崎は旧帝大国文科の出身で、在学中「明治文学研究会」の一員として福田清人氏らの後に学んだと聞いたことがある。卒業論文は「島村抱月論」であつた。情熱的でもあり実践家でもあるが、どこかひよわく中途で倒れた抱月を語るのに、木崎自身が相応しい人柄だつたといえるのだ。ちようどその頃、彼は弘報処で「宣撫月報」という雑誌の編集に携わり、ソ連映画の研究などに打ちこんでいたのも、同じ情熱の現れだつたか？

その彼に新雑誌（実は季刊詩）の相談を打ちあけた訳だが、彼ややや沈吟のすえ、結局それは杉

村勇造氏に相談するのが捷径だという説におちついた。かくて間もなく、両人同道で満日文化協会なる杉村氏を訪れるはこびとなる。

案内されたのは、事務室の向いにある応接室で、テーブルを囲んでソファがならび、北窓からさしこむ静かな光線が、涼しく落着いた色調を醸している。

「さあ、どうぞ」

と椅子をすすめられ、木崎はいきなり靴を脱ぐと、ソファの上に胡坐をかいた。両肱を張つて膝の上におき、あたかも畳に胡坐して物申すという恰好になつた。是非とも相談にのつて貰わねば——と気負つた姿ともとれるし、逆にアットホームにくつろいだ様子ともとれる。

そのとき彼が、どんなふうに計画の口火をきつたか記憶にないが「ふむ、ふむ」と聞いていた杉村氏は、あつけないほど簡単に

「いいでしよう。やつてみてはどうです」

と頷いてくれた。

「三枝君が文祥堂の佐藤好郎君と親しいから、印刷は文祥堂に頼めばいいでしよう」

そこまで親切に教えてくれた。「よかろう」と云つてくれたからは、あとはどうにかなるだろう。肝腎かなめの財政方面のしめくくりはどうなるのか分らなかつたが、このさい鼈をつついて

蛇を出すに及ばぬことと、筆者はいつさい無言で通した。文化協会はすでに多数の印刷物を発行して、いわばその道のベテランである。あとはきつと文化協会が引き受けてくれるというのだろう。でなくては、雑誌など出来るわけもない。話はこれで済んだ——生坊主が悟りを開いたような顔つきで、木崎と筆者は応接室を後にした。

三枝朝四郎氏は同じ協会内部で写真関係を担当し、かたわら杉村氏の秘書格としてひろく諸方に顔を出していたようだが、じつはもと銀座サエグサの後とり息子で（四男？）文祥堂の主人とは同町内のよしみがあつたのだ。銀座の老舗の後とり息子が、何を苦しんで満州くんだりへ出稼ぎなどに現れたか、そのへんはよく分らなかつたが、あとで聞けばかなりロマンチックな事情も内在したようで、彼はつまり銀座のダンディとして初志を貫いた——といつた訳合いのものらしかつた。（佐藤好郎氏は東京本店へ復職後、三十一年夏病歿した）

やがて出来上つたのが「満州浪曼」第一集である。

十八章

「満州浪曼」創刊――根岸寛一・マキノ光雄（満男）の満映入り――荒牧芳郎

「満州浪曼」創刊号目次は次の通りである。

〔小説〕姉妹のこと（吉野治夫）伝説（長谷川濬）一つの記録（下島甚三）浙江旅社（福家富士夫）同行者（今村栄治）鶴（北村謙次郎）白日の書（横田文子）アリーヨーシャ（田兵・大内隆雄訳）〔詩〕霧宿（矢原礼三郎）なめくじの歌（坂井艷司）長城論（長谷川四郎）〔随筆〕雑草（町原幸二）六月の雪（坪井与）〔評論〕窓をひらけ（木崎竜）農村を描け（牛島春子）映画演技論（アイリス・パリー・松本光庸訳）満州演劇の建設（藤川研一）満州文化について（諸家）

右の顔ぶれを見れば分るとおり、執筆者を同人と限定せず各方面の寄稿を仰ぎ、同人誌というより文芸美術各般にわたる、一種の総合誌ふうのものを目指すのが当初からの意向であつた。第一、二集の同人は木崎竜、長谷川濬、坪井与、北村謙次郎、飯田秀世、今井一郎、松本光庸、横田文子、矢原礼三郎、大内隆雄の諸氏で三集から緑川貫、逸見猶吉、荒牧芳郎、岡田寿之の諸氏が加わり芸文界に隠然たる一勢力をなした。

表紙は今井一郎が「満州浪曼」の四字を明朝体で大きく刷り、その部分のバックだけ各集ごとに緑、黄などの彩色を施したのは、曾て清新な印象を受けたクオータリー「詩と詩論」あたりの装幀を模したものであつた。紙質もよく、ページ数も約三百を前後する大冊で、満州では異例の

出版といえたろう。

ただし、いざ上梓してみると毀誉は相半ばした。だいたい書下し専門というより、創刊号の創作は殆どすべて再録原稿だつたところから失望する向きの多かつたのは争えぬ事実だが、それにはそれで、当事者に平素からの持論があり、簡単に承服は出来かねた。中央的な文芸誌が欲しいということは前から云われていたことだが、それには毎月発行される雑誌が前にも書いた通り「満州行政」は官吏向き「満蒙」はだいたい関東州一円に限定されるといつたように、ごく範囲が限られ、せつかく発表される佳作も、殆ど一般の眼にふれる機会がない。もう一つ持論を云えば、文芸上の作品は、何も毎号の雑誌小説を追い廻す必要もない。単行本に纒つたものを、あとからゆつくり読む方法もあり反つてその方が作家に対して親切な場合もある

これらのことは、折りにふれて筆者らも述べ来つたことなので、クオータリーふうの刊行物を持つたのを機会に、まず如上の懸案を実行に移してみたわけだつた。

また一方、計画がたつやいなや編集にかかるという軽業を演じたため、ゆつくり原稿を書いて貰う余裕はなく、さてまた執筆を依頼するとしても、他の雑誌は多少なりいずれも稿料を払うのに「満州浪曼」が払えないというのでは、いかにも作家に気の毒で、とても「書き下しを」と頼み廻る勇気は出なかつた。このように、あれこれ重なつて、小説だけは再録ということで足を踏

み出したのであつた。その代り随筆評論のあるもの、最後の「満州文化について」なるアンケートなどいずれも新たに執筆を依頼したもので、まずこのへんでごかんべん願うよりほかなかつたのだ。

なおアンケート回答者に根岸寛一氏の名が思い出されることから考えると（或いはこれは三集の「文化担当者にきく」のときの覚え違いかもしれない。すると年代にちよつと狂いが出るが）同氏がマキノ光雄氏ともども満映入りしたのは、十三年夏から秋にかけての頃ではなかつたと思われる。人も知る通り、氏らは日活撮影所を担つて輝かしい功績を残したその道の先達たちであつた。満映は前製作部長亀谷利一氏がすでに華北（北京）に去り、後をおそつて、強力な製作陣容を整えるための来満となつたものである。

彼らより以前に、文化映画部に森信、高原富士郎、上砂泰造（有弘）諸氏ら多数の監督、ライターなどが来満したほか、根岸氏らと前後して荒牧芳郎その他も来満、満映は漸く本来の映画会社らしい多彩の表情を漂わすにいたり、寛城子スタジオも急に活気づいて行つた。筆者は相かわらず寛城子住いでニッケ楼上の本社へ行く用はなく、根岸とも会う機会なく過していたが、前記の原稿依頼を兼ね、初めて氏を訪れたのはいつのことだつたろう。が、初対面の氏はさいづち頭の小肥りに肥つた野武士然とした寡黙家で、派手な（乃至は興業師然とした——というのは根岸

という名の連想からだつたろうが）映画人種を想像していた筆者は、完全にあてが外れた。と同時に、野武士の血ならこつちも多少は受けついでいる筈の筆者は、多分の親愛感と好意を抱かされた。

「へえ、あんた、根岸さんには初めてか？」

傍にいた企画課の誰だつたか、筆者の挨拶を耳に入れると、呆れ顔で口を挿んだ。

「のんきだね。はて、こういうサムライもいたのかね」

十九章

マキノ素描——高原富士郎——「満州浪曼」創刊祝宴——小林秀雄と林房雄の講演——
逸見猶吉

序でにマキノ氏のことを書いておくが、彼の馨咳に初めて接したのも、同じニッケの二階にある理事室か部長室で、やはり十三年秋のことと記憶する。このとき根岸氏は常務理事、マキノは製作部長だつた筈だ。

人の知る通り、マキノ夫人はもと女優星玲子さんである。筆者が部長室に通つたとき、折りか

ら玲子夫人が幼い坊やを抱いて本社を訪れた際だつた。が、夫人は遠慮してか、階下の喫茶室に待機のままで、坊やを抱いて現われたのは若い社員の一人だつた。

マキノは坊やを両腕に受取ると、しきりにあやしながら、部屋に群れいる社員たちに話かける。が、坊やははにかんだように父君の胸に顔を押しつけたまま、声もたてない。マキノは満面御恐悦で

「こいつ、おれによう似てえらい内気もんや。——どや？」

子供は顔をかくしたままだが、マキノは度の強い目鏡を光らせ、白いワイシッツの胸を張つてのご託宜だ。

前に立つまま、にやにやしていた高原富士郎が、横を向いてぼそりと云つた。

「あんたに似たら、どんな子になるか分つたもんかね」

ここで前にも引いた新日所載のいろはがるたを探すと「れ」の部に「れいぎかまわぬマキノ満男」同じく「ひ」の部に「ひからびている高原富士郎」の句がある。マキノは小兵ながら肥満型、高原はニックネームをするめとつけられた痩身——といつたご両人の「対決」と思つて貰うと、場景がいつそうはつきりするだろう。

高原君は仕事熱心な監督だつたが、惜しいことに終戦前（十九年）新京で亡くなつた。

さて「満州浪曼」が創刊された、ちようどその当日、林房雄、小林秀雄の両氏が来京、満鉄クラブで講演会をひらいた。聴衆は八九分どおりの入りで、熱心に両氏の講演を聞いた。林氏はたしか「無題」小林氏は「歴史について」という演題だつた。

「これは水のようだが、実はお酒（ビール？）で」

と、これはまた案外なはにかみ屋の林氏は、洋行の代りに満州国を見学に来たとたいへんな謙遜ぶりだ。

小林氏の「歴史について」は、思索的な追求で、たしか当時の著作集にも収録されていたと思う。

講演が終つて、夜は南広場に近い厚徳福飯店で両氏歓迎会を兼ね「満州浪曼」発刊祝が催される運びとなつた。今井一郎君あたりの斡旋で費用は民生部から出たように思うが、はつきり憶えていない。いずれ文化協会も片棒かつがされたことだろうが、だいたい四五十人の参集者が大酩酊におよぶ酒量は、相当なものだつたに違いない。出席者全部に出来たてホヤホヤの「満州浪曼」が一冊づつ寄贈され吉例によつて杉村勇造氏の挨拶が始まる。

「こうして出来上りの本を眺めますと、表紙といい内容といい、どこからどこまであまり出来がよくない（笑声に混つて、さかんに「ノー・ノー」の声がきこえる。ごきげんの林氏である）

ので、すつかり失望しました。（「ノー・ノー」）ざつと覗き見したところがこの調子ですから、よく読んだら、さぞかし失望落胆することだろうと、情ない気がいたします。（またも「ノー・ノー」杉村氏声をはげまして）と云うのは実はウソで、こうして眺め返してみると外観内容ともに、たいへん立派に出来たようで（爆笑）」云々といつた長広告で、完全に聴衆を煙にまいた。

つづいて大勢の人たちが、それぞれ忠告をしたり、悪口を云つたりした。長谷川濬が酔つぱらつて小林氏をつかまえ「跋文がいいでしよう」と手前ミソを並べたら、小林氏は言下に跋文の中の一節「茫漠としてとらえがたい」というのを援用し

「さて、茫漠としたもんだね」と、手くどく応酬した。

横田文子女史がしやべりだしたとたんに、林氏の野次がとんだ。

「低くて見えないぞ。椅子に上れ」

「はいはい」

お文さん椅子に上つて声を励まそうとするところへ、つかつかと駈けよつた林氏は、やにわに女史の両脚をかかえてもち上げた。とんだ軽業である。女史は一本のビール瓶となつて直立したまま、しやべりつづける。林氏は顔を真赤に力み返りながら

「諸君、彼女は満州のジョルジュ・サンドですぞ。敬意を表したまえ」

いやはや、おかげで創刊祝いは賑かなものになつた。会が果て、扇芳亭グリルで飲み直しているところへ、矢原礼三郎が体格のがつちりした、協和服の壮漢をつれて入つてきた。

「知つているでしよう。ヘンミ・ユーキチさんです」

矢原の早口がききとれなくて

「え？　だれ？」

と聞き返すと、矢原はますますせきこんで

「知らないの？　ほら、有名な逸見猶吉氏ですよ」

顔の赤黒い壮漢は、我れ関せず焉といつたふうに、にやにやしながら席についた。逸見も今夜の会に出席し、矢原といつしよに後を追つてきたというわけだつた。

これが発端で、爾来八九年におよぶ逸見君との酒中交友のページがひらく。彼はそのころ、たしか日蘇通信社の社員で、雑誌「月刊ロシヤ」のために難かしい記事を書いていた。

二十章

「満州浪曼」目次――「満州作家選集」――大内の諸家紹介――「満州文学二十年」

大内隆雄の著書には、詳しい目次が褐げてあるから、序でに「満州浪曼」について、も少しつけたしておく。

第二集は筆者の代りに長谷川濬が編集を担当し、内容は次の通りだつた。

〔小説〕白眠堂径徂（竹内正一）家鳴に乗つた王（長谷川濬）浮雲（青木藝吉）狂人日記（長谷川四郎）隣り三人（寰犀・大内訳）満州の胎動（承認記念文芸当選作・工清定）魚骨寺の秋（同前・用章・大内訳）〔詩〕天壇にて（藤原定）地平の門（坂井艶司）汗山（逸見猶吉）〔随筆〕映画的とは（吉野治夫）映画雑記（冬木羊二）新京断片（荒牧芳郎）佳木斯（ジャムス）絵日記（絵と文・今井一郎）〔評論〕文学の表情（木崎竜）満洲文化映画について（森信）同人語（同人）

第三集は十四年の夏ごろ発刊された。

〔小説〕大同大街（長谷川濬）マーシュカ（H・A・バイコフ・大谷定九郎訳）昼夜（古丁・大内訳）石田君の幼な友達（岡田寿之）お談義部落（北尾陽三）或る環境（北村謙次郎）日記帖の飜訳（建国記念文芸当選作・比士川久雄）春の復活（同前、李周夢・大内訳）〔詩〕地理二篇（逸見猶吉）天使変形（坂井艶司）黄昏の訪問（矢原礼三郎）呗（長谷川四郎）ショパンに（藤原定）〔随筆〕叔父とランプの絵（町原幸二）言葉の衣裳（中村能行）国語と映画（坪井与）牛（絵と文・池辺青李）〔俳句〕春より夏へ（金尾梅の門）武蔵野の初夏（伊東月草）〔評論〕竹内正一論（西村真一郎）映画の作家精神（松本光庸）島村抱月論（木崎竜）〔特輯・文化関係当事者にきく〕（金丸精哉—満鉄弘報。根岸寛一—満映理事。青木実大連図書館。吉野治夫—文話会事務局長。磯部秀見—弘報処。山崎末治郎—新京図書館長。大塚淳—新京市音楽団指揮者。藤山一雄—新京博物館副館長。奥村義信—満洲事情案内所長。金沢覚太郎—新京放送局副局長）

つづいて同年冬「満州浪曼」は特別号として「満州作家選集」と題する創作集を出した。

秋（吉野治夫）烏爾順河（長谷川濬）梨花落つ（疑遅・大内訳）虚脱（北尾陽三）或る環境（北村謙次郎）地の種子（大滝重直）緑の歌（晶埜ふみ）窓（石軍・大内訳）炷一支（木崎竜）北辺（青木実）

以上のほか、時評、四季語など加え、大体四六倍二百余ページの体裁のものだつた。

ここに大内が作家紹介の文を添えているから、そのまま、援用させてもらう。

「以上の作家詩人等のうち、吉野治夫、竹内正一、坂井艶司、町原幸二等は『作文』同人であつた。下島甚三、今村栄治等は新京文芸集団の同人、晶埜ふみ（もと庄野ふみと署名した）は新京日日等に出し、のち文学地帯に加わつたりしている。（筆者註・この雑誌は『文芸集団』の改題）彼女、近時新聞などにもきめのこまかい随想類をよく書いているが、会合等には顔を出すのが嫌いらしく、彼女の実物を知つている人は少いであろう。横田文子の『白日の書』はかつて日本で発表し、芥川賞の候補として取沙汰されたこともあるという作品。彼女は飄然と新京にやつて来、寛城子に住み『満洲行政』あたりに短篇を書いていたりした。その後いつの間にか坂井艶司夫人となり、いいお母ちゃんになつてしまつていた。矢原礼三郎は日本の『麺包』等に出していた旅順育ちの詩人。満映に入り、その後北支、中支へ行き最近また満州に帰つて『日本人には寒い所が身体が緊張していいですよ』と言つている。長谷川四郎は濬の弟、アルセーニエフの

『デルスウ・ウザーラ』を訳している。坪井与は新聞人から映画人になつた男。松本光庸も久しく満日の映画批評で鳴らし、ついに映画人となり、今は華北電影にいる。青木藜吉は大同報にいた鮮系の青年と聞く。才能を有している人と思われたが、その後どうしたかを知らない。工清定は撫順高女の先生、最近は『月刊満洲』に入り『迎春花』を出している。バイコフが紹介されたのは『満洲浪曼』第三集あたりがはじめではなかつたか？　中村能行は若い満映の脚本家だつたが、後に病んで日本で死んだ。大滝重直は日本の東北にいる農民作家、満州に来、暫く開拓地にいた」云々。

以上が大内の紹介であるが、なお多少補足すれば、藤原定氏は当時大連の満鉄経済調査会に在り、のち奉天、新京へも来たことがあると思うが、ついに会う折りもなく過ぎた。日本でも知られた詩人である。同じ満鉄にいた金丸精哉氏は「満州グラフ」編集のかたわら「満州雑暦」（満日出版部）「満州の四季」（博文館）など上梓した才人。

長谷川四郎はたしか「鵠」同人で、主として詩を書き、かたわら創作や翻訳にも当るといつた精力家だつたが、のち札蘭屯（ジャライノール）の協和会事務所長になつたおかげでシベリヤへ引つ張られ、東京へ帰つたとたんに「シベリヤ物語」その他で文壇に登場、新進気鋭の作家として迎えられているのは人の知るところ。バイコフを訳した大谷定九郎は本名大谷勇夫、早大英文卒、ハルピン日日新

聞に籍をおき、コツコツ自力でロシヤ語を勉強して白系作家の翻訳をやつていた篤志家。のちに「満州浪曼」の改装版（大学書房版）「僻土残歌」に「白系露人作家紹介」と題し、写真入りで詳しい作家紹介を書いたこともある。

バイコフは菊池寛や富沢有為男らの紹介もあり、やがて長谷川訳の「偉大なる王」が出版されたりしたことから、俄然評判作家となつたが、氏についてはまた後でくわしく書くことにしよう。町原幸二氏の「叔父とランプの絵」は画家中尾彰氏のことを書いたものである。

なお念のために記すと、この大内の紹介文が載つている「満州文学二十年」は康徳十一年（昭和十九年）奥一の経営する国民画報社の出版で、つまり、右の紹介文は十九年前後の諸家の動静を記したものと承知願いたい。

二十一章

「満州文学研究」――蘇一郎（大町一枝）――興亜文化出版社と「満州浪曼」の改装版――「満州浪曼叢書」――望月百合子――北小路功光――「満州文芸年鑑」第二集――石森延男その他

ひきつづき「満州浪曼」は、昭和十五年五月やはり特別号として「満州文学研究」と題する評論特集を行つた。これも四六倍版二百余ページ、全部を五部に分ち、次の内容を盛つた。

〔第一部〕建国文学私論（長谷川濬）満州詩論（三好弘光）満州文学の基本概念（西村真一郎）満州文学の特質（大内隆雄）探求と観賞（北村謙次郎）満州文学の方向（吉野治夫）〔第二部〕批評に就て（村岡勇）満州文学交流雑談（王則）臨床的満州文学論（蘇一郎）満州文学私観（日向伸夫）自然描写に餓える（丘益太郎）〔第三部〕古丁に就て（辛嘉）夷馳とその作品（小松）満人作家論・序説（木崎竜）〔第四部〕「作文」四十集まで（宮井一郎）満州ジャアナリズムの一面（新井練三）〔第五部〕御用画家に就ての断片（池辺青李）満州音楽序説（陳其芬）

右のうち日向伸夫は「作文」同人で、のち「第八号転轍器」という作品集によつて最初の文話会賞を受け、また浅見淵らの推挽で雑誌「新潮」等に作品を発表する機縁を得た。浅見氏は満州で最も若く、最も有能の作家として期待していたらしいのに、大東亜戦末期、沖縄戦で戦死したのは惜しいことだつた。

蘇一郎は本名大町一枝、大町桂月翁の縁辺にあたり、大連の南満工業専門学校で英語の先生をしていたが、これも最後の応召に引掛り、たしか牡丹江の陸軍病院で戦病死したと聞く。筆者とは金丸精哉と並び大連一中以来の同窓で、このころしきりに新聞に評論を売り出すようになつていたのに、惜しい時に亡くした。丘益太郎は岡田益吉氏の筆名、辛嘉、小松、王則の三氏はいづ

れも後に語る満系同人誌「芸文志」の同人で、このときはたしか翻訳ヌキの自前の日本文を送つてきてくれたように思う。陳其芬は新京市役所に勤務し、大塚淳や和泉徳市らに可愛がられていた真面目な音楽研究家だつたと記憶する。

年月が先きにとぶが、この後「満州浪曼」は文祥堂から興亜文化出版社（大学書房）の手に移り、四六版二百余ページの第六集を出した。昭和十五年十一月のことである。

〔小説〕悪党（筒井俊一）春鷗（北尾陽三）回帰線（夷馳・森谷祐三訳）〔詩〕月地抄（檀一雄）蜜柑に寄せる（高森文夫）〔戯曲〕巫花の流れは輝いている（大内隆雄）

つづいて十六年春、春季作品集として傍題を「僻土残歌」と名づけ、やはり四六版の特集を出した。これは巻頭の詩「僻土残歌」（檀一雄）の題名をそのまま巻名としたものである。

〔詩〕僻土残歌（檀一雄）〔小説〕鉄路機廠（鈴木啓佐吉）鷺（長谷川濬）樹々に匐う魚（檀一雄）皮鞋（苦土・大内訳）私の平凡な生活の記録（北尾陽三）〔付録〕白系露人作家紹介（大谷勇夫）〔跋〕長谷川濬、大谷勇夫、鈴木啓佐吉、北尾陽三、檀一雄

この四六版の叢書も永くつづかず、十七年に移るや「満州浪曼叢書」として北尾陽三の「明暗」大内隆雄の「或る時代」鈴木啓佐吉「愛情の緩急」鳥羽亮吉「流沙香綺譚」「仲賢礼慰問短篇小説集」（この集は印税を病床の仲君に贈つたのみで本は上梓に至らなかつた）など、いづれも岩波文庫版に倣つた書き下し中編を続刊したのみで、あとは自然消滅した。

ここにははや檀一雄も新京へ来て活躍している。鳥羽亮吉は北小路功光の筆名で当時氏は中銀に奉職し、絵画、音楽、文学と賑かに活躍していた。檀一雄はすでに「日蘇通信」をやめた逸見猶吉とともに満州生活必需品会社の弘報料につとめ、宣伝用の雑誌を編集しながら、北辺の各地をへめぐり、札蘭屯、横道河子、黒河などと、人の行かない文字どおり「僻土」を歩きまわつて、詩の情念を燃していた。彼については、また書く。

こんなわけで「満州浪曼」は終幕となつたが、この時代にはさきに触れた満系の雑誌「芸文志」が出版されて華々しく活躍し、かたわら新京は、檀、緑川、山田清三郎、望月百合子諸氏が仮住したほか、中谷孝雄、浅見淵、秋沢三郎、富沢有為男、中河与一、坪田譲治、村山知義、小田嶽夫などの来往が繁く、新京文化二期後半の開花期にあたつていて、どつち向いても賑かな感じであつた。望月百合子は石川三四郎の姪だかに当り、古くアナトール・フランスの「タイース」の翻訳があることは知つている人もあるだろう。昭和十三年新京へ来て「満新」文化部で働く旁ら十四年から丁香女塾といふ女の学校をひらいて校長になつた。これは世間から花嫁学校と目されたが、事実は満州認識について初歩概念を与える精神訓練を主とすると校則に歌つている。なお同氏には在満時代、三四冊の著者もある。

いずれそれらのことは、年代を追つてもういちど詳しく書くこととし、ふたたび昭和十三年末

に溯り、書きおとしたことを補筆して行く。

同年末、前年度結成した満州文話会の手により「満州文芸年鑑」第二集が編纂され「満蒙評論社」から出版された。

内容は次の通りである。

〔概観〕評論（西村真一郎）小説（大谷健夫）詩（城小碓）和歌（甲斐水棹）俳句（高山峻峰）児童文学（石森延男）〔評論〕満州文学の精神（城小碓）満州文学に就て（角田時雄）当為的と自然的（大河節夫）建設の文学（木崎龍）幻想の文学（加納三郎）満州文学の特有性（金崎利光）満州文化の文学的基礎（上野凌峰）東洋の猶太民族（西村真一郎）満州に於ける文学の方向（川上旗男）満州文学運動の主流（佐藤四郎）満州文壇の回顧（古川哲次郎）最近の国文学研究思潮に就きて（渡部栄）川端康成論（大谷健夫）チェーホフに於ける「絶望」（紫藤貞一郎）「天才論」批判の序章（西川清六）〔詩〕黄河（高木恭造）戯画（井上鱗二）蝶の宿（城小碓）天邪鬼（古川賢一郎）湯（小池亮夫）薔薇百科辞典（三好弘光）七月の愛の歌（古屋重芳）蟬の歌（坂井艶司）塞北断章（矢原礼三郎）巡礼（廿地満）鴉（小杉茂樹）〔小説〕手記（吉野治夫）一農夫（青木実）夜の話（秋原勝二）西喇木倫河（福家富士夫）ある少年の記録（木崎龍）泥家（鈴木啓佐吉）老家行（長谷川四郎）満州の受胎（工清定）隣一二軒（町原幸二）逃亡（今村久米子）母へ（西川清六）枯梗の季節（松原一枝）安東（島崎恭爾）幾山河（富田寿）流離（竹内正一）〔短歌〕事変は進む（甲斐水棹）栗原大尉（富田充）離心抄（荒川石楠花）旅順（伊藤千鶴子）年若き僧（香川末光）雨と満人（新井重美）激流渡舟（相川澪）苦力（宮島正美）吾児（欅田正東）北支事変抄（永原いね子）〔俳句〕南嶺（三溝沙美）新京（三木朱城）氷山（高山峻峰）不毛の地（久米

幸叢）奉天（石原沙人）月（金子麒麟草）春耕（江川三昧）柳絮（森脇襄治）春聯（青山静丘）〔随筆〕蔦の実（筧太郎）喜怒哀楽帳（橋本八五郎）仕掛花火（石森延男）深谷温泉にて（竹内節夫）川柳と満州（石原巌徹）秋の随筆（三溝沙美）雑録（略）

このうち「児童文学」の概観をこころみた石森延男氏は、やがて二三年後、満日に「もんくうふおん」を載せ「花咲く少年群」とならんで児童文学界に確たる地歩を占めた。最近も「コタンの口笛」によつて健筆ぶりをしめしている。大谷健夫は本名武男、大連図書館につとめ「作文」同人として主として評論に力を尽した。実に律義刻明な性格で、それがまた中国側にも知れたものか、終戦後引きつづき留用となつて図書整理の仕事を命じられ、ひろく中国大陸を転々、重慶から北京へんまで放浪する運命となつたのは、不幸というよりむしろプラスするところ多かつたであろう。中国には終戦後十年をすごし、三十年春東京へ帰つて、文芸春秋社の校正の仕事や諸橋漢和の校正をするかたわら随筆などを発表しているうち、最近明朝末の史実を扱つた「天を射る」を上梓、作家としての第一歩を踏んだ。

廿地満は筆名で、本名は失念したが、たしかこの年一冊の詩集を出したまま自殺したと聞く。「廿地満」はすなわち「廿歳満」であり、廿歳に満つるを待つて世を去つたと伝えられる。

大連詩書倶楽部が「普蘭店」を出したのもこの年である。島崎恭爾、宮本のぶ、三宅豊子、城小碓などが執筆している。

二十二章

驢皮影児——輯安古墳——大著「通溝」

ここらで十三年を終り、十四年に移ると、最初に思い出されるのは、満日文化協会が催した驢皮影児（リュィピィエル）の会である。

これは驢馬の皮を薄く鞣したものを人や馬の形に切り、さまざまに彩色したものへ光線をあてて スクリーンへ映写する一種の幻燈で、古くから中国各地で行われる娯楽の一種である。幻燈といつても、スクリーンはおよそ二間四方もあり、それに胡弓や太鼓の伴奏も加わつて、けつこう大人の耳目を娯しませる興行物となつている。投影される人物の数も場面によつて十人の余をこえることもあるという大がかりなもので、それが色彩あざやかな旗差物をかつぎ、馬を御して合戦絵巻をくりひろげたり、妖怪退治をやつてのけたりする。時には場面ぜんたいが、パッと紅い雲に染められたと見る間に、伴奏音楽は急調子となり、一瞬にして人も馬も虚空に消える。と、いつたように、そうとうに凝つた見世物なのだ。

が、古いものだけに、人形をつくる細工人も、これを実物さながらに活躍させてみせる芸人も少くなり、今では極く限られた場所でしか興行されない。ふつうでは、とてもお目にかかることのできない驢皮影児の一団を、こういう民俗研究を専門にやつている満日文化協会が、わざわざ遠方から招き、国都人士に玩賞させようという催しなのであつた。

場所はたしか児玉公園の一隅、大同大街に面した国防会館の講堂だつた。講堂自身が大して広くもなかつたが、観客はだいたい二三百名も集まつたであろうか。見わたしたところ、席の半ばを占めるか占めない程度だつた。

やがて例の賑かなヂャンヂャンブーブーという中国芝居と同じ音楽で、古風な幻燈が映し出された。外題も内容も刷り物に書いてあるから、ごく大ざつぱなところは理解できるが、あとはチンプンカンプンで、ただ大ぜいの騎馬武者が舞台せましと暴れまわり、ぞろぞろ行進したりするのを、珍奇な思ひで眺め入つただけである。

が、それにしても、こういつた原始的な観せ物などを、今や国都と称される新京の、しかも国防会館などというヒョンな場所で見物するというのが、思いがけない感興をさそうのだつた。観客の中には、顔見知りの満系作家たち——古丁とか、呉郎とかの諸君が、これもいかにも珍らしそうに見入つていたが、聞いてみれば彼らにしても、こんな古めかしい見せ物を観るのは生れて

初めてだつたという。

この夜の印象と、のちに画家の池辺青李君たちと見に行つた朝鮮国境なる輯安古墳の壁画とが、筆者の記憶に奇妙にダブつて映つてくる。

輯安はまた通溝といい、満日文化協会で「通溝」という大きな著作を出して紹介したことがある。（四十一章参照）

筆者がここを訪れたのは、昭和十八、九年初夏のことだつた。沿線に白い梨の花や、赤い山つつじがさかりだつたのを思い出す。じつはこの旅行も満日文化協会が世話してくれ、筆者は熱河に次ぎ二度めに、そのような辺境の町の雰囲気に触れたのだつた。

輯安古墳のことは、日本の考古学者や美術家（たとえば鳥井龍蔵博士は早くも明治三十八年に初踏査、明治四十年にはフランス人シャバンヌが足をとどめたことがあり、大正三年には関野貞博士、その後京城大学の藤田博士がそれぞれ綿密な調査をとげている。塚の代表的なものは美人塚、角抵塚、舞踊塚など。これはいずれも壁画の題材によつて名づけられた）のあいだにも知れ渡つていたから、ここに喋々はしないが、大体はあのあたりを治めた古代朝鮮のうち高勾麗前期山上王から長寿王（西紀四二七年迄）に至る王族の墓であつて、ただ注目されるのは、中に描かれた壁画なるものが、まるで変色もせず、不思議に生々しい色彩を保つていることだつた。そん

な塚が、町の郊外に何千何万と連なつて築かれている。これも古いものだけに、絵は狩猟の場面とか宮廷の行事とか、いずれも稚拙な筆致であるのと、原色に近い生々しい色彩であることが、驢皮影児の画面とダブつて思い出される一因となつているらしい。中流以上の中国人家庭には、古墨の香、焚香、茶の香りなど混りあい、沈鬱で古風で、いくらか黴くさい匂いがこもつているものだが、それに中国芝居のあのドンチャンという音楽や、独得の節廻しをもつ唄の抑揚やを加え、その蔭に驢皮影児とか、敦煌の遺蹟あたりを思い浮べると、古い中国の感じは、それで一応まとまる。生きて動く現代中国は、また別に存する——といつた感想を嚙みしめながら、筆者らはとにかく一夕の見せ物に満足して国防（！）会館を引き上げたものだ。

ところで、余計なことをつけ加えるなら、あと四五年たつと大東亜戦争はいよいよ熾烈の度を加える。と、同時に、役立たずの国民兵までかり出される騒ぎとなり、常時簡閲点呼なるものが行われたが、その集合場に当てられたのがたいていこの国防会館だつた。ガランとした講堂は、どこに舞台が消えたかわからぬふうだつたが、そのときはここで驢皮影児を観たことなど、これつぽつちも思いだす暇はなかつた。こつちが驢馬の皮にされないですんだのは、もつけの幸いというものである。

二十三章

満映の文化映画——満鉄映画と芥川光蔵——ホラ信こと森信のこと——上村哲弥

催し物のことを書いた序でに、やはりそのころ見た満映の文化映画のことを書いておく。もともと満映の劇映画は、日本人向けでなく、すべて満系向けの、満語トーキーであることは前に書いたが、康徳六年（昭和十四年）になると、在満特殊会社が、満映に委嘱して、こぞつて宣伝用の文化映画を作るようになつた。これは満語版にすればそのまま満系向け、日語版にすれば日系向けになる道理だつたが、最初は単に音楽だけのサウンド版とし、説明は簡単な字幕によるだけのものを、委嘱した会社へ納品するはこびになつていたようである。これらは恐らく、日本内地へ送られ大陸宣伝の一役を買つたものであろう。

文化映画課長は、たしか岡田寿之氏だつたように記憶するが、現場の監督なりカメラマンとしては、前記の高原富士郎、森信、上砂泰造、高森文夫などのほか、北尾陽三その他も監督助手と

して活躍し、まず満拓、産業部、林野総局などから委嘱されて作り上げたのが、それぞれ「北の開拓地」「氷上満州」「森林満州」といつた諸篇であつた。「北の開拓地」は上砂氏「氷上満州」は高原氏「森林満州」が、その名にちなんで森信作品だつたと思うが、このへん記憶がアヤフヤである。高森の入社はもつと後で、彼には「松花江」の一篇がある。これには逸見猶吉の詩が伴奏として入つている由だが、筆者は未見で何も云えない。ここで思い出すのは満鉄で文化映画を作つていた芥川光蔵の名である。彼は何本かの名作を作つたが、中にも「草原バルガ」「娘々祭」「秘境熱河」など傑作といわれる。これらは満州国建国以後の作品であるが、それでいてすべて満映設立以前に製作されたものである。氏が満鉄に入つたのは昭和二、三年の夏であり、映画的P・Rの先駆者として称えられたのは当然だつた。

か、とにかく満映にも文化映画作品が出来たというので、文話会主催で近く観賞会を催すからぜひ見てくれと、直接筆者に言いよこしたのはホラ信こと森信であつた。なぜホラ信にされてしまつたのか、よく分らないが、彼の話術なるものがいくらか針少棒大だつたことはたしかで、社員の身許しらべの票に「趣味」とある欄を見出すや、彼は得たりと「飛行機操縦爆撃」と書いて提出した——などと、言わずと済むことを触れ歩いたものである。もちろん、誰も彼が飛行将校上りと信ずるものはなかつた。

また彼は口癖に「おれがやらんで誰がやる」と浪花節語りのようなことを言つて胸を反らす無邪気なクセがあつた。色白の縮れ毛で、二皮目がぎょろり大きく、言葉は東北なまりで、あれは秋田へんによくある顔貌と見受けるが、その秋田なまりの大言壮語がたたり、例のいろはがるたの「ほ」の部にも「ホラで鳴らした森信さん」と野次られる仕末となつた。

このときは正式に文話会からも案内状が届き、筆者らも会場の協和会講堂（？）へ出向いた。作品の出来栄えはまあまあ無難というところだつたろう。場面転換がのろすぎたり、逆に早すぎたり、フラッシュバックがやたらに使われたり、森信作品では、伐採された材木が水流に流されるあたりに、チャイコフスキーの「悲愴」の第三楽章あたりが濫用され、「悲愴」より「滑稽」の感をあたえたり、といつたぼんやりした記憶しかのこつていないが、当時書いた雑文には「退屈な代り、案外肩がこらない」とか「かえつて爽快な後味がのこり、プレンソーダでも飲んだようなさつぱりした感じ」とか、殊勝な讃辞をならべている。

が、ケバケバしい劇映画なら満映の試写室へ入つても、市中の映画館へ行つても、いつでも見られたので、それには食傷の気味もあり、反つてこんな素朴きわまる、すこしばかりお粗末な「文化」映画でも、顔見知りの友人たちが精出して作つたものとあきらめて見れば、一種の詩情の流れさえみとめ得る心境になれたのかもしれぬ。

このときの入場者は千名に余り、文話会の行事としては予想外の成功をおさめた。

この年、満州文話会は本部を大連から新京に移し、その紀念のような意味を含めて、このような催しをすることになつたらしいが、これより先き、まだ大連に本部があつたとき、わざわざ新京から木崎竜、大内隆雄の両氏を招き、これに大連の上村哲弥が一枚加わつて文化講演会なるものを催したことがあり、そういつた企画に必しも反対ではないが、文話会がいつもこの種の「催し事」に熱中しないように、もつと本来の「文芸精神」の高揚に力をつくすようにと、筆者らは折りにふれ呼号したものだ。芸術の仕事は本来孤独の所産だが、野次馬が大ぜい集まると、とかくお祭りさわぎに終りたがる傾向があることに、前から危惧と物足りなさを感じていたから他ならない。

それはともかく、森信は満映で仕事をするうち、いつか胸を病み、終戦直後だかに昇天した。また上村哲弥氏はこの年の九月「第一公論社」を創設すべく東京へ去つた。

書きもらしたが、前記諸作品のほか、あのとき会場では「東辺道」と名づける一篇も映されたようである。東辺道開発会社なるものがおこされ、朝鮮国境に近い満州東部の開発に努力していた際であつたと思う。

二十四章

酒仙奥田技佐のこと——「満州行政」の創作——「或る環境」

このころ雑誌「満州行政」は、ひきつづき創作欄を拡充し、毎月必ず二篇、多いときは三、四篇の短篇を掲載、ほかに文芸時評、随想の類をもあつめ、ちようとした「中央公論」的偉容(?)を誇つていた。

その随想欄に、経済部の若き技佐（技師）奥田という人物が、二回ほどにわたつて酒についての随筆をものしたことがある。

奥田技佐は故鈴木梅太郎氏の愛弟子で（これは誤伝で、実は新京で初めて識つた関係ともいわれる）鈴木氏自身が、たしか二代目の大陸科学院長だつた関係もあつて経済部に入つたと聞いた。（初代院長は国道局長直木倫太郎博士兼補）親しく会つたことはないから、風貌について知るところはないが、この随筆たるや、醸造学の大家鈴木梅太郎門下にふさわしい滋味あふれる一篇で、筆者はつとに愛読し、切抜きまでしまつておいたのに、勿論終戦で紛失、今となつては二

度とおめにかかれないのは遺憾である。

それというのも、奥田技佐は経済部にあつて、満州産銘酒の随一の鑑定役だつた。

新京だけでも菊蘭、白蘭その他いく種類かが産出されたほか、吉林、牡丹江へんでも日本酒の醸造が盛んで、しかも忠勇にしろ月桂冠にしろ、もとだけ仕入れて新京で醸造し、名を「満州忠勇」「満州月桂冠」と称して売捌いたくらいだから、奥田技佐の奮戦ぶりはさこそと思いやられる。

きき酒は口に含むだけで飲むものではないから、その点問題ないが、問題はご当人の飲みしろに存する。ところで、聞いて呆れたことに、奥田先生の飲みしろたるや、朝二合、昼二合、晩三合はまあいいとして、ほかに一物も口にしない。何だ酒のサカナかと早合点しては大間違いなので、サカナどころかめしというものをいつさい口にしないと聞いて呆れたのだ。うどんそば、パン、それらの一切がご法度なのである。あとにもさきにも、お酒だけが正真正銘の「主食」だつたのだ。

おそらく選りぬきのこつてりした蔵酒とあれば、多分にカロリーもビタミンも含んでいたかと察しられるが、それだけを命の綱にしながらしかも連日のきき酒にくたびれた色も見せなかつたところ、まさに酒仙の名に価しよう。つまみにちよつと口にするのが、サボテンの薄切り一点ばりというのも、新京人種の度胆をぬいた。それは何という種類のサボテンか分らないが、さぞ青臭そうなあのサボテンを、チーズよろしく薄切りにし、塩を振つて嚙るだけで、五合六合のお酒がいただけたとは、たいていの酒飲み行状記には驚かないつもりの筆者らも降参してカブトをぬいだ。

まだある。この奥田氏は三十幾才というのに独身を通していた。候補者をあげて妻帯をすすめる人があれば、笑つて答えた。

「三度の飯を食はさないでくれる女房がいれば貰いますがね」

これでたいていの仲人は閉口して引下つたが、中に一人の変物がいて、とうとう注文どおりの女房をみつけだした。

ぜつたい飯は出さないし、主人の前で食事するなどという、みつともないまねもしないという条件つきで、めでたく奥田家にお輿入れというはこびとなつたが、いくら考えてもこんなことが長つづきする道理もなく、二三ヵ月でお嫁さんのほうが悲鳴をあげて暇をもらつた——といういきさつは、別なところで、別の人が話すのを聞いただけだから、本当かウソか知らないが、いかにも奥田酒仙ならありそうなことだと、筆者らも感じ入つて拝聴したものだ。

が、技佐自身の「生きかた」にも、だいたい無理があつた証拠には、技佐はそれから間もな

く、ころりと急逝した。何病かききもらしたが、やはり血管系統の病に臥れたのではないか？科学的にも、酒だけで生命をささえることの可能性は証明できるかもしれないが、それにして奥田氏の場合が示すごとく、何歳までといつた限度があるのではないか？

しかし新京は、惜しい名物男を一人なくしたものであつた。氏は三十幾才にして、まさに天才的な生涯を終えたのである。「満州行政」の随筆欄には、ときどきこの種の珍重すべき文献が載つた筈で、主幹新井氏にでもきけば、まだ他に面白い話の種があつたかと思う。

私事をかけば、筆者は前年あたり本誌に中篇「群盲」の連載を終り、十四年度にはやはり中篇「或る環境」の最初の一章「天守」あたりを発表しだしていたかと思う。この中篇は本誌のみに限らず「満蒙」あたりにもきれぎれに発表し、のち「満州浪曼」にややまとめて発表することができた。が、それつきりだつた。ちようど終戦前、或る本屋が出版するといつて原稿を持つて行つたが、本屋の主人が応召したおかげで、本どころか原稿も雲散霧消し去つた。文話会賞など貰つた作品だが、こうなると小説も人間の運命と同じことである。

二十五章

横田文子の二作品――緑川貢――「満州新聞」文化部――藤井図夢――奥山禎三

横田文子女史も十三年冬から十四年春にかけ「満州行政」に二つの小説を発表した。「風」「文」という二短篇で、いづれも「美しき挽歌」という傍題がついていた。二つとも寛城子を背景に、うらぶれた人事と自然を扱い、連作の形で長篇を仕上げる構想のようであつたが、ちようどこのとき、女史はしばらく純創作生活に帰ると称し、二作を置土産に東京へ去つたため、全作の完成は見られずに終つた。

構田女史の帰京と入れ違いに（十三年一月）今度は同じ日本浪曼派の緑川貢が、ひよつく新京へあらわれた。彼は何でも「開拓画報」という雑誌の記者として来満したと聞いたが、東京での話と、来てみての実際とに、だいぶ食違いがあると、会うたびにこぼしていた。緑川貢と開拓画報では、食い違いができるのも尤もなような話であるが、そのうち我慢できなくなつたか、社をおん出たと思う間もなく、すでに社長和田日出吉氏のもとに、紙名を「大新京日報」から「満州新聞」に変え、文化部長山田清三郎氏を迎えて、社業大いに揚ろうとする満州新聞社に滑りこんだ。

この早業は彼の独壇上である。その後二三年滞在しただけで、緑川はふたたび東京へ帰り、それからもひらりひらりと職を変え、現在にいたつている。あそこをやめて、どうしているかと、いらぬ心配をしているうちに、一跳びしてちやんと別の職場にありついているなどは凡愚の企て

及ぶところでない。

さて、満新に入つた緑川君は山田氏の下で実によく働き、後年には文化部次長まで出世したのは、後世に残る美談である。在満中の作品に「望郷」がある。これは十四年秋「電々」に発表され、佳作と噂された。

在大連の「満州日日新聞」は、この年懸賞募集をして北尾陽三の「舗子」と漣晶子の「ザオドスカヤ街」二篇を連載したことは、前に書いた通りだが、これに負けじと、山清、緑川のコンビは、新京の文芸人に呼びかけ、つぎつぎに三四十枚ほどの短篇を連載しだした。恐らくこの年の秋ごろだつたのではないかと思う。これは「大新京日報」時代、すでに今井一郎が手を著けた仕事のつづきのようなものであるが、和田社長が着任して、いささか地元文芸などに冷胆な表情を見せていたのを、両氏が説得した功は買われていいだろう。

今村栄治が「未完稿」を書き、長谷川濬が「耳を拾つた話」（？）だかを書き、ほかにも四五人の作家が寄稿したと思うが、題名、作者名ともに記憶にない。筆者は藤井図夢の挿絵で「砧」を書いた。この画家はそのころ満新専属で本業としてもすぐれた油彩を描き、筆者の書斉にも小さな風景画がかけてあつたが、惜しいことに、この人も中途で倒れた。昭和十九年発行、大内の「満州文学二十年」に「本年春南方で戦死」と記してあるのを見れば、やはり十八、九年のドサ

クサ動員で不運を得た一人と思われる。運の悪い作家画人の、そのころいかに多かつたことか。

藤井国夢は愛称トムさん、温和な性格で人に親しまれた。トムさんの令兄啓輔氏と筆者は大連第二小学校時代の同窓だつた。そのころのトムさんのことは記憶にないが、何でも藤井といえば大連の繁華街浪速町の大きな絵提灯屋さんだつたように憶えている。啓輔氏は慶応理財科を出て満日の経済記者になり、幹部級まで行つて終戦に会い、東京引揚後は「サン写真」の編集から、今は総理大臣官房勤務ときいている。

緑川貢はやがて寛城子に引越し、筆者と同じ一匡街の道路一つへだてた何とかいうロシア人の家の一室を借り、自炊生活に入つた。この一廓は筆者らの長屋と違い、各室が全部ロシヤ風で、それぞれ二間づつあり、家具もしつかりしていれば、作りもどうやら高級のように見受けた。

門を入ると、中央に花檀や果樹のある小庭をかかえるように、右手に鍵の手にのびた白堊の建物がたつている。緑川君のアパートはちようど鍵の手に曲ろうとするほぼ中央部に南面し、その右隣りがロシヤ人家主の住むアパートで、ここには年ごろの二人の娘が住んでいた。姉妹とも整つた顔だちだが、姉はだいぶニキビが出て、西洋風な思春期に入つていたらしい。ときに親切すぎたり、ときにうるさすぎたりといつた工合のようだつたが、当の緑川君は「何を小癪な」と相手にならなかつたようである。

鍵の手のいちばんとつつきに、ニッケの美術係奥山禎三夫妻が住んでいた。初めのうち、筆者は氏とつきあいがなく、どういう人かもしらなかつたが――夫人だけは横田女史の紹介で知つていた――後でつきあうようになり、なるほど美術意匠家にふさわしく、ベッドといい飾り棚といい、片隅においた電蓄といい、申しぶんなくハイカラな洋式生活にぴつたりした手法を心得ているのに感服したことがある。

緑川君のアパートには、後に檀一雄君が同宿し、旅行中の浅見淵、秋沢三郎両氏が泊り、ほかにも誰かれとなく来て泊つたのはつまりそれだけ手頃で、気軽なアパートだつたという、ひとつの証拠のようなものであつたろうか？

二十六章

ふたたび「氷花」――城小碓（本家勇）――「鵜の裔」（高木恭造）と「崖つぷちの歌」（坂井艷司）「第八号転轍器」（日向伸夫）

この年に出た竹内正一の作品集「氷花」は吉野治夫の短篇「手記」小杉茂樹氏の詩集「麦の

花」につぎ、第三回G氏賞を得た。G氏とは前にも書いた通り詩人の城小碓氏で、詩人の提供した賞金が、かく小説作家にも贈られたというのは、奇特なことであつた。

城小碓は本名本家勇、詩誌「戎克（ジャンク）」から出た近代派詩人だつた。昭和六年に詩集「黒麦酒の歌」を出している。自己紹介のとき「ボク、ジャンクのジョウです」と言つて、相手をマゴつかせたという話が残つているが、なるほど「ジャンクのジョウ」では、初対面では面食うだろう。小碓というのも難かしい。これは「オウズ」と訓むのだそうで、つまりもつと詳しくいえば「ボク、ジャンクのジョウオウズです」ということになつて、舌を噛みそうになる。

昭和九年ごろ、筆者が大連で「満日」の記者をしていたところ、一両度会つたことがあるが、長い漆黒の髪にベレー帽をかぶり、いかにも「黒ビール」党らしい凝つた感じだつた。佐藤惣之助に師事して「老子降誕」などを出した古川賢一郎らと並び、北川冬彦、安西冬衛らの後をつぐ詩業の先達だつたわけだ。

彼の短い詩を、一つだけ「満州文学二十年」から引いておく。

遺　産

故郷の友よ

父の遺産は黄塵に汚れた日の丸の旗ばかりだ

何でも彼は、大連の老虎灘（ろうこたん）街道にある醤油屋に勤めながら、せつせと詩を書いていたという。それならその醤油屋はたしか小川といつた筈で、長男の小川平吉（？）は藤井啓輔と共に大連第二小学の筆者の同窓だつた。平吉君は大連商業卒後、家業をつぐ筈が、頑固な祖父がいつこうに後を譲らず、平吉ならぬ平公（閉口）の面持ちだつたことを思い出す。

さて、詩の話の序でに書けば、十四年には二つの詩集が出版された。高木恭造の「鴉の裔」坂井艶司の「崖つぷちの歌」がそれである。

高木氏は満州医大出身の小説家で、雑誌「作文」同人として、つぎつぎに佳作を書き、もう少し後と思うが、氏の発表した短篇「風塵」は長く筆者の印象にも残つた。が、根は詩人出身らしく、この「鴉の裔」のほかにも詩集「まるめろ」「我が鎮魂歌」の二集がある。

十四年ごろ、氏は新京の満鉄病院の医師として勤務しているように聞いたが、ついぞ会つたことがない。それはともかく「鴉の裔」は日向伸夫の小説集「第八号転轍器」とならび、第一回文

話会賞を得た記念詩集である。

つぎに坂井艶司の「崖つぷちの歌」は四六倍版の大型詩集で、白地に紺を染め分け、自筆で書名を入れた、ちよつと人目をひく詩集だつた。これは父君から贈られたなにがしかの寄進（？）をもとにして出した自家版で、父君がどんなに君を愛していたかの証しになるものと思う。だいたい艶司などという凝つた名からしてそうだが、正月休みに鞍山の自宅へ帰省すると、床下に十本も二十本も一升瓶がおし並び、それを親子で片つぱしから空けていつたというから凄まじい。艶司などいう名に似合わず、また白哲細身の優男に似合わず、わが坂井艶司ときてはたいへんな酒豪だつた。

後に（昭和十五年秋）彼は池辺青李、張紫楓、石輯、石軍、于蓮容などの満系作家、富田寿、日向伸夫、今村栄治、大内隆雄などの諸君に伍し、日本内地へ派遣されたが（このとき彼と今村は、日本を見るのが初めてだつた。つまり鞍山で生れ、大連で育つて、ずつと満州ぐらしという純二世だつたのだ）そのとき東京で第一公論の上村哲弥氏あたりが主になり、岡二郎、近東綺十郎、日下熙、野村正良、池淵鈴江諸氏が歓迎会をひらいてくれたと記録に残つているから、東京のめんめんも、さぞかし彼の飲みつぷりには驚いた記憶があるだろう。まるで中学生然とした風貌に拘わらず、いくら飲んでもけろりとしたものなのだ。

「崖つぷちの歌」が出たのは、十四年冬のことで、彼はこの前年から、新京図書館長山崎末治郎氏の下に働き、そこの暗い地下室を聘にしていた。詩集の中には「地平の門」（これは「満州浪曼」二号に出た）といういい詩もあり、彼の才能を知るに足る秀れた詩集といつてよさそうである。筆者の手許に、新京中央通の岩間時計店あたりの前で撮つた「満州公論」社長小原克巳、筆者の二人に狭まれた彼の写真がのこつているが、これは沖縄戦で戦死した故日向仲夫君の撮影した記念写真である。

序でに書いておけば、この岩間時計店の主人は、さきごろ熱海の所有地何万坪かを市に寄附し、老人ホームを建設したことで当時の新聞種になつた。

二十七章

大連の諸雑誌——「作文」創刊から四十集まで—同人の著作——「満州文芸年鑑」第三集

大内の「満州文学二十年」に、次の記事がある。

「作文」は昭和十七年末に終刊号を出したが、それを見ると「作文」社は十一年間活動してきたとある。すると「作文」の前身ともいうべき「彩」の頃から数うべきものであろう。「彩」は昭和七年二月に発行

されており、その執筆者は古川賢一郎、城小碓、三宅豊子、橋本英子、大谷武男、竹内正一、近東綺十郎、青木実、島田幸二（町原幸二）である。云々。

ところで、ちようどそのころ、（昭和八年）大連では「満州ペンクラブ」というのが創設されている。メンバーは大木一男、古川哲二郎（賢一郎の弟）鈴木啓佐吉、畑中久良人（のちの北尾陽三）横沢宏、樋口春晃、斎藤和郎の諸氏に、後に宮川靖、吉野治夫、佐々木勝造、加藤齢明、岡二郎、西村真一郎の諸氏が加わり、雑誌「満蒙評論」に特集「満州ペンクラブ」を編んで活躍した、とある。大内氏によれば、これこそ文話会の母胎であるということになつている。また大内は

「今の「作文派」前身が「線」という小さな（形の上で）雑誌を出していた。いま手許にはその第三号があるが、次のような目次である」

〔詩〕死の唄（ポール・フォール）長谷川泰造〔随筆〕春よみがへる（同）〔創作〕挿話として（竹内正一）白心（高木征三）こんな話（青木実）〔批評〕文芸月評（大谷武男）満州ジャーナリズム一瞥（SOS）卓上噴水（同人）云々。

とも述べている。

この他にも、大連にはさまざまな雑誌があり、それらが経となり緯となるうちに、一種の雰囲気が生れ、そこで結成されたのが同人雑誌「作文」というものだつたのだろうと想像される。と

いうのは、以上見てきた団体なり雑誌なりに、そのまま後年の「作文」同人の名を発見できるからである。

さて「作文」については、青木実が、次のようにのべている。

「『作文』は昭和七年十月、大連にて、青木実、竹内正一、城小碓、落合郁郎、島崎恭爾、町原幸二、安達義信の七人によつて創刊された。小説、詩を中心とする純同人雑誌であつた。創刊当初の発行部数僅かに二百部。（中略）現在（康徳九年―昭和十七年）二千部印刷して、その大半は満配の配慮によつて全満の書店で販売されており、返本率は僅かに二十パーセント乃至三十パーセントの間である」云々。

これは相当な発展ぶりといつていいだろうが、その「作文」は昭和十一年八月に第二十集を出している。目次をみると

仲間（五）（秋原勝二）乱菊（三宅豊子）〔詩〕若い季節のために（小杉茂樹）月蝕む（松原一枝）花翳（池淵鈴江）〔随筆〕古い手帖（町原幸二）二匹の猫について（小杉茂樹）作文後記（落合郁郎）表紙・カット（中尾彰）

と多彩で、このときの同人は青木実、秋原勝二、池淵鈴江、大木一男、大谷健夫、落合郁郎、小杉茂樹、園冬彦、竹内正一、富田寿、町原幸二、松原一枝、三宅豊子、吉野治夫の諸氏となつている。殆ど後年の「作文」同人が、このころ顔を合せたといつていい。

この「作文」が、昭和十三年冬から十四年春にかけて三十五集を出し、同年冬には部原な四十

集紀念号を世に贈つた。十七年冬終刊とすれば四十何集かをもつて長い文学生活の幕をとじたわけだが、それにしても同人雑誌としてこれだけ命が長かつたというのは、日本でも例が少いのではないか？『（同人雑誌というものは、中の二三人が文檀に出ると、とたんに崩れかける運命をもつている。穿つた見方になるが、満州という特殊事情が、反つて同人意識を強める結果になつたということも出来そうである）

四十集あたりになると、編集ぶりもイタにつき、あまりに抜け目ない感じで、反つて昔の素朴な「作文」がなつかしくなるような気味もある――と、そのころ時評に書いたことがある。

この号では吉野治夫の小説「軽薄文化草紙」が世評を呼んだ。坂井艶司は批評を寄せて「この作品は横に横にとひろがる外延的性格を有し、事件の発展性というものを持たぬ特異な作品である」と述べた。

他に青木実が「北辺」を書いたが、これは前に「満州浪曼」に書いた第一部につぐ第二部の部分で、氏はこのあとたしか四部まで書いたと憶えている。

四十何集か忘れたが、そのころの或る一集に逸見猶吉、檀一雄などが乞われて詩を書いたこともある。だんだん同人誌というより、一般誌的色彩を強くするようになつて、同人組織が崩壊することになつたのではないかとも考えられる。

この間、同人の著作には詩集に「老子降誕」「氷の道」「芽柳」「蒙古十月」「貧しき化粧」古川賢一郎「一月の河」安達義信「まるめろ」「我が鎮魂歌」「鴉の裔」高木恭造「麦の花」小杉茂樹「崖つぷちの歌」坂井艶司「九篇詩集」野川隆等があり、歌集に「朱の音」池淵鈴江「七草」三宅豊子、小説集に「氷花」竹内正一「第八号転轍器」日向伸夫。小品随筆集に「是好日」町原幸二「濃むらさき」池淵鈴江「花莚」「幽黙」青木実「廟会」同人作品集。この他の作品集に「畤の歌」三宅豊子「復活祭」竹内正一「綿服」富田寿など、評論集に「満州文学の表情」宮井一郎、それに青木実の「北方の歌」という創作集もある。なお「廟会」は浅見淵の編纂によるものであつた。

序でに、同人の活躍をしめす一例として、やはりこの年発行された満州文芸年鑑（これはこの号で廃刊となつた）第三集の同項を見よう。

〔概観〕評論（西村真一郎）小説（青木実）詩（八木橋雄次郎）劇（糸山貞家）短歌（金子麒麟草）俳句（柳生昌勝）児童文学（欠）〔評論〕最近の満人文学（大内隆雄）決算と展望（林適氏）満人ものについて（青木実）芸術と職業（井上麟二）国策文学論（上野凌峰）満州文学雑考（古川哲次郎）満州文学理論の整理（西村真一郎）詩論（八木橋雄次郎）肉体の悪魔（三好弘光）日本古典主義文学に於ける女性描写覚え書（大谷健夫）とりかえばや物語について（渡部栄）火野葦平論（木崎竜）室生犀星の図（宮井一郎）満州雑誌論（加納三郎）〔随筆〕沿線人種（秋原勝二）日記とカレンダー（紫藤貞一郎）水野さんの話（三宅豊子）随想（木原鉄之助）大晦日（大岩峯吉）帰郷雑記（加納三郎）朝鮮見たまま（山崎元幹）

競馬と子供（鹿島鳴秋）暴風雨の前と後（金崎賢）哈爾賓の憂鬱（桃北好澄）廃駅寛城子村の記（加藤郁哉）雪だけは頭髪に肩に（石森延男）〔詩〕日本鳥瞰図（滝口武士）建設工事（古川賢一郎）一輪車（八木橋雄次郎）棉畑（城小碓）鴉の裔（高木恭造）馬の詩（小杉茂樹）インテリの歌（三好弘光）解氷期抒情（西原茂）雪の朝（落合郁郎）やどかり（宮下秀雄）燭、厩（太田正）窮死せるアポロ神の詩（故廿地満）蝙蝠翔ぶ夕闇に佇みて（井上麟二）廃港（横沢宏）砂漠の植物（坂井艶司）檀兵衛和讃（松畑優人）五月の風の中で（矢原礼三郎）航海船（藤原定）〔短歌〕冬雑詠（相川澪）身辺（安倍喬）白き太陽（新井重美）現実（荒川石楠花）興亜（伊藤千鶴子）土（小川皓司）出発（香川末光）聖戦二歳（故甲斐水棹）重実（甲斐雍人）夏日抄（神山哲三）送別（木田晴夫）戦傷の友（欅田正東）明暗（島田のはぎ）戦況（鈴木済）哈爾賓（高橋房男）春雑（武田尊市）南京陥落（津田八重子）母逝く（寺本初音）事変下吟（富田充）楡の林（富永幸子）一首一題（中島新）金剛山そのほか（西田猪之輔）無題（橋本浅夫）夜の青葉の演奏（平山斌）忠霊塔大祭（故平山登志夫）秋冷（三井実雄）颱（宮島正美）浅茅が原（桃北好澄）〔俳句〕伊太利親善使節を満州へ迎えて（高山峻峰）雑詠（石原沙人）軍族余詠（栗生純生）満州四季（森脇襄治）四季（志和斗史）雑詠三句（三木朱城）雑詠（金子麒麟草）〔小説〕同行者（今村栄治）蘇える花束（長谷川滲）生地（北村謙次郎）土竜（鈴木啓佐吉）雪空（牛島春子）雪子（吉野治夫）きち（三宅豊子）馬家溝（福家富士夫）窓口（日向伸夫）齢（富田寿）天使は欠伸する（奥一）空しき部落（矢戸貫一郎）雪の日（島崎恭爾）村会（上野凌峰）小さな石（近東綺十郎）風（横田文子）ギルマン・アパート点描（竹内正一）秋の頃（青木実）満州の胎動（工清定）アリヨーシヤ（田兵）人造絹糸（小松）

二十八章

お偉方の文章——木下杢太郎の満州文学論——諸団体一覧——甲斐水棹女史と同雍人

これら筆者のうち、随筆の山崎元幹氏は当時満鉄副総裁、紫藤貞一郎氏は満鉄中央試験所に勤める理学博士、短歌の西田猪之輔氏は満州電々理事といつたお偉方であり、その他詩の井上麟二氏もどこかの社長と聞いたし、石森延男氏にしても、後でこそ童話作家としての方が通りがよくなつたが、当時は大連市役所の視学官だつた筈だ。その他にも、いくらも会社の重役やらお役人やらが、下級サラリーメンであるところの文筆人と肩をならべて、同じ文芸年鑑に作品を発表しているというあたりに、そのころの——いな、ずつと後までの——満州文芸の一つの偏向が見られた。そういえば、往年の木下杢太郎氏が、当時の南満医学堂、後の医科大学教授として奉天に足をとどめていたのは、いつごろのことであろう。新潮社の「日本文学大辞典」を引くと「大学卒業後、南満医学堂教授として赴任」とだけあつて、はつきりした年月は分らないが、どうやら大正もごく初めのことであるらしく思われる。(一本に大正五年から九年まで在任の記事がある)

昭和七年九月発行、奥一の「高粱」に西田悟朗という人が、往時の木下杢太郎氏の言葉なるものを引用し「満州には満州の文芸を」と叫んでいる。すなわち「木下杢太郎氏を中心とする医大文芸部主催の座談会にて、氏は言われた。日本人が内地から折角満州まで来て、何年か後には再び内地に帰る。日本人はなぜ満州に永住しないのであろうか。その原因はまた種々あろう。

その一原因として、満州の地方色をもつた絵画にせよ、文学にせよ、優美なる作品がないからではないか。満州をバックとした優れた作品を通して、満州の印象がすぐ浮ぶ様な親しみを持たねばならない。満鉄あたりで率先して、内地の見込ある作家を満州に呼んで五年でも六年でもその生活を保証して、よき文学製作の道を開くことが必要である——と、力説されていた」云々。

この中の木下杢太郎の発言というのは、どの程度まで氏のものとして信用していいか分らないし、医大文芸部主催の座談会というからは、これはすでに医学堂時代のものでなく、後年ふたたび氏が奉天を訪れたことがあり、そのときこのような会合が催されたと想像するよりほかないのであるが、それにしてもやはり大正年代か、昭和に入つたとしてもごく最初のころのもので、ずいぶん古い話である。

木下杢太郎作品には「安土城記」という筆者の好きな作品があり「南蛮寺門前」その他、秀れた劇作もあつて、立派な一作家であるに相違はないが、どこか一点、ディレッタントの匂いがひ

そむことは否めない。

それは何も氏の本業が医者であるということから、先入主として受けとる感想とばかりは言えない。作品自体に、どこか作り物めいた弱さがあるので、これは氏のみに限らず、文学を副業（？）視すると、とかく起りがちな現象なのだ。

その木下氏が、古い大正か昭和初期のころ、満州文学の独自性を説いているのは面白いが「生活を保証して」とあるあたりに、文学観の甘さが見られなくもない。そして満州では、上述の年鑑あたりにも見られる通り、上は満鉄副総裁、会社々長などから、下級サラリーメン諸君にいたるまで、一応は「生活を保証」されながら文学をやり、年鑑はいわばその総決算とも見られるものであつた。

とすれば「生活を保証」されながら、製作される「満州文学」というものが、ほぼどのようなものであり得るか、このへんから見ても一斑が察しられるというものではなかつたか？

後年になると、これら執筆者の中には公然「勤労者の文学」を主張するものもあらわれ、それにはどうにも腑におちない節が多く、いつも「それでいいか？」と筆者は自問自答することが多かつた。

満州文学は、ついにすぐれた開花も見せずに終つたが、あのまま進んだとして、果して立派な

業績がのこされたかどうか、いま考えてみても疑問とする節が多いのである。

横道にそれたから、ここで本道に戻る。大内氏によれば、この年鑑所載の記事により「文話会」「歌友協会」「作文」「満州浪曼」「芸文志」（この雑志については、後で述べる）のほか次のような諸団体のあることが知られると書いてある。すなわち次の如きものである。

○「鵲」（大連）松畑優人、小池亮夫、宮下秀雄、三好弘光、西原茂、滝口武士、井上麟二、八木橋雄次郎○「撫順文学研究会」（「断層」不定期刊行）相原繁、今井修二、東郷里枝、鶴田和平、竹内節夫、母里山正夫、西沢千之、松本亜土、木士享、市来一郎、梶原寅次郎、安藤一明　○「二〇三高地」（大連）島崎曙海、川島豊敏、舟木由岐　○「文学地帯」（新京）今村栄治、大脇一雄、太田正、高木喜久蔵、酒井悦子、宍戸貫一郎、篠原捷三、下島甚三、庄野ふみ、広中一雄、桃北好澄　○「満州文学」（新京）董川千童、志賀修、ささきつや、堀善照、遠藤三津雄、熊城次、佐和山一郎○アカシヤ短歌会（大連）甲斐雍人他「アカシヤ」刊行　○満州郷土芸術協会（大連）香川末光他「満州短歌」刊行　○満州短歌会（大連）西田猪之輔他「合萌」刊行　○満州歌話会（ハルピン）三井実雄他「満州歌人」刊行　○北満歌人社（ハルピン）相川澪他「北満歌人」刊行○平原俳句会（大連）以下略。

右のうち、アカシヤ短歌会の甲斐水棹女史が亡くなつたのは、昭和十四年五月であつたこと、そして、大連の中央公園に、女史の歌碑が建てられたことが記されている。それによれば、歌碑に刻まれた歌は、次のようなものである。

戦ひはすぎて久しき巌山の起き伏しさやに澄むそらの色

蛇足を加えれば、女史は筆者が学んだ大連第二小学校の先生だつたのではないかと思われるフシがある。筆者の在学したのは大正元年から六年までであるが、そのころ担任の先生が男の甲斐先生で、すなわち女史の夫君に当る人だつたのではないか。

その男の甲斐先生がいなくなると、あとから女の甲斐先生が入つて来た。これが当の水棹女史だつたように想像される。水棹女史が第二小学校の先生をしていたことは、ハッキリ記録に残つているからだ。見たところ色の白い、背のひくい、オリーブ色の袴をはいた平凡な先生だつた。四十年も昔のことだから、ハッキリしたことは云えないが、あの先生が全満にならした歌人とは、今もつて信じられない。男の甲斐先生は、どこか若山牧水といつた感じで、授業中もひまがあると、冒険連続的な興味津々たるお話をしてくれ、生徒らに好評だつた。日露戦争の従軍談を筆者らも手に汗にぎつて聞き入つたものだ。歌人甲斐雍人は、つまり彼ら夫妻の令息ということになるが、これは筆者の推測である。

女史の歌碑は、いまは当然とり除かれたことだろうが、歌としての生命は今なお若く長い。

二十九章

文話会本部の移転——吉野治夫と新夫人——大連の文芸講満会

文話会本部は、十四年新京へ移ると、さつそく満日文化協会の一室を借りて事務をとり始めた。事務局長は吉野治夫、その下に今村栄治があり、文化協会で働いていた岡田万里子女史がそれに加わつて賑かだつたが、これが機縁となり、杉村勇造氏の媒酌で吉野夫人におさまつたのは後の話。

新京へ来た当座、吉野君がどこに下宿していたか記憶にない。が、しばらくすると筆者の家から、二丁ほど奥まつたあたりのロシヤ人の家に下宿し、ときどき遅く帰る道すがら茅屋に立ちよつて雑談に夜をふかした。

「きみ、ぼくの下宿はね。部屋の壁が薄くてね」

女房が席を立つヒマをねらい、冗談ともつかぬ調子で打ちあけたことがある。

「亭主は新京タクシーあたりの運ちゃんらしいんだがね。そんな男だけに、帰つてくると、遠慮会釈もないんだ。女房はきやあきやあわめく。しまいにベッドがズシンと軋つて……」

どうも若い吉野君には、これはたいへんな修行だつたらしい。たいてい物に動じぬ彼だが、毎晩のことに恐れをなしたか、しまいにとうとう、また新京のアパートへ引越して行つた。

と、そこに待つていたのが万里子女史で、爾来孤独なる吉野君のために

「男の人の自炊なんて、見ていられないわ」

とばかり、朝な夕なの水しごといつさい、彼女が引き受けてくれることになつた。

ハッキリしたことは知るよしもないが、部屋が空いているから引越してくるようにと勧めたのが、女史だつたらしい気配もある。

いづれにしても、この親切はあだやおろそかなものでない。かくて若い両人がめでたく結ばれるにいたつたのは、ごく自然であり、めでたいきわみであつた。

筆者は二人がいつ式をあげたか、つい知らずにすごしたが、大連には吉野氏の母堂が健在のころだつたし、古い友人も多い関係から、大連へ帰省して挙式のはこびになつたのではないかと察している。

たまに文化協会を訪れると、序でにお向いの文話会事務所をのぞく例だつたが、夫婦そろつて全満会員のために、わき目もふらずしごとに精出すありさまは、はたの見る目にも幸福そうで、しかも吉野君らしくさつぱりした味もあつてよかつた。よい会員が、各地にわたつて少しづつでも、確実に増えて行く。それが吉野君にとつて、何よりもの希望であるらしかつた。こういつた組織拡大に、あのような熱意を傾け得たというのは、彼自身の内部に特殊な理念があり、それはまだ彼が学生時代、情熱を注いだ社会運動の名残りの一片かとも思われた。

木崎竜君は、まだ弘報処勤務だつたと思うが、いわば監督官庁という立場から、よく吉野君の面倒をみた。こうして文話会は、前途多望の隆盛ぶりだつたのが、あと二三年すると社会情勢の変化は言論統制の枠をぐつと拡げ、芸文指導要綱なるものがあらわれて政府指導の下に文芸家協会が誕生すると同時に、文話会はあえない詰腹を切らされるにいたる。それは昭和十六年七月のことであるから、全く近い将来のことであつたが、この十四年ごろ、そこまで統制の手がのびると考えるものはなかつた。

文芸家協会設立の経緯は、後でのべる筈だが、木崎は両者のあいだにあり、相当な苦境にたつたと見られる節がある。（もつともこのとき、彼は弘報処から満映入りをしたあとだつたが）そのため彼は吉野君にたいし、あらゆる援助と慰問の手をのばそうとしたが、大勢の赴くところ、如何ともしがたかつたというのが実情のようである。が、木崎の同情は吉野にとつても、忘れられぬものがあつたろう。さればその後、木崎が腸結核の宿痾こうじて大連郊外なる南満療養所に移るや、折りから新京を去つて大連にあつた吉野の苦慮奔走は非常なものがあつたと聞く。

その吉野も、終戦後は杳として消息を聞かないが、万里子夫人は万一の希望にすがり、いま神戸で健闘中とのことである。（本稿後、彼は北満海林収容所で病歿の公報があつたと、万里子夫人から通知があつた。筆者にすれば、これで名実ともに文話会に終止符を打たれた思いである）

満州文話会は、当年七月、大連で文芸講演会を催したことは前にも書いたが、それは定期総会を兼ねたもので、総会の席上、本部を新京へ移すことが決定したのであつた。移転匆々、文化映画の夕をひらいたことも前にのべた。九月には同じく文話会の名で陸軍病院へ傷病兵慰問の映画会を催したことは、すでに時局の反映が濃厚であつたことを示している。ついで九月例会として大内隆雄の翻訳集「原野」の出版紀念会が開催されることとなつた。

三十章

「芸文志」創刊——その第二・第三集——古丁・爵青その他——秋螢の満系文学評——山丁——蕭軍

「原野」のことを書く前に、この年六月創刊された満系文芸誌「芸文志」について触れておかねばならない。

「芸文誌」は「満洲浪曼」と同じく不定期刊行、クオータリーの形式による厚手な刊行物で、創

刊号は四六倍版二百十余頁に上り、内容また多彩である。岡田益吉が「満州の文学者に望む」という稿を寄せ、固いものでは宝熙の「金石叢談」少虬の「鄭海蔵先生的詩」（国務総理鄭孝胥氏の詩の紹介）などあり、ほかに爵青、王則、石軍、小松、夷馳、西原、君頤、金音、袁犀など、古くからの文筆人がここに顔を揃えている。

間もなく十四年末には、三百六十余頁に上る第二集が出たが、これには古丁の「平沙」をはじめ、小松の「蒲公英」などいう力作のほか、李夢周の建国文芸当選作「春の復活」が載り、君頤の戯曲「金糸籠」百霊の史詩「成吉斯汗」（第一集につづく）宝熙、劉恩格、陳蒼虬諸氏の旧体詩、長谷川濬「大同大街」（共鳴訳）木崎竜「わが文学十年」の訳、さらに夷馳、石軍、爵青、老穆、励行建諸氏の作品があつた。爵青のは「廃墟之書」という、彼らしい題名のもの。

ついで昭和十五年六月、日本紀元二千六百年記念特集と銘打つて出版されたのは、実に四百二十余頁の大冊で、先輩格の「満州浪曼」もタジタジの態だつた。

目次は次の通りである。

芸文雅頌（栄厚）奉祝二千六百年（沈瑞麟）日本文学的特性（大内隆雄）日本文学的語言性格（杜白雨）
日本与唐（非斯）関於明治大正二名作（木崎竜）古事記選訳（光天）芭蕉俳句選訳（百霊）井原西鶴（武者小路実篤・古丁訳）海彦山彦（山本有三・外文訳）阿部一族（森鷗外・莫迦訳）紀元二千六百年紀念東

亜操觚者懇談会経過実録（疑遅）現代朝鮮文学論（李台雨）和蒼虬牽牛花（劉思格）奉題初太守柳榭図（昨非）牡丹園雅集分詠得花字（少虬）読張文襄公杜少陵詞感賦（真如）三代金文中女姓繹例（羅福頤）旅窻即稿（辛嘉）閑話北京（少虬）半生之記（北村謙次郎）我的語録（莫迦）半生雑詠（詩・外文）漂流曲（詩・冂陵）馬家溝（竹内正一・共鳴訳）〔創作〕麦（二百枚、爵青）鉄檻（百枚、小松）窪地（石軍）回帰線（疑遅）〔戯劇〕金泰桟（杜白雨）漠寒（独幕、君願）春秋（四幕、辛実）編輯後記

右に見るとおり、たいへんな力作ぞろいで、中でも彼ら満系作家が、日本文学に示した異常な関心の程度を知ることが出来る。筆者らも創刊号から寄贈を受けていたが、せつかくの力作が、半分も満足に読了し得ないのは（他の日系作家も、いづれも筆者と同じ文盲である）逆に彼ら満系作家が、いづれも自由に日文をこなすのに比べ、些か恥入らねばならぬことであつた。彼らは小学校教育から日本語を必修科目にされるので、日本文を読み聞きするのに不自由しないといつてしまえばそれきりだが、ことさら民族協和の文芸を標榜する筆者らが、自由に中国文をこなせないということは何としても残念で「この機会に中国白話文の勉強を」と思いたちながら、満州滞在中、遂にその事が成就せずに終つたのは怠慢と譏られていいことであつた。

ところで、ここに現われた作家たちは、いずれも古い文歴をもち、それについても多少書いておかなくてはならないが、その前に「芸文志」自体にたいする、同じ満系文学者秋螢氏の評語を拾つてみることにしよう。これは奉天で出る雑誌「観光東亜」に掲載された「満州文芸史話」と

いう評論の一章で、古くからの「東北文芸」と満州建国後の文芸発展を紹介して要を得た一文である。秋螢はその中で「芸文志」につき、次のように言つている。

「この一種澎湃たる気運は、僅か一年しか持続することなく「明明」廃刊と共に終りを告げたが、康徳六年（昭和十四年）に到つてもこの亢進的情緒のほとぼりは未だ全く冷却せず、遂に「明々」時代の若干の作家は再び芸文志事務会を組成し、大型季刊「芸文志」なるものを創刊した。但し「芸文志」の出版は依然として新文芸性格を失はなかつたが、もはや「明々」時代の執拗と強靱な精神は疾に消失し去つた。しかも内容上から観察すれば、反つて旧文芸と手を携えるが如くである。「芸文志」は前後を通じて、三回しか発行していない。就中主要な創作は古丁氏の「平沙」と爵青氏の「麦」で、何れも八万字位の中編であつた。その次は小松氏の「蒲公英」と「鉄檻」で、量においてはかれこれ四万字位もあつた。然し比較的好評を受けたのは爵青氏の「麦」で、創作の技巧上から見ても爵青氏は確かに相当の成功を収めたと云えよう」云々。

これは㈠東北文芸、㈡建国後の文芸、㈢近年来の文芸と三つに分類した、その三章の一節である。なおまた「芸文志」そのものについてではないが、同誌に活躍する作家名と出身に触れた山丁氏の「満州文学閑談」なる一文がある。その中の一節に

「南満文学から出た作家には秋螢（秋螢）夢園（小松）驤弟（金音）洗園（励行建）孟素（孟素）劉佩（爵青）霊非（未名）吠影（田兵）成雪竹（成弦）文泉（石軍）石卒（陳因）等がある。これらの人は現在も括弧内の新しい筆名で満州文学創作に従事している。南満といふ土地の粘著力が執拗にこれらの作家

にも粘りついているといえる。北満文学から出た作家には三郎（蕭軍）悄吟（蕭紅）洛紅（羅峰）劉莉（戈白）代生、巴来、黙映、金人（金人）梅陵（孫陵）文光、小古、黒人、達秋、努力（田瑯）等がいる或る者は粘性の土地を脱け出し、括孤内の新しい筆名で国外文壇に活躍している。或る者は筆を投げて「文学無用論」を唱え、或る者は閑つぶしの文章を書いている」云々。

この中には中国文壇へ出て活躍した蕭軍、蕭紅夫妻の名も見え、古くからの東北文芸の息吹きが感じられる。ここで時代を過去に引戻し、彼ら満系作家の辿つてきた道をのべるが順序であろうが、その前に「芸文志」創刊当時の一挿話を記しておくこととする。

三十一章

「芸文志」創刊披露宴——いわゆる東北作家たち——秋螢論「建国前の文芸」

「満州浪曼」のときがそうであつたように「芸文志」が生れたときも、創刊披露会のようなものがひらかれ（満日文化協会主催と記憶する）日満系作家が一堂に会して歓談したことがある。筆者も招かれて、たしか国都飯店（中央飯店？）かの披露宴に列席した。宴のひらかれる前に、写

真撮影があり、別室で仲よく一緒の写真におさまつたが、このとき杉村氏にすすめられ、古丁君と握手する場面を撮られたりした。両方とも仲よく喧嘩せずにやれという、氏の老婆心のあらわれだつたのだろう。が、喧嘩どころか、後には彼らの雑誌経営に関する事務才能の秀れていることと、百枚二百枚と相つぐ力作奮闘ぶりに、日本側はタジタジとなり、感心しつづけるだけの恰好となつたものだが、それはともかく、宴半ばにして日系作家の一人が立ち、彼ら満系作家も文話会へ入会して欲しい旨の発言をした。それにたいして、これまた満系作家の一人が立つて答えた。当時の筆者の記録があるから、その答弁の要旨を引いてみる。

「文話会に加入を勧められたということは嬉しいことであるが、自分たちがすでに文学そのものをさえしばらく避け、官吏として、会社員としての生活に没頭したいと考えている際なので、出来るだけそういつた会合等に顔を出したくないというのが、正直な気持ちである。その点、諒解していただきたい」

ところがこれに対して、すぐ立つて意見をのべたのは長谷川濬だつた。例によつて「芸術家」とか「文学者」とかいう大きな表現を用い「世に納れられぬ」文学者が、この世を白眼視したり、すねたりしないで、日系も満系も手をつないで文学をやつてはどうか——といつた、しごく素朴な人情論（？）をこねた。

このとき筆者の隣りにいた一人の満系作家が、ぽつりと次のように批評したのを思い出す。

「あの人には熱情はあるけれど、理智が不足ではあるまいか?」

これは手痛い批評で、のんびり文学をやつていた日系作家に比べ、彼ら満系作家が、古くからどれほど政治的、経済的、或いは封建的圧迫に苦しんできたかということについて、日系作家の知識なり同情なりがまるで不足していたことのいい証拠であつた。

つまり彼らは、今となつても、張政権時代と同じように（或いはもつと古い時代からのしきたり通りに）政治的圧迫を避けたいあまりに、文学者としての外貌を捨てるどころか、いつさいそのような空気を忌避し、善良な官吏、会社員として終始したい願いを持ちつづけていたというのは、少し考えてみれば、すぐ理解のいくことでもあつたのだ。「建国文学」とか「協和文学」とかいつても、彼らにはとうてい眉唾ものの感がぬけなかつたろうし「文話会入会」にいたつては、そんなことが知れたら、どんな目に会うかという危惧の方が大きかつたろう。

このような挿話を書き加えたのは、ほかでもない。前記、秋螢氏の「満州文芸史話」を見ると、曾て満州の「東北作家」といわれた人々が、同じ問題について、どんな経験をし、それにどんな表現を与えたかということが、ひしひしと身にしみて思い当るからである。

では古い満州の土壌と環境は、どのようなものだつたか？　秋螢氏の文章から、要点を抜萃してみるとしよう。

最初に秋螢氏の分類にしたがい「東北文芸」と呼ばれた時代を見ると、次のような文章がある。

「中国の五四、五卅運動は民族解放の偉大なる段階であり、そしてまた文化運動の最高潮時代とも云えよう。文化に関する限り満州は常に遅々として進まない地域であるとはいえ、然しこの二度の大きな波のうねりが、逆にこの辺陬荒蕪地にまで打寄せてきて、時代の激動に伴い、新文芸の種子も自ら萌え出し始め、ぐんぐん成長し来つたのである」

「当時の文化運動というものは、いわば従来の勢力に対する反抗であつた。だから青年達の書いた文章は、殆どが古来の暗い家庭的の東縛制度と、男女婚姻の不自由とを描いている」

「民国十四年から十六年迄の間には、中国革命の勢力が、漸次満州内に侵入してきた。この新しい勢力は若干の新文芸読物をもたらしたので、その当時は新文芸が東北に於て逐次に領域を拡大し、奉天では更に『東北文学研究会』なる組織もあつて王一葉氏がその中堅であつた」

「当時の満州社会の情況は、一方に於ては外力の圧迫を受けており、内面に於ては少数の軍人及び政客達が極端な縦慾生活を営み、民衆は如何かというと、その多くは困苦欠乏、餓寒の生活をしていた。だから多数の作者達が、好んで取上げる作品の題材は、大半が殆ど軍人政客達の野蛮な振舞と、社会の暗黒並びに農村の粛條さであつた」

「第十七期の『関外(文芸雑誌名)』などは一般の読者が手にすればすぐ分ることだが、その内容はもともと無産文学の旗幟を高く振りかざして毫も忌憚する所がなく、彼らの態度を表明すると共に当時の文芸の赴くべき新途を指義していたのであつた。そのために直ちにその筋の命令により停刊の憂目に遇い、落日

の如き運命となつた」

「かくの如く『東北文壇』の発展過程は後に民国十九年九月十八日の事変当時迄は政治の停滞に従つて完全な発展の跡も見られず、秋風に吹き散らされた落葉の如く僅かな存在であつた」

と秋螢氏は建国前の文芸の概観を終つている。

三十二章

秋螢論「建国後の文芸」――三郎・悄吟夫妻――「鳳凰」――「明々」――「城島文庫」――「文叢刊行会」――「文選」――暗い描写――東方印書館

つづいて第二章「建国後の文芸」から抜萃すれば

「事変後の文壇は、一時はとつぜん衰頽的状態に陥つたのであつたが、しかし一度その沈滞を経たのち、ついに一つの新活躍を示しだした。事変翌年の春、微風の吹き初める頃には、文壇も次第にそれに誘われる如く更生した」

「ハルビンは実に北満作家の活躍地と言うべきところである。（中略）『国際協報』副刊の『文芸週刊』の如きは曾て幾多の優秀な力作を掲載した。北満に於ての比較的傑出した作家は先ず三郎、悄吟夫婦を推さねばならぬ。この二氏は現在蕭軍、蕭紅をペンネームとして中国の文壇上に活躍しつつある。当時二氏

は、曾て合作した短篇小説集を出した。『跋渉』という題で、作者の創作態度は終始執拗に現実を把握している。内容は多数の被辱者及び圧迫を受けた連中の如実な生活描写である。作者の技巧は未だ成熟を欠如しておるけれど、題材の選択及び厳粛な作風は確かに当時文芸愛好者の注意を喚起し、相当の好評を博したのであつた。これと同時に新京大同報に更に『夜哨』の出版があり、この雑誌は三郎等の北満作家を中心にしており、内容は当時の他の新聞紙副頁、社刊に比して確かに高度の水準を備えている」

ここに筆者の註を加えると、右はだいたい大同元年（昭和七年）から同三年（九年）にいたるあいだのことで、中国作家として有名な蕭軍夫妻の、在満当時の活躍ぶりがしのばれる。

引きつづき康徳元年（大同三年）から二年にかけて、新聞紙の副葉によつて社刊を出版する風が盛んで「響濤」「平凡」「野火」「黒光」「毎週文学」その他の刊行があつた旨の記載があり

つづいて雑誌「鳳凰」の名があげられている。

「康徳元年『鳳凰』の創刊に当つては、当時の文壇に正に最大の注目を惹起し、国内唯一の大型雑誌となつた。『鳳凰』の内容は純文芸とは云い難いが、毎回文芸作品に関し相当の紙面を提供した。（略）『鳳凰』の発行により更に数多くの有望な作家を生み出した。前期における尹鳴、張蕭薇の如き、後期における努力（田瑯）等の如きがそれで、作品は形式内容とも均しく幼稚の段階を脱却した」

つぎに第三章「近年来の文芸」の項に移れば

「康徳四年（昭和十二年）になつて雑誌『鳳凰』は遂に廃刊した」

「国内の各新聞紙は弘報協会の言論統制政策に基き、これも大部分廃刊となり、そのために文芸界にも自

然影響を及ぼして落漠たるものとなつた」

「このときに於て月刊『明々』は却つて異軍突起の姿を以て、凋落一方の道を辿る文壇を背負うて出現した」「古丁、疑遲、小松、袁犀、石軍氏の如きは、皆当時の『明々』に於て最も活躍した作家達である」

「各作家はそれぞれ異つた風格を持するとはいえ、このときに於て一種共通な主要な思潮を形成していた。即ち暗い描写で、作中に陰鬱な雰囲気を充満させた」

「明々社は更に城島文庫を出版し、つづいて幾種かの専集を出版した。あげてみれば古丁氏の短篇小説集『奮飛』雑文集『一知半解』疑遲氏の短篇小説集『花月集』小松氏の短篇小説集『蝙蝠』百霊氏の散文集『大光』等である」

次いで「芸文志」についての記述があり、また同人たちによる文叢刊行会の記事がみえる。すなわち

「同時に文叢刊行会を組織し『文叢』季刊の出版を計画した。実現には到らなかつたが、その後はかえつて個人専集の方向に向つて発展を求め、前後を通じて文芸叢刊を四種ほど出版した。すなわち呉瑛の短篇集『両極』山丁の『山風』梅娘の『第二代』秋螢の『去故集』等がある」

「奉天に於ては文選刊行会より季刊『文選』を発行した。形式は『芸文志』と同じ大型雑誌であるが、内容は芸文志に比べて遙かに生気があつた。該会は『文選』のほか『毎月叢編』を二回ほど発行したのが即ち『文最』『文穎』で、これまた評論を偏重した小型雑誌であつた。一昨年（昭和九年？）に到つて更に文選叢書両種を出版し、秋螢の短篇集『小工車』及び袁犀の短篇集『泥沼』がそれであつた」

「つぎに最近二三年以来は、創作界の健全な発展を目指して満州に於ても長篇小説の試みに手をそめる人があらわれ、すでに出版された本の中に小松の『無花的薔薇』『北帰』秋螢の『河流的底層』及び石軍の『沃土』等がある」

以上が秋螢氏の「満州文芸史話」のごく荒い抜萃である。これで満系作家たちの過去の活動ぶりが、ほぼ諒解できると思うが、これについて見ても、彼らが古くから政治的な圧迫や、経済的な沈滞に悩み、それが独得の「暗い」描写となつてあらわれるほど向陽性に乏しかつた事情を、ほぼ尽していると思われる。前にも触れたとおり、このような満系作家たちが、建国後七八年を経た後になつても、なお政治干渉といつたものをあくまで危惧して止まなかつた理由が、充分のみこめるわけでもある。

なお「鳳凰」は奉天の東方印書館という書店から出版されたが、店主は日本人である。名を飯河道雄といい、その息であつた飯河知記は早稲田の英文科を卒業し、奉天医大の「医科」に感覚的な小品などを発表していた。当時奉天に在住した八木義徳氏あたりと親しく、筆者とも交際があつた。八木氏は在満時代、文学的にはすつかり沈黙の姿勢だつたようである。

「鳳凰」が日系書店から出たように「明々」もまた撫順の「月刊撫順」社主城島舟礼氏の手もとから上梓されたのも「奇であつた。「月刊撫順」は娯楽的な雑誌であつたが、のち新京に移り、「月刊満州」となつて、やはり大衆雑誌としてひろい読者層に支持された。

満文雑誌としては、ほかに「新青年」の名があげられよう。この雑誌には爵青氏が可欽という名で作品を発表している。爵青はこのほか遼丁とも名乗つた。ほかにもいくつも筆名があり、自分自身でおぼえがないほどだということである。

三十三章

「芸文志」の作家とその作品——「華文毎日」——「斯民」——呉郎・呉瑛夫妻
——「明々」の特集——「新しき感情」——古丁一挿話

「芸文志」同人が、曾て発表した作品のうち、主要なものを拾うと、まず爵青に「廃人」「天才者的悲哀」「住民墓地旁的少女」「巷」「群像」「蕩児帰来的日子」「白痴知識」「大観園」「麦」があり、田兵「老師的威風」「同車者」「火油機」「阿了式」古丁「暗」「鏡花記」「原野」「提琴」「皮箱」「平沙」疑遅「山丁花」「江風」「北荒」「夜車」小松「夕刊的消息」「蝙蝠」「病患」「月亮落了」「施忠」「赤字会計」「木筏」袁犀「隣三人」「十天」「海岸」呉瑛「両極」「析」「霧」「詭」「銭四嫂」「翠紅」「野孩子」「女叛徒」「庸医」「新幽霊」

夷馳「同心結」「豊収之夜」「祈禱」王則「昼与夜」呉郎「断続層」

だいたい以上のようなものがある。拾えばまだまだ他にあろうが、きりがないのでやめる。

なお秋螢氏の文中に見られる刊行物のほか、一部の満系作家が、或る一時期に、大阪の「華文毎日」に寄稿したこと、新京で出る「斯民」が、呉郎氏の尽力で文芸界に大きな貢献をしたこともあげておかねばなるまい。呉瑛はすなわち同氏夫人で、他に瑛子、小英等の筆名があり、女士の諸作は多く同誌上に発表された。

一九三七年（昭和十二年）雑誌「明々」は、三回にわたつて異色ある特集号を出した。「創作特集」「魯迅紀念特集」「日本文学紹介特集」がそれである。「創作特集」には、六つの短篇が収められていた。

「暗」古丁「夕刊的消息」小松「老師的威風」田兵「江風」疑遅「雨夜」徐狄「請老師」澪影。

「魯迅記念特集」には、毛利、羅綺、徐狄たちの、この文学界の巨人を哀悼する文章が載り、古丁の「魯迅著書解題」は「完全に魯迅一生の著述の概要を分析していた」と好評であつた。

「日本文学紹介特集」は同年十二月に発刊されたが、これには古丁、文泉、夷夫等六人の訳述が掲載され「直接に日本文学を読み得ない者に一つの甚だ好い食糧を供給した」と喜ばれた。

日本文学の翻訳といえば、新聞「大同報」で出していた「文芸」に、馮雪竺氏が連続的に火野

葦平の「海と兵隊」「土と兵隊」「麦と兵隊」を訳述したとも特記に価する。が、この精力的な作家はこの訳を終えてのち、昭和十四年（?）七月早逝し、「文芸」は氏の死を悼む「記念故雪竺専号」を特集した。執筆者は呉郎、呉瑛、山丁、夷馳らである。

このほか林時民という詩人が、日本文による詩集「新しき感情」を東京で刊行したという事実もちよつと注目される。彼に限らず、多くの満系作家は読むばかりでなく、時に日本文を物し、ことに爵青君の文章など、どこか欧文脈を引いて、神彩奕々たるものがあつた。彼が部厚な「ガリカンチュワ物語」日本訳を抱え、しきりに読み耽つていた姿も思い出されるし、檀君にすすめられて太宰治の小説を愛読したことも興味ふかい一事実だつた。

以上、非常な駈足であるが、ざつと彼ら満系作家の足迹をふりかえつてみた。

「芸文志」が出たころ、奉天あたりの満系批評家によつて「旧体依然」とか「官僚的」とか誹謗されたこともあるが、それは国都というお膝もとに在つて仕事する関係上、やむを得ないことだつたと云えるのだ。穿つた見方をすれば、編者古丁君らが、文筆を弄するのに、如何に外貌をカムフラージしようとして苦慮したか、ひそかに想像されるのである。

しかし彼らは、処世的に一応は擬態をしめしていたものの、片言隻句のうちに、ひとかたならぬ強靱な根性骨をあらわにすることがあつた。

あれはいつのことか、ハッキリ憶えていないが、古丁君らといつしよに、赤玉か銀パレスあたりで痛飲したことがある。彼らは日本語はぺらぺらだし男ぶりはよし、金ばなれもいいときて、女給たちは下にもおかぬもてなしぶりだ。カフェへ行けば日本女性が手もなく媚態をしめしてくれるのだから、昼は鬱屈してくらすとしても、夜になれば大威張りでカフェへくりだし、女たちをからかいながら飲むというのに、不思議はなかつた。

だいぶ飲んだころ、ふとみると古丁先生は長椅子に横にのび、女給の膝を枕に

「ああ酔つた」

などと、李白一斗を地で行つたような酔顔を仰向けている。女給たちは厭な顔もしないで、頭髪を指にまきつけたりしながら

「お水持つてきましようか」

と、えらい愛想がいい。同胞たるこちらに対しては、いつこうサービスもしないで、異邦人たる古丁先生らにばかりいやに親切でやがると、ツムジをまげたくなるようなていたらくである。しかし考えてみると、あの女給は先生たちのお馴染みで、こちらは初対面ときては、差別待遇もやむを得ないところかと、もつぱら飲む方に精を出していたとき、同席の日系作家が、何のキッカケからか、新京にもどしどし新しい建造物が出来て、なかなか盛観である。しかしその中には

あまり見栄えのしないようなものもあつて、満人諸君にも目ざわりになることもあろうと、半分恩にきせるような、半分相手の気を引くような、要らざる発言をした、

と、酔つぱらつて狸寝入りしていると見た古丁先生が「うん？　なに？」とこちらを向くと、にやり笑つて

「なあに、ああいうものも、そつくりそのまま頂戴しますからね。心配ないですよ」

ヅケヅケ云つて、女給が持つてきた冷水をがぶつと飲んだ。

これには驚いた。古丁先生がどれだけ偉い八卦見か予言者か知らないが、出来上つたものを、そつくりそのまま頂戴する気で眺めていたのだ。満州国だの協和政治だの、日本人が知慧をしぼつて、あの手この手と漢民族を懐柔しようとかかつているのに、相手は委細かまわず、いづれまた「中華」本来の姿に返ることを信じて疑わぬ強靭さである。

まだ対米英戦も始まらぬ前のことで、日本の退陣など、考えるものもなかつた時代のことだ。

「えらいことを考えている」と、筆者はひそかに舌を巻いたが、もちろん誰に云いふらすべき筋のものでもないから、胸に畳んだだけで、しばらくすると、そんな言葉も忘れてくらしていた。

昭和二十年日本敗戦。八月十五日は彼ら中国人にとつて「勝利記念日」なる祝日となつた。新京でも、戸毎にそのビラが貼り出されるのをこの目で見たが、戦後改めて会つた古丁君らが、あ

の夜のカフェでの放言などきれいさつぱり忘れて、一言半句も

「どうだ、予言どうりだろう」

などと、もう一本お面をとられずに過んだのはまず幸わせとすべきであり、一面には彼らの大人ぶりをしめす一話柄でもあつた。

三十四章

小林秀雄の古丁評——古丁、爵青の対談

小林秀雄氏がたしか菊池氏らといつしよに、二度目に来遊したとき、どういうきつかけからだつたか、小林、古丁、爵青、それに筆者の四人が、吉野町へんのカフェで落合つたことがある。音楽の話などがはずみ、ベートウヴェンのバイオリンコンツエルト「ニ」長調がどうのこうのと、筆者が一席しやべりだしたら、小林氏は

「え？　何のニ長調だつて？」

と、よく聞きとれなかつたか、筆者の説明不足で、要点が飲みこめなかつたか、いささかつま

らなそうな顔で聞き返した。ちようど氏が、さかんに音楽に凝つていた時代のことだつたのではないかと思う。それからの氏は、こんどは焼物の方に興味を向けるようになつた、その前の一時期だつた筈である。

が、音楽についての閑談は、いつか止んで、しばらく別の何かが話題になり、そのうちふと話がとだえたとき、小林氏はぐつと古丁、爵青君らの方をみつめると、非常に真面目な口調で、しかも断乎として言い放つた。

「あなたがたは、非常に聡明だね。はつきり言えるね」

何の話のつづきで、そんな言葉が出たか、それがハッキリするとよく飲みこめると思うが、前後を忘れたので如何ともしがたい。とにかくべた賞めのそんな表現が、あまり面と向つて相手を賞めるなどいう芸のなさそうな「聡明」なる小林氏の唇から、突如として棒のように突き出されたのを、異様な感じで記憶にとどめたという次第なのだ。

古丁、爵青君らの聡明は、小林氏を待たずとも衆知のところだつたかもしれないが、初対面で、たちまちご両人の心胆を奪う一言評を吐いたところに、小林氏らしい直截さがあつて、逆に心を打たれたわけでもあつた。

古丁君らが、日本人作家なみにてれ臭がつたか、へきえきしたか、それも忘れた。何となく、

ただ平然と受け流していたような印象だけ残る。古丁の名が、いま中国文壇で盛んである噂も聞かないし、人物がどれだけに評価されているかも分らない。日本人で彼の名を知るものはさらに少かろう。が、それは抜きとしても、とにかく彼の存在が相当に大型だつたことは確かで、何となく一力茶屋における大石内蔵助めいた印象があつた。外面はあくまで柔和で、内剛の精神を蔵する。察しないものは本当にしないであろうが、彼の外柔内剛をしめすこんな挿話もあるのだ。

筆者は彼らの「芸文志」事務会を、前後にただ一回だけ訪れた。

城内の大馬路に面した煉瓦建ての二階家で、その二階に彼らの事務所があつた。附近に「鹿鳴春」「松竹梅」などいつた一流料亭が競いたつ繁華街の一角である。ちようどそのとき、事務所には古丁総帥以下二三人の同人が、忙しく事務をとつていたようだが、しばらく閑談すると、爵青君の案内で、附近にある彼の寓居を訪れることになつた。同氏の家も、筆者は初めてで、向い側の露路を入り、幾つか曲つたところに、吉林あたりによくある板庇のついた門を構え、爵青一家の住む平家の家がたつていた。彼の父君は満州旗人の出身と聞いたが、あの門の造りはまさしく旗人（満州八旗。純粋な満州人）の家の特徴を示すものである。

廂房の二三室を占領して、爵青君、同夫人、子供たちの数人が住んでいるようだつた。父君はすでに他界したと聞いていたがハッキリしない。存命の母堂たちは、正房に住んでいたわけであ

ろう。

爵青君の書斎は、八畳を少し縦長にしたほどの広さで、窓ぎわに炕(カン)があり、小さなテーブルが散らばり、大きなテーブルの上に、天井から電気マッチがぶら下つていた。すでにマッチも配給になりかけた時代で、愛烟家はいろいろな「発明」を強いられていたころのことである。

いつしよに来た古丁君が窓よりに腰かけ、筆者は入口のそばの椅子に腰かけた。爵青君はどうかというと、椅子には掛けず立つたまま、洋式のパイプに刻煙草をつめると、さつきの電気マッチで火をつけては、ぷかぷかやりながら部屋を行つたり来たりしてしやべりまくる。おしやべりに気が入ると、ついパイプの火が消える。そのつど電気マッチで点火してぷかぷか煙を吐き出す。

どうにもそれが目まぐるしいが、古丁君との会話が何か重要な関係に入つたらしく、彼は筆者の存在など無視したように、大跨に部屋を行き来し、電気マッチの方へのび上り、そしてまたぷかぷかやつては、議論に熱中する——その背のたかい、やや長めの顔が、何となくルイジューヴェじみ、部屋全体が、ジューヴェ登場の「どん底」の一場面めいて見えてきた。

根気よく待つうちに、ようやく難解の中国語会話は終りをつげ、あとは歓待の酒になつたか、それともいいかげんに切り上げて辞去したか、そのあたりもすつかり記憶にない。

ただ一つ、あのときの会話が、ご両人の親密さの表現であつたか、それとも逆の表現であつたかと、今になつて、不思議な思いで回想されるのだ。

その後もういちど、筆者は彼の家を訪れたことがある。幸い在宅で、彼は筆者の顔を見ると、すぐ

「酒を飲もう」

と云いだし、例の窓ぎわの小卓をかこんで白乾児の盃をあげたところへ、ぶらり訪れたのが呉郎君だつた。彼は遠慮したか、勧められる酒を手をふつて断わり、遠くの方に坐つて、何か話しかけるふうだつた。この作家は色白の貴公子然とした優男で、古丁君が外柔内剛、爵青君が外剛内剛なら、呉郎君は内柔外柔といつた趣があつた。

さて、ここで思い返すと、このときの訪問は、どうやら終戦後のことだつたように思える。というのは、日本人は内地帰還ときまり、筆者は家具売払いの相談を持つて、彼のもとを訪れたことがあり、小酌ののち爵青君はすぐ馬車を呼ぶと、同乗してわが家を訪ねてくれた——それがどうもこの時のことらしく思い出されるからである。俳人伊東月草揮毫の「浪曼亭」の扁額を、彼が激賞するまま譲りわたしたのも、このときのことだ。

が、それはともかく、以上のべてきたとおり、筆者らは古丁といい爵青といつても、いつさい

無差別に、同じ親しい友人としてつきあつてきたのであるが、それがとんだ見当外れであつたことが、終戦直後に判明した。どうも筆者らの見方が甘かつたとしか、考えられないのである。

三十五章

古丁・爵青の離反――ソ軍進駐――中ソ友好協会――激しい非難――終戦後の小松と疑遅

終戦後の新京は、先づ蔣政府の国民軍に占領されたが、間もなく中共軍の手に移り、つづいてソ軍入城となつた。ソ軍の統治は約半年ほどつづいて、あとを中共軍が引きついだが、たちまちまた優勢な国民政府の新一、新八軍とのあいだに市街戦が展開され、中共軍は退いて国民政府の統治下となつた。日本人の引揚げが開始されたのはこの時期に当り、だいたい引揚げの完了した一年後、またも激烈な中共反撃にあつて、ようやく旧満州東北地区は解放地区に入つた――というのが、新京における国共交迭の概略である。

ちようど第一次中共軍治下からソ軍進駐となつたころ、長春（旧新京）にはいちはやく中ソ友

好協会が設立され、古丁君らは、他一二の同志とともに、協会のしごとを分担していた。すなわち知る、彼らは以前から、志を中国共産党によせ、中国革命の一分子たろうと念じていたことを。

ところが爵青君は、この同志に加わつていなかつた。

そのころ筆者らは、新京移住当座がそうであつたように、市内にある親戚の佐藤方に避難生活を送つていたが、空しく日を送るよりはとの配慮と、もう一つは、カムフラージュの気持ちも手つだつて、室町小学校の角のあたりへ露店の一杯屋を出して忙しく働いていた。

と、或る日のこと、どこでどう聞き伝えたか、ドヤドヤ一群をなして入つてきたのが古丁、山丁、その他中ソ友好協会に働く作家たちだつた。

彼らが来るすこし前から、山田清三郎氏が坐つてコップを前にしていたし、後から逸見猶吉君も来合わせたように思うが、このへん記憶がボヤけている。

が、何にしても古い仲間同士のことだ。とたんに話は賑かになり、しまいには湯豆腐や漬物などで酒がのめるかとばかり、中国風な醬肉（ジャンロウ）などを買いこみ、談論風発の大酒宴となつた。

そのうち何かのキッカケで、爵青君の名が話題に上つた。それがすこぶる穏かでなく「爵青は生かしておけぬ」といふ険悪な調子だ。こちらは酒のサービスが多忙で、彼らの相手になつても

いられず、しぜん話は山田、古丁らのあいだにはずみ、そこから爵青の噂が発生したらしいのである。

「みすみす殺すとは気の毒だなあ。それよりいつそ北京へでも逃がしてやるわけにいかないのかね」

これは山田氏が、爵青をかばつての発言だつた。

古丁氏はいつもの酒々落々の態度を崩さず、椅子に背を凭せ、微笑を含んで答えた語調は冷厳そのものであつた。

「それは出来ませんね。ぼくらは許しても、民衆が許さんだろう」

あとなお二三の応酬があつたようだが、けつきよく山田氏は弁護を諦めて引き下るよりなかつたようだ。残念なことに、こちらはチラホラ小耳に挿むだけで、どうも話がハッキリしない。何か爵青の言動に、他人の窺い知らぬ暗い影がさしているようなのだが、それが何なのか、どういう訳分いのことか、さつぱり分らない。

この暗黒時代には、日系、中国系をとわずおしなべてスパイの密告を恐れていたものだが、爵青君の場合も、どうやらそれに類する誤解があつたらしい——ていどのことしか、今にしても推測できないのである。

ただし、その誤解が、古丁氏の云うがごとく「仲間を売つた」という険どい話にまで発展したところに、かれ爵青君の救いがたい宿命が存したと云える。

なお聞いてみると、現在爵青は行方不明とのことだつた。

「しかし、探せばすぐ分ることだ」

と、古丁氏はあくまで嘯く。

始めはのどかに賑かで、後は「殺す」のどうのという、殺伐きわまりない話に転じたこの日の酒宴は、話題がふたたび別のことに移るとともに、また最初の賑かさにかえり、やがて協会の人々は

「再見、再見」

と手をふつて帰つて行く幕切れとなつた。

「どうしても生かしておけないそうだ。叶わないなあ」

こんなことには馴れている筈の山田清三郎氏が、コップをおいて長大息した。

古丁、爵青間の交誼について、見方を訂正しなければならぬと考えるようになつたのは、この一幕があつてのちのことである。

しかも後にいたるや、友好協会内部にも分裂さわぎが起り、古丁君一味は異分子として協会を

去るような羽目になつた。

いな、問題があつたのは彼らばかりではない。類似のケースは他にもあつたのだ。疑遲君は中共軍治下にあつて、首都警察庁の外事課長という要職にあつたのに、国府軍の統治下となるや、いち早く姿を消した。小松君は国府軍治下にあつて、旧満州新聞跡に誕生した中国新聞の編集長となつたのも束の間、中共軍との市街戦が開始されると同時に、行方をくらました。

革命は成功し、中国はいま全世界に偉容を誇つているが、革命の成るや、決して一朝一夕のことではなかつた。これら幾多の浮沈の姿を傍観しているだけでも、時に胆を冷し、時に途惑い呆れたのは、あに筆者のみでなかつたであろう。

三十六章

満系作家集「原野」——満系作家の大内隆雄評——悄吟作「ソフィヤの嘆き」

さて、ここでふたたび創作飜訳集「原野」刊行のころに筆を返そう。これは古丁氏の「原野」を始めとし、爵青氏の「大観園」袁犀氏の「隣三人」等、九作家による十二篇の作品を大内隆雄

氏が飜訳し、東京の三和書房から出版したものである。十四年秋のことだつた。

このころの来満者に山田清三郎氏があり、小田嶽夫氏も来遊し、東京では大連出身の上村哲弥が第一公論で活躍しているなどのことがあり、東京、新京間の交通が次第に賑かになりつつあるときでもあつたから、おそらくそれらの人々の誰かの橋わたしで、東京出版という朗報がもたらされたものと思う。

前にくどくどしく、満系作家諸君の作家名をあげたのは、その中の幾篇かが、この原野出版によつて、漸く一般の耳目に触れるようになつた所以を強調したいがためであつた。

「原野」はだいたい好評だつたようであるが、後になつて満系作家諸君が、必ずしも訳業に満足していない事実を聞き知つた。

誰が口にした言葉か忘れたが、どの作家、どの作品をとつても、同じ語法と文調で訳されており、各作家独特のニュアンスが出ていないこと、また、仕事が少からず荒い——といつた不満が潜在したようである。

大内君は仕事が恐ろしく早い。大酔して帰つても、一眠りすると、むつくり起きて飜訳にかかるという話をしてくれたのは、近東綺十郎こと桟朝男君で、新京日日時代、同じアパートで同宿していた彼の言葉だから誤りなかろう。かく仕事の早いのに、異存はないが、そのために間々仕

事がおろそかになるようでは、対象がデリケートな中国作品の飜訳というしごとだけに、とかく非難の声が出たがるのも、むりのないことだつたといえる。

後に「満州浪曼」が評論特集を試みたとき、辛嘉その他の作家が、書下し日本文を寄稿したのは、必しも大内忌避のあらわれとばかり云えないであろうが、しかし、事に触れてその不満はかくせなかつたようで、ひいてそれが遠因となつたものか（過労もあつたに違いないが）大内君は神経衰弱から、終戦前後には、一種恐迫症患者とまでなり、人前に姿をあらわさなくなつたと伝え聞いたのも、大きにありそうなことに思えるのである。

が、一時大内君の飜訳への熱のあげかたは、もの凄いばかりだつた。他にも飜訳家はいないでもなかつたのに、満系文学の飜訳といえば大内訳にとどめをさすようになつたのは、彼の勉強が今に始まつたものでなく、長い蓄積がようやく物を云うことになつただけのもので、この点、他の追随を許さなかつた。

それはともかく「原野」出版を祝い、文話会が九月の例会を「原野」出版紀念会にあてたことは、前にちよつと書いた通りである。九月二十三日、国都飯店でひらかれた会合には、各原作者、大内訳者を主賓として約四十名の会員が集まり、盛んな宴を張つたいきさつは、当時の「文話会通信」に詳しい。

今までも諸方の雑誌で、満系作家の作風はほぼ知つていたつもりであるが、こうして一本になつてみるとあらためてその「暗さ」が注目された。しかもそれが各作家に共通の筆調だつたことは、すでに秋螢氏が指摘していたところで、満系作家の一特色として、反つて珍重すべきだつたかもしれないが、当時批評の筆をとつた日系作家や批評家は、いずれもこのことを気にし「満州には貧乏と雨と泥濘しかないのだろうか？」

と首をかしげたものだ。

今になつてみれば、大内君の作品選択眼にも、多少の偏向があつたのではないかと倩しられる点もあるが、この「暗さ」は、彼らにとつていわば伝統的なものであり、突如支配者顔をして現われた日本人の楽天的頭脳では、しばらく理解できない性質のものであつたことも事実だつた。

なおこの年、古丁氏は前に出した作品集「奮飛」により、盛京文芸賞というのを受けた。

三田文学の和木清三郎氏が来遊したのも、この年である。これが後に「三田文学」の満州文学特集となつてあらわれる素地となつた。「文芸春秋」誌上に島木健作氏の「満州記行」がのつたのと前後して同誌に阿部知二氏の「楡の墓」という短篇が発表された。これは氏がハルピンへ来遊したときの見聞を基に書いたもので、静かないい作品であつた。

ハルピンといえば、同地出身の悄吟氏（後の蕭紅・蕭軍氏夫人）の「ソフィヤの嘆き」が、今

ごろになつて翻訳紹介されているのを、年末の「満州行政」で読んだが、これはハルピンの白露人を描いたもので、水晶のようにきらきら光る屈折をみせた佳作であつた。

三十七章

路傍の老タバコ売り——文話会の作家派遣——熱河行

寛城子のバス発着所の前に、道路の片隅を利用して、夏も冬も小さなタバコ屋が店をひろげていた。タバコ屋といつても、ほかに瓜子児（クワツル）、向陽葵（ひまわり）の種子、ねじん棒や鉄砲玉のような駄菓子、夏はサイダー、ラムネ、それに四季それぞれの果物、乾果類までとり揃へ、雨戸を二枚つないだくらいの売台一杯にひろげて、主人は低い将几（しようぎ）で居眠りしている。日本の駅の売店を、もつと平たくおしつぶし、もつとごたごた原色をなすりつけたような図柄を想像してもらえば、だいたい容子が知れるというものだが、変つているのは主人の爺さんだつた。年の頃はもう七十をいくつか越しているだろう。小柄な体が、いつそう萎び果て、両眼は赤くただれて、いつも涙がたまつている。疎髯が口の周りから頤の下までのび、目をさますと、指さきでしごきながら、誰にとも

ない独りごとをはじめる。客が買おうと買うまいと、いつこう泰然たるものだ。物憂そうに、台の前に立つ客たちを相手に、多分昔の思い出でもしやべりだすらしいのである。それがまるでお経でも読んでいるかのように、ダラダラいづまでもつづくのを、バスを待ちながら筆者もよく眺め入つたが、台の向うに立つている中国人まで、これまたニヤニヤ泰然と、のんびり聞き入つていた。

お昼になると、傍らでいつもこまめに手伝つている爺さんのつれそい——この方はまだ元気らしく、年も五十台と見えた——が、二皿ほどの料理に、小さな白幹児（パイカル）の徳利をそえて爺さんの前へお供えする。爺さんはとたんに活気をおび、ゆつくり長い箸で皿の料理をつまむと、小さな盃で、お燗のついた支那焼酎を一口かたむける。

かれこれ半合ほどの酒をのむのに、前後一、二時間たつぷりはかかろうというスローモーぶりで、一口すすつてはあたりを眺め、前に客ありと見るや、得意の長広舌が始まるのである。

阿呆陀羅経のようなその奇声を、筆者らは何度立ちどまつて聞いたことだろう。爺さんのおしやべりは、時に昔の回想のようでもあり、今の若僧どものだらしなさをたしなめる強い語調ともとれた。

夏は竹竿で斜めに張つた、つぎはぎだらけの木綿の日覆いが、爺さんの赤茶けて皺だらけの顔

を日蔭にしてくれるが、容赦なくとびまわる蠅は皿の料理に雲集し、払えども去らない。「満堂の蒼蠅掃えども昼きず」とでも爺さんは唸つていたのかもしれない。が、ときたま思い出したように手で追うだけで、あとは何もかもあきらめきつた静寂境だ。ダラダラ、同じような説教節がつづくだけである。

白幹児も美味そうなら、爺さんの放念ぶりも徹底して見事だつた。「これある哉」と、思わず見惚れて立つ東海のインテリ遊子のあつたことを、爺さんは知るや知らずや？

いま中国には蠅も蚊もいなくなつたと、だいぶ偉い人たちが大騒ぎするが、蠅も蚊も目にとめぬ爺さんのような特別人種こそ、偉い人の目には見えないのではないか。爺さんはいまもたしかにいる。そして蠅も蚊もたしかにいたとしたところが、あの黄土中国がどうたじろぐものだ。中国へ行くからは、蠅も蚊も爺さんもちやんと待つていてくれると想像したほうが、白幹児や豚脂の香い、さては家並みの招碑の色彩まで、いつそう鮮明に浮ぶというものではないか。

とてもあの真似は出来ないまでも、何とかしてあの持味だけでもとりいれたい。という願いを生かすために文話会は十四年冬になると五六人の作家を動員し、満州僻地に旅行させることになつた。吉野治夫、大内隆雄、小松、今村栄治等が、それぞれ好みの地に向い、筆者は錦県、熱河の旅に上つた。

チベットのラサは、一度あのラマ廟の写真に接した少年時から、ぜひ一度訪れたいと願つていた土地で、熱河の普陀宗乗廟の姿は、いくらかでもラサのおもかげを写していてくれると信じたからであつた。

熱河は崩壊に瀕していた。あんなぶつ壊れ都市というものを、見たことがない。しかし武烈河の畔から寺々を大観したときだけは、身を西域においた感じで、とめどない空想心がわいた。ある寺の門ぎわには、金剛力士に踏んまえられた豚と女人の交嬉像が横たわり、一人の中国人青年はあらわに指しながら「ブタ、ブタ」と日本語で言つてニタニタした。

「牛だろう」

筆者は目を疑つたが、真黒な獣像は、豚といえば豚、牛と思えば牛のようで、まるつきり稚拙なものだつた。

やがて地上百尺の紅台の上に立ち、盛清興亡の跡を思いながら、筆者の雇つた洋車夫が、人待顔に徘徊する姿を眼下に追つた。この洋車夫は、馬車を深していた筆者に「没有馬車了——馬車ない」と強引に洋車をすすめると、無理やりここまで乗せてきたのだつた。ひそかに思う。タバコ屋の爺さんになり切るまで、この洋車夫君には、まだ幾春秋が残されていたわけであろう。

三十八章

ふたたび「文話会通信」——後藤和夫と筒井俊一——バイコフ登場——「偉大なる王」

越えて十五年一月から「文話会通信」は十余頁に増頁、全会員の動きを細大もらさず報道するかたわら、また種々の寄稿を掲載するようになつた。筆者らはロクに会費も払わず、タダで読みでのある冊子を受けとつていたようなものだが、文筆生活をするのに、どうでもこうでも入用な冊子という筋のものでもなさそうだつた。素人作家がむやみやたらと増えて行くのを、ハラハラするような感じで傍観していたというのは、何も天邪鬼な見方ばかりでなく、満系作家諸君の力作重点主義に重圧を感ずるにつけても、作家はまず作品をという平常の思いが、ますます強められる一方だからであつた。

が、議論はともかく「文話会通信」はいよいよ発展し、四月から満系作家諸君の編集になる四頁の満文版を挿入するほどになつた。形の上では、とにかくこれも日満合作の一つのあらわれということになる。

ちようどそのころ、東京から来た富沢有為男氏は、長谷川濬君の案内でハルピンにロシア人作家H・A・バイコフを訪れたが、その訪問記事と同時に、長谷川のバイコフ紹介の文章が発表され、いち早くバイコフの長篇「偉大なる王」が満日紙上に翻訳掲載されるニュースがつたえられた。

バイコフの作品は「マーシュカ」という短篇が前に「満州浪曼」に発表されたことはあるが、殆ど黙殺に近い扱いを受けたのに対し、今回は新聞がとりあげたかげんもあり、バイコフの名は大きく日本人の前におし出されるチャンスにめぐまれたのだ。

おりから大連の満日記者筒井俊一君が新京に移り、後藤和夫理事の激励を受けて、新京学芸面の確立に、精力的に活動しだしていた時期と思う。

この「満日」がいち早くバイコフをとりあげたのは、意図するところを、強力におし進めようとしてのことだつたと察しられる。

長谷川の紹介によれば、バイコフの作品がロシア人のみならず、諸外国に知られるようになつてから、今まで十年近い日子を経ており、当年六十八才のこの老作家には、次のごとき作品があるとのことだつた。

○ざわめく密林（短篇集、ハルピン・ザイツエフ版）○満州の樹海（短篇集、一九三四年・ハ

ルピン）○偉大なる王（長篇、一九三六年・満州虎物語）○白光（児童のための動物小説）○随筆エッセイ。

ほかに「牝虎」という長篇「世界旅行記」「東洋風な幻想物語」「私の小さな友達」などの名もあげられている。

バイコフはこのとき、満州の日系作家に対し、次のメッセージをおくつてよこした。

「君たちに比べると私はもはや老人で、いわば君たちのパパである、パパから息子たちにおくる言葉として聞いてもらいたいのは、君たちがもつと満州の自然に注目し、それを愛してもらいたいことだ」

こうして登場したバイコフは、この年の暮れあたりから「偉大なる王」を、長谷川訳で満日に載せ始めたが、これが後になつて文芸春秋社と満日社の双方から出版され、翻訳権問題でちよつとしたごたごたを起しながら、とにかくよく売れ、終戦後は新潮社の文庫本や諸会社の児童本にまでなつて「虎」は死しても皮をのこす妙機を得た。作者たるバイコフは、終戦当時ハルピンに在り、シベリヤへ連行されて病死したと伝えられるからだ。

著書を見ても分るとおり、また「自然を愛せよ」と云う言葉からも察しられる通り、彼は作家というより、むしろ自然観察にたけた一種の自然科学者であつた。「偉大なる王」の挿絵は翁の

自筆であるが、その細かい観察と筆致は堂に入り、もとは画家だつた富沢氏あたりも感嘆して、新聞で使つた原画を、後年まで大切に保存していたほどである。

翁自身「自分は自然科学者である」と云つていると、長谷川君から聞いたこともある。零下三十度の雪上に身を伏せ、銃を構えて虎を射つたこのロシア人作家は、やはり日本作家には見られぬタイプで、アメリカのヘミングウエイあたりが蛮地へ狩猟するのを趣味とするなどの話柄と好一対をなすものである。

筆者は十七年の暮れだつたか、満日の新年原稿取材のため、筒井記者と同行で、ハルピン馬家溝（マジヤコ）なる翁の自家を訪問のはこびとなつた。

パンや蜂蜜などの楽しい饗応を受けてから、翁が丹念に蒐集した動物類の剝製や細緻なスケッチを見せてもらつたが、それにもまして一驚したのは、一室に長さ三尺ほどの蛇が飼われ、一人娘の美しいナターリヤさんが、目の前でくるくる首にまきつけて見せてくれたことだつた。彼女が蛇を襟巻きにした写真は、満日の紙面に載つて大勢の紳士淑女を驚倒させたが、こんなところにも、満州に長く住みついた異邦作家の、一方ならぬ野性への傾倒が見られるわけであつた。

のち菊池寛氏がバイコフを訪ねたさい、渡日の交渉がまとまり、バイコフは親しく日本各地を訪れた。菊池氏はそのとき、熱心に日本永住を勧めたが、この老作家は満州の山や樹海がよほど

気に入つていたとみえ、有難く拝辞して帰満した、その後もハルピンの陋屋を出ようとせず、そのまま不幸な終戦を迎えることとなつたのだ。

美しいナターリやさんは、その後、どうなつたことだろう？

――註・以上の記事を書いてしばらくたち、バイコフと令嬢ナターリヤさんは、ホンコンに健在であり、翁はこのことを日本の知友に知つて貰いたいと熱望しているとのニュースを伝え聞いた。生きているとすれば、翁の年齢は八十才を越える筈である。日本永住を説いた菊池寛氏の亡くなつたことを知ればさぞ寂しく思うことであろう。なおこのニュースは、さきごろ来日したドンカザック合唱団の一員によつてもたらされ、次で読売紙の西村忠郎氏によつて日本へ伝えられ、翁はホンコンからオーストラリヤへ向う予定であるともきいた。

三十九章

檀一雄登場――ふたたび逸見猶吉――八丁と田毎

バイコフ登場にひきつづき「日本浪曼派」の青年大将檀一雄の登場となる。同じ青年組でも大

宰治はすでに「晩年」の黄昏に彷徨し、満州という得体も分らぬ異域めざして漂蕩するなどいつた勇気は出なかつたろうが、元来がテヘランとかアーヘンとか、ロッテルダムなどに異常な関心を寄せる檀一雄は、暗雲低迷の東京にはとうてい我慢出来なくなつたか、この年の夏、ひよつくり新京へあらわれたときは、すでに南新京の親戚のもとに、令妹寿美さんも、写生旅行だつたかに来て兄の来満を待ち受けているという膳立のよさで、檀先生は、その日から何の屈託もない表情を仰向けたまま、新京せましと濶歩するはこびとなつた。（註・これは筆者の記憶違いで、先きに檀君が渡満し、間もなく寿美さんを呼ぶことになつたという）

例のいろは歌留多に「そ――そら向いて行く檀一雄」の句がある。新京は空の都である。家竝みつくろう地平の涯てに、層雲断続して見事な蒼穹のつづれ織りを織りなす。背の高い檀一雄が、空に自身の投影を探ねることく、ときに突兀、ときに蹌踉として歩み来り、歩み去る姿は、まさに衆目を惹くに足るものがあつた。

お膳立てがいいといえば、登場するや否や、するりと満州生活必需品会社なる金持ち（物持ち？）会社へ入り、そこの弘報科という係りから大枚のお給料を頂く身分になつていた。土地柄から、どこかに籍のあるなしで、生活上の便宜が天と地ほど違つてくる。生必（同社の略称）に籍があるといえば、官吏なみに官吏消費組合なるところから、伝票で何でも買えるし、本屋から

酒場から、いつさいつけがきく便利もある。彼が友人逸見猶吉氏の献言を用い、いち早く生必へ籍をおいたというのは、最も賢明な処世であつた。

「檀一雄が新京へくるそうだね。どこへ就職したらいいだろう?」

檀登場の前の一日、市中で出合つた逸見猶吉は、真剣な顔つきで心配していた。

「さあてね。大将と相談してからでないと、難しくないかね」

あいまいな返事をしたのは、筆者である。

「うん、うん」

逸見はしきりに考えこんでいたが、いざこざなしに自分の勤める生必を推し、そのままそこへおしこめる方法に成功したらしい。逸見は一両年前かに日蘇通信をやめ、新発足した同社で、宣伝用の雑誌を編集する役についた、とはいうものの「浪人」の不安と焦慮は彼自身が痛いほど味わつていた筈である。

もつとも檀君は、こんど初めて満州へ来たわけではない。早くも昭和十年ごろ、満州蒙古を踏破している。「此家の性格」についで「夕張胡亭塾景観」を発表、芥川賞候補者としてあげられた前後のことと記憶するが、その長旅から帰ると旅行記やら談やらで、東京の友人達を煙に巻いた。何でも蒙古の大豪族が、ぜひ娘の婿にと所望したというのだが、その邸宅たるや、門に立つ

て遠望しても、お稲荷サマの鳥井よろしく、中門につぐ中門の屏列で望遠鏡でのぞいても奥が見えなかつたうんぬん、というオマケのような下げまでついて賑かなことだつた。

その昭和十年ごろ、逸見もたしか新京にいた筈である。彼は神楽坂で喫茶店アトラス（ユーレカ?）を経営しながら、高村さんの「歴程」に詩を書いていたが、首尾よく喫茶店はダメになり、それを機会に日蘇通信に入り「月刊ロシヤ」の編輯員として渡満したのが、九年か十年の頃だと、早稲田の同窓だつた、同じ詩人の緒方昇氏が「考証」している。してみれば十年何月或いは逸見、檀の顔合せぐらいあつてもいい筈だが、聞き洩らしたのでシカとしたことは判らない。とにかく逸見、檀の組合せは、まことに堂に入つたところがあり、まるで前世からの因縁ごとめいて形影相伴つていた。そんなところから、やや臆測的な十年邂逅説も思い浮ぶわけである。

会社で出す雑誌は、たしか「物資と配給」という、ちよつと見当のつきかねる、しかしその頃の庶民の生活にとつて、切実極まりないひびきの絡む名称だつた。

逸見は詩人ながら、絵が達者で、雑誌のカットから表紙まで一人で画き、やはり絵心のある檀一雄が「うまいね」と玄人らしく賞めていた。ときどきスケッチブックを小脇に「今日はちよつと写生に」と、カット種を仕入れに、城内の満人街をうろつく逸見の姿を見かけることもあつた。そんな関係から、彼は人の知らぬ不思議な飲み屋を発見する名人で「エコノミヤ」というウ

オトカのうまいロシヤ酒場を教えてくれたのも彼なら、山茶寮（？）の隣りの某という地下室酒場を教えてくれたのも彼だつた。終戦間近くなると、新京もだんだん物資が不自由になり、飲み助は一杯のむのに大苦労したが、彼は永年の鍛練で、あまり日本人などの行かない大馬路の露路奥にある満人市場の中の小汚い露天飲屋あたりで、卵の天ぷらなどと称する珍肴を肴に、平気で強烈な白乾児をあおつていた。

「おい、物資と配給君。きみは少し配給してくれないといかんぞ」

不自由な頃の或る日、そう云つて援護射撃を頼んだら、彼は即座に

「寛城子の生必倉庫にはね、サントリーが山の如しだ。そのうち二三本わけてやるよ」

と確約してくれたが、それきり終戦となり、彼は過労から肺をやられて死んでしまつて、サントリーの夢はハカなくなつた。

十五年秋から十六年にかけ、筆者らが足しげく訪れたのは、吉野町のおでん屋「八丁」と、同じ町の外れにあるそば屋「田毎」の二軒だつたろう。「八丁」は愛知県岡崎へんの出身に因んだのか、口も八丁手も八丁の洒落だつたか、ハッキリしない。が「田毎」の経営者は、遠い遠い北海道は函館の出身で、手打そばを売物にするところから、そば所の信州田毎の名を借用したものらしい。「八丁」の名物男に銀ちやんなる若い衆があり「田毎」の看板娘に俊ちやんなる美少女

があつた。

銀ちやんは関西弁ながら、気前はカラッとしており、おでんの箸捌きも鮮かで、どれほど客がたてこもうがおでんの大盛皿が何丁出ようが、豆腐一つ、酒一本お勘定の辻褄が合わぬなどいうヘマは演じなかつた。それでいながら口達者で、こと女性問題にかけては一かども二かども熟練工的口吻を弄する悪癖があり、若いのに青白くやつれた頬には冷たくニヒルの色が沈んで、関西ふう丹次郎のおもかげがあつた。

そのくせ店には女をおかず、ほかに二人ほど若い衆が手伝うだけで、いつも満員の客に、うまいおでんと酒を提供していた。

四十章

或る挿話——美少女俊子——内田辰次

たいていの給料生活者なら、まさか白昼から飲み屋で泰然坐りこみ、そのまま深更にいたるなどの芸当は夢にも及ぶまいが、そこは名だたる物持会社だけに、逸見先生や檀先生が、午後から

行方不明になるなどあつても、どこ吹く風と至極おつとり構えてくれていたらしい。
人目を避けでもすることか、ご両所とも昼から消費組合の食堂でアスパラガスでビールの満を引いていたり「八丁」や「田毎」に沈没していたりは毎度のことで、上役もさぞ顔負けしたろうが、その上役自身が、たまには行方不明になるし、ヒマな人間は他にもごろごろしていたから、二人とも別に何を気に病む要もなかつた。新京イデオロギーといえば難かしくなるが、何のことはない、真昼から飲むこととみつけたりくらいのとこだつたろう。
檀一雄がさきごろ発表した作品に、この「田毎」の俊ちやんをあつかつたのがある。逸見先生を仲人に、結婚申込みをしたところ、そそつかしやの仲人は、俊ちやんはほつたらかしで従姉の静枝さんだかに檀君の意向を伝えた。が、静枝さんはすでに婚約ととのつた身とあつて、みごとあてが外れた——といつた悲恋物語である。
「あれはまさしく八雲族だ。顔から声から素晴しい」
初めて「田毎」へ行き、俊ちやんの馨咳に接するや、檀一雄は決意のこもつた声でご託宣あつた。ウソはなかつた。あんな初々しい顔立ちと、香水のようにふくよかな声をもつ少女を筆者も見たことがない。
後に川端康成氏が来遊したときも、思いついてそばを食べに案内したところ、氏もそばが気に

入つたか俊ちやんが気に入つたか、その後も二三度「田毎へ行きましよう」と逆に筆者らを誘つたことがある。
終戦後、この一家も日本へ引揚げたが、無理が祟つたかして、俊ちやんはあたら胸を病み入院の身となつた。それと聞き知り、籠一杯の果物や罐詰の類を、わざわざ病院へ届けたのは他ならぬ檀君で、この話はたしかあの短篇にも出てくる筈である。
だいたい「田毎」は、満州建国当初の大同学院卒業生どもがヒイキにしてとぐろをまいた古蹟とあつて、壁から襖から、豪傑連中の楽書きで真黒だつた。建国組と称する当時の悪童どもが、連日流連して談論風発した梁山伯だつたわけだ。
そばがうまいといつたところが、たかが寸の短い真黒けな手打ちそばというだけで、タレは砂糖気なしの薄塩辛い、せいぜい淡白といえばそれ位の風味の代物だつた。ほかに刺身とか茶碗蒸なども出来たようだが、それくらいをさかなに、とにかく客のこまない奥座敷で、ゆつくり杯をかさねることが出来るというのが、最大の魅力というところだつたろう。用があつて声をかければ、遠い帳場のあたりから、例の俊ちやんや静枝さんの澄みきつた「はあい」が、のんびり聞えてくる。あの「はあい」が実は何ともいえない有難さでもあつた。
思えばこの家にも、よく通つた。扇芳グリルどころか、借金のつけが山ほどたまつたが、これ

はいつたい、誰が支払うべきか、誰も答える術を知らなかつた。いつも二三人から四五人づれだもの、主謀者が誰なのか、知つたものはありはしない。だいたい「田毎」を紹介したのは、大同学院一期卒業生たる長谷川潛で、いちばん顔が売れていたから、何となく彼におんぶした恰好ですごしていたが、いつこうに払うようすもなく、後で調べてみたら、つけは全部筆者の名宛てになつていた。半分も払えたかどうか怪しい。終戦でそれつきりになつたが、檀先生と違い、せめて果物籠一つ届けることもようしえなかつたとは、思えば思えば罪ふかいわざであつた。

序でに書きとめておくが、檀君の令妹寿美さんは、そのまま新京に住みつき、三村という左翼の闘士と結婚した。その三村氏は終戦を迎えたとたん、北尾陽三君らと同じく、中共の文化宣伝隊（?）めざしてとびこんで行き、それきり、寿美さんともども中国残留組の一人となつていま北京に住んでいる。考えてみると、檀君と中国との縁はなかなか深く、もう一人の令妹久美さんも、満日文化協会の中にあつた「満州民俗学会」勤務の内田辰次君と結ばれた。同君は後に奉天博物館勤務となつて奉天へ移つたがそこで病を得て早逝し、久美さんは若い寡婦となつた。そのまま終戦を迎えると、姉の寿美さん夫妻とともに居残り、やはり今は北京住いの身となつている。この内田辰次は物こそ書かないが、文芸美術の観賞には秀れた眼をもち、言うことに筋が通つて、たじろがぬ背骨を備えていた点、忘れ難い。檀君とは福岡高校以来の旧友だそうである。

その内田、檀の両人が、新京、寛城子の中間にある生必社宅に移り、さらに寛城子へ移つたのは、越えて昭和十六年になつてのことと記憶する。最初に住んだのは、一匡街の緑川君の部屋だつた。内田が久美さんと一緒になる前のことで、三人の独身者の同居生活は、割に風波もなく、のんびりつづけられて行くようだつた。精励恪勤の緑川君が病気で寝込み、お通夜めいてひつそりかんとした同家を訪れたのも、この頃のことである。

四十一章

満日文化協会の創設時代——その創立会議——その事業——満州国国展——栄厚のこと

世には常に居候の絶えない家があるものだが、満日文化協会というのが、ややそれに以て、二部屋か三部屋の中に、いつも何やらの会、何やらの研究所といつたものが同居し、あたかもそれらを打つて一丸としたものが、当文化協会であるかのような錯覚さえおこさせた。

今まで、たびたび協会の名は出ても、詳しく紹介することが出来なかつたから、前章に民俗学会の名が出たのを機会に、文化協会の組織、それに附随する団体の性格などを書いておくことに

する。満州芸文というものと、文化協会の存在とは、やや縁が遠いようでいて、案外密接なつながりをもつていた所以を、明らかにしておきたいからである。幸いなことに、いま上野博物館にあつて、諸方の美術展覧会の尻押し役として美術家や好事家の間を駈けまわつている杉村勇造氏が、康徳十一年（昭和十九年）十一月発行「満日文化協会紀要」という冊子の借覧を許してくれたから、それを参考に、以下略して文協の輪廓を描いて行くことにしたい。

ところが、調べてみたところ、これがまたすこぶる大がかりなものだつた。あまり大がかりで、顔負けするほどだが、なるほどこれでなくては、年じう居候を養つておくわけにもいかなかつたであろうと、やつとのこと察しがつくといつたものだ。

第一に、文協の設立にあたつては、日満両国政府当局が当つている。ひいて外務省文化事業部、関東軍当局その他といつた大所が、いずれも会の設立に力こぶを入れている。

成立の源を探つて行くと、なかなか複雑なことになるのでいつさい略し、大同二年（昭和八年）新京で行われた創立会議の模様に移ると、同年十二月、日本から迎えた発起人は次の通り。

文学博士服部宇之吉、同池内宏、工学博士関野貞、帝室博物館鑑査官溝口禎次郎（以上東京）文学博士内藤虎次郎、同浜田耕作、同羽田亨（以上京都）他に外務省文化事業部より水野梅暁の計八名。

これに対する満州側発起人は次の通り。

総理鄭孝胥、府中令宝熙、監察院長羅振玉、参議袁金鎧、民政部総長臧式毅、財政部総長熙洽、文教部次長許汝棻、中央銀行総裁栄厚以上八名。

会議は十月十七日から三日間にわたり、文教部講堂で行われたが、列席者には、次のような顔ぶれがそろつた。

小磯関東軍参謀長、岡村参謀副長、原田第三課長、谷駐満大使館参事官、柳沢外務省文化第二課長、鄭総理兼文教部総長、羅監察院長、臧民政部総長、熙財政部総長、宝府中令、筑紫、田辺、袁、増の各参議、遠藤総務庁長、栄中銀総裁、許文教部次長、西山同総務司長、金国立図書館副館長、王宮内府技正、闕四洮鉄路局長他に日本側発起人その他。

会議の結果、総裁として溥儀執政をおし、会長は鄭総理、経費は両国政府折半支出、会名は満州では満日文化協会、日本では日満文化協会と呼ぶなどのことが決定、左の事業を行うことになつた。

国立奉天博物館の設立、大清朝実録の刊行、熱河離宮及八大寺の保存。

こうして発足した文協は、初め文教部の中に事務所をおいたが、第二期事業を行うに当つて大同大街の大興ビル内に移つた。そこで歴年の仕事の主なものを見て行けば、通化省輯安県高勾麗

遺蹟の調査。これには池内、浜田両博士が主班となり、研究報告として池内博士の「通溝」上下二冊の大刊行物を世に問うた。

興安西省巴林左翼旗の林東及びワーリマンハに於ける契丹遺蹟の調査。これは羽田博士指導。研究報告として同博士及び田村京大助教授らの「ワーリマンハ研究報告書」を刊行。

他に東京、京都の諸学徒の編んだ「満蒙史論叢」（年刊）「金代女真の研究」等がある。

つづいて第二期事業に移るや、ひろく美術、文芸の分野に手をのばし、昭和十二年皇帝の訪日を記念して訪日宣詔紀念美術展覧会を開催したが、これは次年から継続して行われることとなり、文教部主催の下に、満州国美術展覧会なるものが、終戦の昭和二十年まで開催された。

略して国展といわれるのがそれで、これには日満の各美術家が出品し、その都度日本から梅原竜三郎、安井曾太郎、小林古径、山口蓬春、福田平八郎、石井柏亭、須田国太郎その他が、審査員として来満した。

鄭総理の死去とともに、会長の椅子は栄厚のもとに移つた。栄厚氏は、満州旗人出身の一人で、張作相の時代北京から吉林へ移つて財政庁長を勤め、満州事変後招かれて中銀総裁になつたと聞く。のち参議府参議ともなつたが、いつさい政治的野心のない、誠実な人物を買われており、文協会長として最適任であつた。氏の公館は、新京城後路にあつたが、白山公園の傍に新し

く私邸を建築するにあたり、設計を委されたのは日本から来た浜田某氏だつた。いろいろ考えたすえ、中国風なプランを提出したが、栄さんのお気に召さない。

けつきよく、フランス風な瀟洒な設計が気に入り、その設計にしたがつて新築された。そんなハイカラなところのあるお爺さんで、しかもなかなか料理通でもあり、その私邸に雇われている料理人は新京随一の評判があつたほか、昭和九年ライトの高弟遠藤新氏によつて建てられた中銀クラブが提供する料理も、当時中銀総裁だつた栄さんのお声がかりで、四川風の淡白味をもつて新京人種に賞玩された。

遠藤氏は他に、中銀初期の社宅も設計しているが、さりげない作りながら、めだたぬ所に細かい注意が払われ、住居として申し分ない快適さを具備するものだつたといわれる。氏は曾て東京の帝国ホテルの設計に協力したほか、北多摩にある自由学園の設計をも請負つたが、東京へ引揚後病没したのは惜しまれる。

昭和九年、中銀クラブが落成したとき、栄さんはよほど嬉しかつたとみえ、千人からの客を呼んで大宴会を催した。その席上、この千人からの客の乾盃に、いちいち応酬した酒豪ぶりは、列席の虎大臣を、ことごとく一驚させたと、やはり往年の虎大臣の一人が語るのを聞いた。

そんな一面のある栄厚氏は、また文芸美術に一隻眼をもち、自ら主催者となつて、昭和十二年

九月から十二月にわたり、美術、文学、演劇、音楽、民衆娯楽の振興策につき、各専門家との懇談会を催したりしている。

このようにして、文化協会が芸文界の一応の音頭取りになつたのは、また自然の趨勢であつたのだ。

康徳七年（昭和十五年）は、日本紀元二千六百年祝典の行われた年である。満州でもこれに呼応して種々の事業が行われたが、文協は帝室博物館の協力を得て飛鳥奈良文化展覧会を開いた。同時に日、満、鮮、露文による日本史数万冊を刊行、各民族に頒布した。

康徳九年（昭和十七年）は、満州建国十周年祝典の行われた年で、このときのことは、いずれ後章に述べるつもりであるが、文協は日本の芸術院会員に呼びかけ、全会員の献納画を得て東京及び新京の二個所で展観し、作品はのち総理府内に収納した。（この莫大な遺産はソ軍撤退と同時に露都に持去られた）

なおこの年には、東京で満州国宝展なるものも開催されている。

前に居候が絶えないとムダロを叩いたのは、かく発展し行く文協が、事業の一部として諸団体の設立及び事業援助を大きく歌つたため「満州古蹟古物名勝天然紀念物保存協会」なる長い名の会を始めとし「満州国語研究会」「満州民俗学会」「満州心理学会」「満州文話会」その他が、

いずれも協会内に事務所をおくようになつた事実を指し、そのためいつ行つても関係学者、文筆人などが、杉村理事を囲んで歓談する風景が見られた。

その中には往年の梅原竜三郎氏や、亡くなつた安井画伯の顔もあつた筈で、後年における杉村氏が美術界に特異な足迹を印すにいたつた基も、じつにこのときに胚胎するものであつた。

四十二章

満日文化協会刊行図書——藤山一雄——ふたたび三枝朝四郎——文化協会役員

満州民族学会は神尾弐春氏が主宰し、いま柳田国男氏の民俗研究所にいる大間知篤三氏あたりが、献身的に会の事務連絡に当つていた。前に書いた内田辰次君は、文協嘱託として、かたわら学会の仕事を手伝うといつた関係だつたらしい。

だいたい文協の事業を見ても分るとおり、民俗研究的な部門が多く、事務員として働いている満系の諸君にも、その方面に明るい人が少くなかつたようである。

刊行物の名を拾つても、建国十周年を記念して明代満蒙史料（洋装三十冊）文学博士黒田源次

氏らによる遼代陶磁史など大部な著述のほか、左記のような出版物がある。

満州文化を語る（水野梅暁）纂組英華（原色版本文二冊解説日、満、英文三冊）御製避暑山荘詩、大清歴朝実録、安東省高勾麗遺蹟（池内宏）明李遼事叢刊（羅振玉）満蒙史論叢（四篇）或る北満の農家（藤山一雄）ロマノフカ村（同）他。

また別に東方国民文庫なる四六版の文庫本を続々刊行した。

新満州風土記（藤山一雄）発明と自由恋愛（武藤富男）満州の森林と文化（藤山一雄）曼珠雅頌（文協編）元曲菁華（同）清文雅正（羅振玉撰）農民の世界（藤山一雄）満州民族誌（秋葉隆）旧月蔣詞選（陳曾寿）杜詩授読（羅振玉撰）蒙古民間故事（山本守）新しくシベリヤを見る（藤山一雄）満州地質学物語（段宝熙）福昭創業記（儒丐）心（漱石・古丁）王属官（牛島春子・劉貴徳）渤海国小史（鳥山貴一）無花的薔薇（小松）教壇上下（寺田喜治郎）日本口語法（佐藤喜代治）図書の選択と整理法（弥吉光長）平沙（古丁）新博物館態勢（藤山一雄）光輝日本（小野寿人）日本史概観（陳松齢）沃土（石軍）孔子世家（陳邦直）人類的故事（爵青）四書（杉村勇造）羅振玉伝（陳邦直）リビヤ殖民（郭鳳洙）鄭孝胥伝（葉参）国民歌曲集、満州帝国接壌地図その他。

以上の目録は昭和十九年以前のもので、その後も続々刊行されており、記憶に残るものに蒙古

千一夜物語などの著もあつた。これらはだいたい日満両国語でそれぞれ別に印刷発行され、ひろく国民一般に愛読されたところに大きな特色があつた。著者のうち、古丁、爵青等は前述したが、陳松齢、陳邦直の二人は小松（趙孟原）と並んで文協の嘱託を勤め、松齢君は背高童子、邦直君は色白の背の低い青年として記憶に残る。二人とも無口な学者肌の人たちだつた。

日系では藤山一雄氏が大童になつて本を出しているが、氏は建国当初賞勲局だかの長をつとめ、国立博物館副館長として、その建設に大きな夢を託しながら、かく多方面の著述に精励したのであつた。市の郊外に、ゴルジ族その他各民族の生態そのものを示す野外展示場を作るという大がかりな計画をも哺（はく）んでいたようで、実現すれば、いま狭山湖畔にあるユネスコ村以上の一村落が見られる筈であつた。また氏は絵も達者なら、義太夫も唸るといつた多芸家だつた。

ときどき義太夫語りらしい偉大な体軀を文協の応接室へあらわし、杉村理事とにこにこ対談する姿を見かけたが、いま郷里山口に引籠つたきり、ついぞご両所の対談ぶりを目睹できないのは心残りなことである。先日、ラジオ東京の元編成局長だつた金沢覚太郎氏と面談のさい、氏は事務室にあらわれた一青年をさして

「藤山さんの息子さんですよ」

と教えてくれたが、老藤山にくらべるとまるでスマートで、東京の空気がイタについており、

ロマノフカや三河部落の匂いのしみのついた藤山宗匠のおもかげはかいもく見られなかつた。

このほか文協は古蹟調査に非常な熱意を傾け、熱河、輯安、蒙古遼陵、撫順、義県等は数回、ほかに農安、東京城、吉林近郊、撫順陶器遺蹟、薩爾滸碑亭、永陵、赤峰、遼陽等にも調査の足をのばし、そのたび前にも触れた写真の三枝朝四郎氏が出張して少からぬ写真を土産に持ち帰つている。

蒙古民族調査、旗人民俗調査、北満の漢人及び露人民俗調査、全満民衆娯楽調査、ゴルジ民俗調査、民謡の調査などもおこなつており、その結果が驢皮影児の上演となり、また蒙古廟会紹介展覧会となり、オロチョン民俗展覧会その他の催事となつて具体化している。

文協の項を終るに際し、康徳十一年（昭和十九年）十一月現在と記載のある役員名簿を写しておこう。当時のお偉方が、とにかく文化事業に名を列ねている事実を見ることが出来るからである。

○名誉会長（国務総理大臣）張景恵○会長（満州軍人後援会総裁）栄厚○副会長（貴族院議員子爵）岡部長景○同（外交部大臣）李紹庚○顧問（陸軍大将）本庄繁○同（同）菱刈隆○同（陸軍中将）吉岡安直○同（前駐泰国大使）坪上貞二○理事長（文学博士）池内宏○常任理事（祭祀府総裁）沈瑞麟○同、水野梅暁○理事（駐日満州国大使）王允卿○同（前駐日満州国大使）丁士源○同（新京市長）張聯文○同（京都帝大総長文学博士）羽田亨○同（東京帝大教授文学博士）原田淑人○同（京大名誉教授文学博士）狩野直喜○

同（国立中央博物館副館長）藤山一雄○同（満州民俗学会長）神尾弐春○同（奉天医大予科主事文学博士）黒田源次○同、杉村勇造○監事、田村真吾○同（文教部教化司長）耿熙旭○評議員（参議府議長）臧式毅○同（宮内府大臣）熙洽○同（尚書府大臣）吉興○同（前尚書府大臣）袁金鎧○同（前参議）胡嗣瑗○同（前参議）孫其昌○同（参議）張煥相○同（参議）蔡運升○同（駐中華民国大使）呂栄寰○同（軍事部大臣）邢士廉○同（経済部大臣）阮振鐸○同（経済部大臣）谷次亨○同（文教部大臣）盧元善○同（司法部大臣）閻伝紱○同（総務庁次長）徐家桓○同（四平省長）曲秉善○同（前竜江省長）趙鵬第○同（建国大学教授）馬冠標○同、趙汝楳○同、王光烈○同（宮内府顧問官）陳曾寿○同（総務庁統計処長）王秉鐸○同（協和会文化部長）何春魁○同（康徳新聞社理事）穆篤里○同（康徳新聞編輯長）千蓮容○同（参議府副議長）橋本虎之助○同（民生部長）関屋悌蔵○同（文教部次長）田中義男○同（奉天省次長）皆川豊治○同（浜江省次長）田村敏雄○同（総務庁次長）古海忠之○同（建国大学教授文学博士）千葉胤成○同（国立中央図書館籌備処長法学博士）滝川政次郎○同（関東局総長）三浦直彦○同（満鉄副総裁）山崎元幹○同（東大名誉教授文学博士）市村瓚次郎○同（東大名誉教授工学博士）伊東忠太○同（東大名誉教授文学博士）滝精一○同（東大教授文学博士）和田清○同（東大教授文学博士）今村登志喜○同（帝室博物館鑑査官）溝口禎次郎○同（京大名誉教授文学博士）矢野仁一○同（京大名誉教授文学博士）新村出○同（京大名誉教授文学博士）松本文三郎○同（京大名誉教授文学博士）小島祐馬○同（京大教授文学博士）那波利貞○同（京大教授工学博士）村田治郎○同（京大教授文学博士）宮崎市定○同（日本銀行副総裁）荒川昌二○同（大東亜省満州事務局長）山越道三○同（文部次官）藤野恵○同（文部省教学局長）近藤寿治○同（蒙疆政府総務庁長）神吉正一○同（帝室技芸員）小林古径○同（同）前田青邨○同（同）松林桂月○同（同）小室翠雲○同（同）西山翠嶂○同（同）梅原竜三郎○同（同）安井曾太郎○同（独立美術協会々員）須田国太郎○同、後藤真太郎○同、北浦大介

以上のように多彩な顔ぶれである。彼らの中には、終戦後シベリヤへ連行されたものもあり、戦犯に問われた人、早く病没した人も少くない。おそらく昭和十七年の建国十周年祝典あたりを絶頂として、これらの人々の華々しい活躍が見られたものと思うが、今や当時の肩書と名前の結びつきを見て、僅かに往年のおもかげをしのぶばかりである。後にかかげる文話会役員と見較べれば、当時の新京の、いわゆる有名人なり、文化人なりの一班が知れようと思う。

四十三章

ハルピン交響楽団——新京楽団——朝比奈隆と八木一平——紹かれた楽人たち

バイコフの名がひろく知られるようになつたのは、前記のとおり昭和十五年春のことであるが、ちようど同じころ、前年日本内地を訪れたハルピン交響楽団が新京に招かれ、新京楽団と合同演奏会開催のはこびとなつた。

会場は大同広場に近い協和会館で、哈響お得意のチャイコフスキー「スラヴ行進曲」や「悲愴」など、今も耳にのこる熱の入れかただつた。

このハルピン交響楽団の前身は、たしか東清鉄道（後の北鉄）で経営していた東清クラブ所属の楽団で、管弦楽団と吹奏楽団をもち、夏はクラブの大音楽堂で、交替に野外演奏をする例だつた。だいぶ大昔の話になるが、筆者は大連一中在学当時、夏休を利用してハルピンを訪れ（大正十年）従兄の案内でクラブの音楽を聴いた経験がある。日本ではまだ正式の交響楽団など出来ない前のことだつたろう。

クラブの庭園をそぞろ歩きする在哈外人のシルエットとともに、ブンブン唸るような大音楽の音色は、いたく少年遊子の心をゆさぶるものがあつた。

その後星移り人変つても、楽団はどうやら命脈を保ち、満州事変後は満州電信電話会社(電々)が大きなバックとなつて、理事長小野崎某の下に、健全な発達をとげた。電々は内部に放送局があつた関係から、哈響のみならず、後には新京楽団の有力パトロンともなつたが、新響のことは後で書く。

旧哈響時代、ヴァイオリンにシフエルブラットその他の名手を輩出したことは、一般にも知られていよう。新哈響となつて、東京、新京への訪問演奏時代には、第一ヴァイオリンにトラフテンベルクがあり、指揮者にセルゲイ・シュワイコフスキーがあつた。

楽団は他にルシアン・パレー、オペレッタの両部門にも活躍し、相当大きな足跡を残した筈だ

が、参考文献もなく、多少でも筆に出来ないのは遺憾である。

さて、十五年春の合同演奏であるが、このとき、新京側は前身新京音楽院長時代からの大塚淳氏がタクトをとり、ハルピン側はシュワイコフスキーがタクトをふるというように、両者競演の形だつた。

大塚氏の横顔は、前にもちよつと触れたとおり、背は低目だが立派な体軀で、鼻下に髭を畜えたところは陸海軍楽隊出身者かと思われる風貌だが、実は上野の音楽学校出身だそうである。終戦一二年前まで副指揮の坂西輝信氏（この人は海軍々楽隊出身）とともにタクトをとりつづけ、二十年の終戦後、腎臓癌で新京で亡くなつた。

この楽団には、自らもヴァイオリンパートを受持ちながら、人事、渉外その他にあたつた八木一平という名物男がいる。十四年、楽団に迎えられ、その後満映の録音、放送、レコード吹込みなど、楽団が多角的な活動を始めるに際し、よく渉外の責を果した。

新京音楽院が、その中に正式に交響楽団を結成したのは、哈響と合同演奏をした次の年、昭和十六年のことである。

このときは弘報処、電々、満映、ヴィクターその他のレコード会社が大きく集まつて相談をまとめ、政府後援による新京音楽団を成立させたのであつた。

前に満日文化協会のことを書いたとき、世帯が大がかりであると、余計な評言を挿んだが、新京楽団といえども、その結成に当つてや、肩書つきの船頭は山ほどならんだ。理事長はすでに満映理事長におさまつていた甘粕正彦が兼任となつたが、この人のお声がかりで、政府要人から各特殊会社の理事長級まで、顧問格、賛助格はまことにキラ星のようであつたと、八木氏が述懐している。

されば楽団は管弦楽団、吹奏楽団を組織するは勿論のこと、合唱団から音楽養成所まで設け、総員二百名を突破する充実ぶりだつた。養成所というのは、満系音楽人の養成に当つたもので、出身者のうち何人かは、いま中国にあつて活躍中の筈である。

人数が多いばかりが自慢にもなるまいが、十六、十七、十八年と年を加えるにつれ、楽団は月一回の定期演奏のほか、臨時演奏二回、夏は大同公園の野外演奏を週に一回、他に職場演奏、映画の録音、放送、レコーディングと、算え来れば一個月百回の演奏記録を持つたといわれるほどだから、目がまわるとはこのことかと推察される。

日本から著名作曲家や演奏家を招くことも、年とともに忙しかつた。招かれた作曲家に清瀬保二、大木正夫、伊福部昭、渡辺浦人その他諸氏があり、演奏家に辻久子、巌本真理、井上園子、伊達三郎、藤原義江その他の諸氏があつた。追い追い外国行きも難しくなり、在東京の音楽家

は、次は誰の番かと、満州演奏を心待ちしたというのも、事変下としては尤もなことであつた。あいにく終戦にぶつかり、這う這うの態で引揚げた来演家も二三にとどまらず、その中にセロの高勇吉氏があつて、終戦後お互いに不自由な生活をしていたとき出会つたことがある。ただし「どうですか」「いや。タバコを一本」ぐらいなところだ。この名演奏家も、新京音楽団に招かれて来演したものと思うが、聞きそびれたのでハッキリしない。東京引揚後、ただ一回演奏会をひらいただけで、亡くなつたと聞くのは惜しいことである。

指揮者のゲストに、山田和男、上田仁、朝比奈隆の諸氏があつたが、朝比奈は一度内地へ引返すと、十九年家族づれで再遊し、今度は正式に新響指揮者としてタクトを揮うことになつた。氏は最近、ベルリン・フィルハーモニーの客員指揮者に招かれ、序でにウィーン・トーンキュンストラーなども指揮するために渡欧したことから、新聞に大きくとり上げられたので、知る人は多いだろう。もともと京大の政治、哲学科出身であるが、音楽が好きで、指揮をクロイツアーやローゼンストックに学んだという変り種である。

十九年渡満後は、来年が終戦とも知らず、新京はもとより奉天、大連、旅順と演奏旅行をつづけ、とどハルピン演奏中、終戦を迎えたという。

ここで終戦後の楽団の模様に移るが、十九年から理事長は甘粕から興銀総裁岡田某氏に移つて

おり、時あたかも終戦のごたくさに際し、甘粕は楽団員約半年分の生活費として、三十万円を才覚した。これがそのまま団員の手に渡つていれば、どうやら暮しもたてられたろうに、そこは銀行総裁の岡田氏が、お手のものの銀行金庫に収めたのが大祟りとなり、ソ軍進駐と同時に封鎖の憂目にあつて動きがつかなくなつた。何とか賢しうして、あべこべに奇禍を招いた形だつた。が、とにかく楽団員は徴兵の方も、大目に見てもらい、二十年まで無事演奏がつづけられたなどというのは、日本ではとても見られぬ、もつけの幸運だつた。その後はグループ別に、キャバレーで稼いだり、ソ軍慰問などで辛くも命脈をつないだが、日本帰還と同時に、最後まで舞台演奏で磨いた腕は忽ち大きく物を云い、乱立する放送会社、諸楽団などに、羽が生えて売れて行つた。指揮者朝比奈氏が、関西楽団の雄としておさまるばかりか、本場演奏に招かれて渡欧したなどは、まさにベートウヴェン、第五交響曲の「運命はかく扉を叩く」の主題を、そのまま地でいつた感がある。

四十四章

十五年度作品評——「緑の歌」その他——民生部文化科設置——文話会総会と会活動

話が本来の文学、文学的テタテトからだいぶ逸れた。十五年の満州文学の締めくくりをつける意味から、同年夏に書いた「時評」の抜萃をつけ加えることとする。

「そういう考え（註・大陸的とか、満州的とかいうことばかり主張する一派の作品をさしている）から遠いものに昨年中に（註・十四年）晶埜ふみの「緑の歌」があり、筒井俊一の「姉妹の宿」があつた。これらはいずれも民生部大臣賞候補にもならず、文話会賞も受けなかつた作品ばかりである。今年に入つて更に僕らは満系作家爵青の「廃墟之書」長谷川四郎の「遠近法」高木恭造の「風塵」等の佳作を得た。大方の役に立たぬ小説の見本がここにある。その代り小説の魅力というものは、それぞれの形で、これらの作品に凝縮されているのである。「廃墟之書」については、檀一雄が無類の讃辞を呈し「満洲行政」に四月以来時評の筆をとる木崎竜が懇切な理解をしめした。爵青は本年初頭の「文話会通信」紙上「新春漫談会」で次のような言葉を述べている。『僕は文章を軽蔑してかかつている。最近は小説なんか読みたくない。随筆などを読んでいる。僕のものを書く力点は、たとえそれがでたらめであつても、魅力をもたせて人を引きずることにおいてあるから、こういう風にあまり技巧の点に力を致しているから、往々にしてストリーなんかを忽せにすることがある』うんぬん。テクニシヤン爵青の面目を知るべきであろう。彼は六月発行の「芸文志」第三集に二百枚の「麦」を発表した。長谷川四郎のロマンの特色は「遠近法」

より、むしろ曾ての「老家行」あたりに色濃く滲んでいると僕は思つているのだが、意想奔出の截断を試みたこの一作にも、爵青に似てまた一特色をもつ彼の逞ましさ美しさは出ているようである。あまり評判にもならずに終つたようだが、忙しい人には読み辛い作品であろう。高木恭造の「風塵」はすでに定評があり、僕も何かで触れたような気がするが、本年初頭の佳作と称していいものである。（略）竹内正一の「寗安覚え書」は、力作でもあり、がつちり構えた腰の坐りに在来の彼の作風とは違つたものが感じられ、これも各所に批評の渦を巻いた。この作品の構成上の不備をいう批評は、誰もが口にしていたようであるが、それにもかかわらず佳作である——という言い方が行われた。或いは作品のよさを言う前に、作者の態度と眼に眩惑され、混乱したのではないかと思われる節もあるが、これらの点は、更に徹底して考えられていいことであろう。こうして算えてくると、一月以来総数約五十篇の短、中篇のうち、見逃しているものも多い筈であり、後半期に期待するところ多いのである。（略）このほか、単行本として発刊されたものに工清定の「黄竜旗異聞」雑誌「作文」の同人作品集「廟会（みやおもて）」があり、満文で小松の長篇小説「無花的薔薇」古丁の訳した「心」（湫石）等が、何らかの意味で話題を提供した。小説ではないが「満州浪曼」の特集「満州文学研究」は、一応満州文学理論に整理を与えた意味で、回顧されていいであろう。（略）また民生部には文化課が設けられて、政府の文化政策の一端が実現さ

れる運びとなり、来往作家の中に日本の富沢有為男、中河与一、村山知義諸氏の顔が見え、満州から日本へは古丁、疑遅、外文、木崎竜、山田清三郎、望月百合子などの諸君が行つて交驩の実をあげた。五月十四日、白露作家バイコフを迎えたことも、楽しい追憶の一つである。彼の作品が長谷川濬によつて訳されていることは（註「偉大なる王」）すでに読者の知るところで、また僕らの深く関心を寄せるところである」

この文章は康徳七年（昭和十五年）夏ごろ書き「前半期の作品」と題し、土地の新聞に発表したものである。

序でに後半期の作品評があるといいのだが、それがない。代りに大内氏の著書から、当時の文話会についての記事を抜き書きして、本年度記述を終ることとする。

「本年の文話会総会は六月三十日、民生部講堂で開催、代表代議委員会に杉村勇造、金沢覚太郎、山崎末治郎、木崎竜、大内隆雄、吉野治夫、今井一郎、北村謙次郎、小松、坂井艶司、今村栄治（以上新京）橋本八五郎、城小碓、西村真一郎、古川哲次郎、島崎曙海、糸山貞家（以上大連）富田寿、今西忠一、青木実、小杉茂樹、飯河知記（以上奉天）竹内正一（哈爾賓）上野凌嵘（チチハル）が出席、傍聴者に民政部深井文化科長、同科清水鋏一両氏の外、関東軍長谷川少佐、鈴木嘱託、村山知義氏、国通吉良記者等があつた。本総会出席者は（略）」

「この頃、甲斐水棹の歌集「埴道以後」が出、島崎曙海は「宣撫班戦記」を出している。山田清三郎、緑川貢、筒井俊一等が新京住人になつていることも右の総会記事で知られる。古川賢一郎は満日出版部へ入つた」

「八月には朝鮮の作家李孝石氏が来、新京では座談会を開いた」

「九月発表された満州文話会の役員一覧を写しておこう。当時の文化的人材の配置が知り得られる」

こうして大内は、めんめん十三ページ余にわたる「人材」の姓名を掲げている。これを全部写す根気はないし、その要もないと思うので、次章に主なものだけ拾つておく。

四十五章

文話会の役員と顧問——三浦直彦——三井実雄——瀬沼三郎

○会長（栄厚）○理事会（理事）文芸部長岡田益吉、美術部長浅枝青甸、演劇部長馬冠標、音楽部長大塚淳、映画部長根岸寛一、大連支部長紫藤貞一郎、奉天支部長衛藤利夫、新京支部長杉村勇造、哈爾賓支部

長半田敏治、チチハル支部長近藤喜助、北京支部長石原巌徹、東京支部長未定　○事務局、事務局長吉野治夫、文芸部委員（大内隆雄、山田清三郎、古丁、辛嘉、吉野治夫）美術部委員（杉村勇造、池辺青李、甲斐巳八郎、佐藤功）演劇部委員（板垣守正、藤川研一、磯部秀見、小虬）音楽部委員（北小路功光、美濃谷善三郎、小貫誉四郎、中山義夫）映画部委員（木崎竜、高原富士郎、小松）○新京支部幹事長今井一郎、大連支部幹事長古川哲次郎、奉天支部幹事長青木実、哈爾賓支部幹事長高崎草朗、チチハル支部幹事長上野凌峰、北京支部幹事長近東綺十郎（略）

次に各幹事の名がずらりとならび、それが終ると、次は諮問機関（会長顧問）として、肩書つきの「名士」がならぶ。

関東軍報道班長（長谷川宇一）大連市長（別宮秀夫）協和会本部輔道部長（恒吉秀雄）チチハル市副市長（檀毛信次）民生部教育司長（田村敏雄）奉天市副市長（多田晃）満鉄理事（中西敏憲）弘報処長（武藤富男）チチハル鉄道局長（大橋正巳）奉天省次長（松田令輔）浜江省次長（松田芳助）民生文化科長（深井俊彦）満州映画協会理事長（甘粕正彦）関東州庁長官（三浦直彦）満州演芸協会副社長（三浦義信）大連商工会議所会頭（首藤定）最高検察庁次長（平田勲）満鉄新京支社長（平島敏夫）満州弘報協会理事長（森田久）新京特別市副市長（関屋悌蔵）

理事会参与○満州弘報協会業務課長（田中総一郎）満州日日新聞社長（松本豊三）満州行政学会常務取締役（新井練三）民生部編審官（寺田喜治郎）満州電業理事（山崎元幹）新京日日新聞社長（城島舟礼）新京特別市公署教育科長（和泉徳市）満州新聞社長（和田日出吉）満州国通信社編輯局次長（瀬沼三郎）マンチュリヤ・デーリー・ニュース社長（小野敏夫）満州図書配給会社取締役（駒越五貞）満州事情案内所長（奥村義信）満州拓殖公社総務部長（村山藤四郎）新京音楽院副院長（坂西輝信）立法院秘書長（劉恩

格）民生部厚生司長（王秉鐸）新京満鉄、電業ブラスバンド楽長（加藤哲之助）協和会本部実践部長（曲秉善）協和会奉天省本部事務長（山口重次）満州医科大学教授（黒田源次）同（鈴木直吉）協和会大連事務局長（小山貞知）大連市会議員（恩田明）鉄道総局弘報課長（芝田研三）大連（木原鉄之助、田村詢一、平島信）チチハル新聞社長（片山誠三）チチハル放送局長（向利夫）協和会竜江省本部事務長（平山節）哈爾賓中央放送局長（三井実雄）大連音楽学校長（園山民平）大連音楽教授所（村岡楽童）満鉄嘱託（高津敏）哈爾賓日日新聞社長（寒河江堅吾）東満日日新聞社長（須佐美芳男）

文話会は、つまりこのような多くの人たの助言援助をバックとして、企画をたて、実行に移すことが出来たのであつた。また同時に、これらの人たちは肩書つきの名士とはいえ、それぞれ何らかの意味で、充分に文化人としての実力をもち、庇護者的な立場に立ち得る人々でもあつた。

たとえば三浦直彦氏のごとき、絵画の蒐集家として知られ、東京へんの画商でも、氏のところへ持参すれば買つて貰えないためしはないとまでいわれていたほどである。氏のコレクションときては、無名の新人級まで網羅し、それが後に有名になつて、類のない生彩を放つといつた例もあつた。いま東京へ持ち出しても、優に人目を奪うに足るものであるが、いずれも終戦後国民政府治下の中国へ移譲される運命となつた顛末は、後章にのべる筈である。

その他、三井実雄は歌人の名のほうが知られて、何となく煙たがられた甘粕にしても、文化行事には精いつぱいの助力を惜しまなかつた。大連商工会議所会頭首藤定も、絵画の蒐集家であ

り、奉天医大の黒田氏は、奉天博物館長をもつとめ、終戦後は奈良博物館長を勤めたその道の玄人である。いわゆる「趣味」も膏肓に入つた達人ぞろいの観もあつたのだ。

国通編集局次長瀬沼三郎氏について、大内は次のように追記している。

「召水瀬沼三郎氏など、まことに惜しい人物だつた。（註・すでに故人）遺稿句集は後に友人によつて刊行されている。（略）氏は「儒林外史」の飜訳を石本憲治氏に預け、私はそれを原文と照合したものだつた。後に満日に連載されたあの飜訳である。また新京へ来てからはよくその気焔を聞かされた。われわれはそれをおでん屋談義などと名づけて尊敬したものだつた。談論風発、あの禿げた頭から湯気をたてて、熱弁主張した」

いわばこの型の人物が、必しも肩書きにこだわらず、また専門家意識もなく、満州文化という大問題と取組んでいたところに、たとえ精練には遠くとも、かえつてひたむきで素朴な文化形成の星雲状態が醸しだされる所以があつたとも見られるのである。

四十六章

黄土坡美術協会——三人会——ふたたび城島舟礼と同英一——甘粕正彦の横顔

康徳五年（昭和十三年）から、例年国展のひらかれていたことは、前にのべた。これは東京の国展（国画会展）と紛らわしいが、もちろん別物で、満州国美術展覧会の略称である。

こういう大きな展覧会のほか、新京その他にいくつも小さな美術団体や、美術展のあつたことは当然で、古くから大連に五果会、パンプタオ美術グループなどあり、新京に三人会から発展した黄土坡美術協会があつた。

五果会は昭和七、八年ごろ、境野一之、市村力など、独立系の画家によつて創設されたと聞く。パンプタオは中国の起き上り小法師の謂で、夜店などへ行くと、原色塗りの泥人形を、よく見かけたものである。この会はたしか甲斐己八郎氏が経営し、赤羽末吉氏あたりも加わつていた。

お膝もとの新京には、昭和八九年のころここへ移つた近藤清治、赤羽末吉、山代象二郎諸氏によつて、三人会なる美術家グループが出来ていたが、のち国展出品の作品が仲介となり、城島英一、佐竹禹南その他の美術家に呼びかけ、改めて黄土坡美術協会の成立したのが、昭和十五年から十六年にかけてのことだつた。この名称は城島英一が名づけ親で、彼は前にも書いたように、作品ばかりでなく、批評眼が鋭く、人柄の幅も広かつたところから、何となく協会の総帥としておされるようになつていた。

彼が生存していれば、氏の話を聴くのが一番であるが、戦争末期、北満の某所で病没との公報が最近あつたそうで、聞くに由ない。代つて近藤清治君の話をもとに、この会のことを書いて行く。山代は黄土坡になつてから退いたが、白崎海紀、関合正明、佐竹禹南、境野一之、郡菊夫、高田義雄、浜野長正の洋画陣に、前記の赤羽、近藤、客員として甲斐巳八郎などの日本画陣が加わり、彫刻の長浜虎雄も入つて、賑かな美術グループとなつた。

だいたい春秋二回、展覧会を催す方針のようだつたが、その通り実現されたかどうか、いま記録がなく、ハッキリしない。会場にはたいてい大同大街に面した三中井百貨店の展覧会場があてられ、同人が二三点づつもちよつて、気持ちのいい展観をひらく例だつた。このグループは、国展内でも隠然たる勢力を成していたが、実力から見ても、彫刻の長浜のごとき、日本の美術院会友でもあり、新海竹蔵氏らに比肩し得る優れた作家といわれる。日本画の甲斐は、黄土坡展に出品したかどうか、これもハッキリ思い出せないが、老練の筆致は、後に川端康成氏らにも認められ、創元社が「各民族創作選集」を発刊したときは、選ばれて装幀の任に当つた。（最近――三十五年春――東京で個展を開き、健在ぶりを示した）

高田義雄は大同公園内に出来た新京美術研究所の主事におさまり、研究所内に起臥していた。病身の、神経の鋭い能才だつたが、惜しいことに日本引揚後病歿した。

郡はもと建築が本業で、日本引揚後は東京で建築家として立つている。

総帥城島英一は、旧名斎藤であるが「月刊撫順」から「月刊満州」へ飛躍し、さらに新京日日新聞社長におさまつた城島舟礼の娘婿となつて城島姓を名乗るようになつたことは誰も知る所だが、この経緯につきちようど昭和十六年、毎日新聞新京支局長として赴任した緒方昇氏は、斎藤英一が大同学院在学中、城島の娘に見染められて入婿したといい、また彼斎藤が建国大学の塾頭をしていたころ岳父舟礼が強引に婿に迎えたという（近藤清治）との二説があり、いずれがいずれともハッキリしないが、どちらにしても斎藤にとつて不名誉な話でなく、両方とも斎藤株を高くするものと見てよさそうである。

岳父舟礼は、もと撫順炭砿に奉職し、同じ炭砿で働いていた中国人砿夫たる鄭舟礼とかの名を、そのまま頂戴したという愉快な人物。満鉄育ちだけに自由主義的風格がつよく、そのため後年まで、関東軍あたりの風当りがひどくて大苦労したというのは、これも軍方面にあまり嬉しがられなかつた、緒方昇の述懐である。

そこへ行くと、同じ自由主義でも杉村勇造先生にいたつては、その進退は文字どおり自由自在の自由主義で、甘粕はじめたいていの軍族を煙に巻いた。

というより、同じ軍族でも通称吉岡将軍こと吉岡安直中将などは、名詮自性の安直ぶりで、へ

いぜいから平服で古本やをひやかすといつた磊落人だつた。こうした友人のあつたことが、杉村氏に幸運したという見方もある。が、何といつても、氏の人柄が先ずどこにも敵を作らなかつたのだろう。

皇帝が再度日本を訪れたさい、新京の建設状態を絵にして持参する計画があり、一夕、美術家を招いて案を練つたことがあつた。宴半ばのころ、ひょつくり現れたのが甘粕正彦で、彼は座にある杉村を顧み

「たまにはのんびり絵の話でも聴きたくてねえ」

と、破顔してみせた。

怖いばかりが能じやなし——と、甘粕先生もだいぶ軟い方面に首をつつこみかけたところの話で、このへんにも杉村氏あたりの影響があつたかと思われる。

四十七章

檀・逸見の交友——川端康成と村松梢風——「満州国各民族創作選集」

満日に連載されていたバイコフの「偉大なる王」が終り、つづいて筆者の「春聯」が掲載されるようになつた。昭和十六年に誤りないが、何月から載せはじめたか、さつぱり思いだせない。この五月、家内が出産のため帰日するのを見送りがてら東上したので、執筆はその前の筈であり、正月から三月終りあたりへかけてのことではなかつたかと思う。

この正月には、例の逸見、檀のコンビが、協和服に飾りの金モールを下げて吾家を訪れてくれた。席にはすでに長谷川濬があつて

「ほう、どこで会つたの？」

と、しきりに目をパチクリさせたが、二人とも黙して語らず。そんなこと聞くのが野暮という顔だつた。

金モールを見て、女房がお世辞を云つた。

「お立派ですね」

これはけだし、実感だつたろう。日本でもすでに国民服が採用されていたと思うが、協和服のほうが、どこか重厚で、しかも平明の感を与えたし、金モールにいたつては、いかにも祝日にふさわしい華麗さで、軍参謀のとは違う伊達の味もあつた。

その協和服を、筆者はまだ一度も買つたことはなく、着たこともない。もちろん金モールを下

げるわけもない。二人の壮漢が、金色サンゼンとしてあらわれたところは、まさしく「お立派」だつたに違いなく、きつと女房は羨ましかつたのだろう。

正月は賑かにすぎ、二度めにご両所があらわれたのは、二月三月のころだつた。そのじぶんには、たしか「春聯」の執筆にかかつていたかと思われる。と同時に、檀一雄、内田辰次の両君が、新京から緑川貫君のロシヤ人アパートへ引越したのは、筆者が東京から戻つた前後らしいこと、つづいてこの二人が、もと吉野治夫君が住んで大いに悩まされたという。二丁ほど離れたロシヤ人の家に移つたことなど、つぎつぎに思い出されるのである。

してみると、東京からの珍客川端康成、村松梢風両氏が、満州各地をまわつたのは、まだ寒い三四月の候だつたのであろうか？

川端氏はたしか、この旅中に連載中の拙作を眼にしたと、後で語つて居られるからである。そして満日の筒井記者などの放送もあつて、氏は帰京後、拙作上梓につき、いつさいの面例をみて下さつたのだつた。

そればかりでなかつた。川端氏は北満からの帰途、もう一度新京へ立寄り、そこで創元社から話があつたらしい「満州国各民族創作選集」について、現地側との打合せを遂げて帰京した。

あれは四月の末ごろだつたか。北満の激しい凍てもゆるむころ、氏は筒井記者、山田清三郎な

ど同伴でわざわざ寛城子を訪れ、寛城子住いの連中の茅家を一廻り見学（？）してから、ロシヤ喫茶店ポポフに立ちより、ここで選集の下相談に移つた。

「題名はどうします？」

「作品の選者は？」

というように、小さな手帳をとりだし、いちいち質問しては刻明にノートして行く。ポポフの主人はもとコザック騎兵という長身の老人で、奥の一室には型通りニコライ皇帝の写真を飾り、礼拝を怠らぬ白軍将校の一典型だつた。この店は市中に菓子類が乏しくなつた頃も、とにかく薄甘い程度ながら紅茶やロシヤケーキを提供してくれ、ときどき筆者らも女房どもをつれて通つた店だ。

さて川端氏は三枝朝四郎が蒐集したという、中国ふうの切抜き図案を、何葉となく入手して居られ、のち鎌倉のお宅へお邪魔したとき、それを四六版の本に当てがい、あれでもなし、これでもなしと一人考えに耽る姿に接したこともある。自分の著書というでもない、縁もない「各民族」の本を出すのに、さまざまな意匠に眼を凝らす姿をみて、並々ならぬ感動を受取つた記憶が生々しい。

が、凝りに凝つたあげく、けつきよく在大連の甲斐氏の図案が、選集の装幀に使用されたこと

は、前に書いた通りである。この本も越えて十七年の春、晴れて第一集を世におくつた。

内容は次の通りである。

木崎竜「ある少年の記録」富田寿「幾山河」横田文子「美しき挽歌」長谷川濬「烏爾順河」山丁「狭街」疑遅「塞上行」吉野治夫「手記」石軍「黄昏の江潮」ユーリスキー「断街」野川隆「屯子へ行く人々」秋原勝二「膚」高木恭造「風塵」呉瑛「望郷」日向伸夫「窓口」晶莱ふみ「緑の歌」鈴木啓佐吉「土竜」牛島春子「雪空」ネスメエロフ「雪の上の血痕」三宅豊子「乱菊」筒井俊一「林檎園」

創元社は同じ小林茂社長のときで、作品は満州側委員が選んだものを、東京で川端氏と間宮茂輔、岸田国士三選者が眼を通し、採決した。

選集は十八年に第二集を出したが、十九年にいたるや、すでに出版上の制約は如何ともしがたく、遂に発刊見合せとなつて終つた。

四十八章

岸田国士の翼賛会入り——芸文指導要綱——文話会解散——文芸家協会設立

康徳八年（昭和十六年）三月、総務庁弘報処から芸文指導要綱なるものが発表された。

日本ではすでに前年、岸田国士氏が翼賛会文化部長に就任、文芸家の戦時態制が強力に進められようとした頃にあたり、満州も単なる文芸愛好家の揃いというのでなく、文学者の専門化と、その協力による一種の「翼賛」形態をとろうとしたがためであつた。（註・岸田氏は満州旅行の帰途就任交渉を受けたと、大内の「満州文学二十年」に見えている）

越えて七月二十七日、満州文芸家協会は正式に設立され、文話会は解散となつた。やはり大内の著に、次の一文がある。

「その経過は、協会で出した『栞』に次のようにある。『わが満州国の芸文政策は、本年三月政府発表、芸文指導要綱のごとく、その確立を見るに至つたが、その後この芸文指導要綱の理念に基き、芸文各界の有志の間に、各々その専門芸文団体結成の準備が政府と緊密な連絡の下に進められ、七月五日、先ず満州劇壇協会の誕生を見るに至つたが、わが満州文芸家協会も六月以来、山田清三郎、大内隆雄、宮川靖、古丁、筒井俊一、楳本捨三、逸見猶吉、山崎末治郎等の有志が、武藤弘報処長、中島同参事官、磯部同係員と数次会合、政府肝煎りの下に、団体の設立の準備にとりかかつたのであるが、七月二十七日国務院講堂に開かれた弘報処長招集による満州文芸家協会設立会議によつて、即日、本協会の創立を見るに至つたのである。設立会議は、弘報処長より招集を受けた全満各地（関東州を含む）の文芸家（作家、詩人、文芸評論家）総計七十八名

のうち、交通その他の関係で欠席を余儀なくされた若干の人たちを除く多数の出席者を得て、折柄の雨雨を仕奏に午後三時半開会、岸本参事官より設立会趣旨催までの経過報告があり、弘報処長の挨拶の後、弘報処長を議長に押して議事は進められ、準備委員の間に練られた満州文芸家協会設立要綱を検討、供直要綱をつくして満場一致これを会規として承認、室外の雨雨に和する風の如き拍手裡にわが満州文芸家協会が成立せられたのである」云々。

なお同じ著書の大内の日記なるものの三月の項に「文話会臨時総会」の文字が見え、また別のページに「三月十五日発行の『文話会通信』には次のような標語が掲げられている。一、如何なる組織の変遷あるとも、文話会精神だけは堅持しよう。二、各地の文化（話の誤りか）会を永久に栄えさせよう。三、文話会はあらゆる文化問題の精神的母胎である」云々の一文がある。

文芸または演劇などの部門にわたり、専門非専門を問わず、自由の空気を母胎として、あくまで下から盛り上る力を背景として育ってきた文話会に、漸く時勢の圧迫影響が加わりだした苦悩の相が、これらの標語から、暗黙裡に汲みとられる。すでに文話会は「組織」の変遷を予期していたようであるが、それは「変遷」といった生優しいものでなく、根本から文話会存立を否定し去る形勢のものであった。

文芸家協会の準備委員は、だいたい文話会役員だった人々ばかりである。が、彼らは比較的

「役所」に親しく近づきつつあった人たちであることが、よく分る。というより、いわゆる「専門」化問題につき、前々から、文話会当事者が、どこか相離れぬ同族の存在を主張し来った人たちであることが、よく分るのである。

されば三月某日、民生部講堂で開催された文話会臨時総会は、異色ある興奮と思われたものとなった。

民生部の役人のほか、武藤弘報処長も、招かれて出席していた。いわば文話会観衆として、処長の意のあるところを、納得いくところまで聞きただしたい――それが、この臨時総会の主要目標だったと思われる。

議長が誰だったか、思い出せない。奥のほうに、吉野事務局長が直白の顔を浮ばせ、すぐ降りに、武藤、山田酒三郎が肩を並べていた。

会員の質問があり、武藤処長がこれに答え、また別の会員が質問する。いつも質問の先頭に立つのは、文話会設立に力をいたした橋本八五郎氏だった。

「いったい、それで文話会は、何をしようというのですか」

芸文指導要綱なり、文芸家協会の目的はハッキリしている筈なのに、そのうえ何を巡むのかといわんばかりの、武藤処長の質問にたいし、橋本氏が立って答えた。

「つまり、政府がやろうとしていることは、旧来の文話会がなしつつあつたことで、これからも、その通り実行しようとしているわけです」

講堂内には会員があふれ、遅く行つた筆者は廊下トンビの聴き役で、橋本氏について誰が何を云つたか、ハッキリききとれない。

折から来かかつたのが、これも青白い木崎竜だつた。

「どうだね、面白いかね」

と筆者。

木崎は苦りきつていた。

「何が面白いものか」

そのまま、ぶらりぶらり、彼の姿は人混みに消える。

会場では、とつぜん山田清三郎が立つて咆えだした。

「今日は文話会が、これからどうするとか、こうするとかいうことを議論するためにわれわれは集まつたのではありません。（ゾ、とつけ加えたそうに）政府はすでに芸文指導要綱を発表して、文話会員の協力を求めているのでありますから、この要望に応え、一億総蹶起の態制をととのえるのが……」

といつた調子で、頬を紅潮させ、真正面を睨みすえたまま一気呵勢にまくしたてるのを、橋本八五郎以下、全会員唖として聴き入つた。

是も非もない。文話会を存立させようという、惜別の情は分るが、今にいたつて、何をか云わんや。文話会の功罪を述べたてるだけ、山田氏ほか、文芸家協会設立に奔走していた連中には、会員の固陋が腹立たしいばかりだつたであろう。

この発言で、方向は決定した。

吉野氏が立つて挨拶する。全会員の意を、諒とし、大いに満足しつつ、満州文話会は発展的解消をとげたいという、悲痛な「サヨナラ」である。

総会はかく異常な感銘を筆者に与えながら、全員政府への協力を誓つて、ぶじ散会となつたと思われるが、このころ、文話会とも、新登場の文芸家協会とも、あまり交渉のなかつた筆者は、匆々に退去したので、それからあとのことについて記す材料がない。ただ次の日になり、橋本氏は自身武藤処長を訪れ「シカと実行の肚であるが」とただした。武藤氏は胸を反らし「シカと左様のつもりである」と答えた——という話を後から聞いただけである。

この総会にひきつづいて文芸家協会の設立大会となるわけだが、この会の模様も筆者欠席のため、何も書くことがない、文学の専門化に、不賛成の筈はなく、非常時体制に疑問があるわけも

なかつたが、依然として寛城子にこもり、孤独の文筆を弄ぶ身には、政府お声がかりといつた大ゲサな身ぶりが、どうにも身に染まぬ感じだつたのだ。

五月、筆者は東京へ赴き、暑気きざす巷塵をさけて、箱根に遊んだりした。山の新緑は、眼を洗うようだつたのを思い出す。

四十九章

中谷孝雄来満——浅見淵の遠征——文芸家協会会員名——石河潔——「芸文」創刊

浪曼部屋の親方中谷孝雄氏が来満したのは、十六年冬だつたろうか、十七年早春だつたろうか？　中谷は中支作戦が始まると、真先きかけて大陸へ渡つた経験があり、たいていのことは馴れつこの筈だつたが、満州の寒さだけは予想以上だつたか、新京へ来ての第一声は

「寒いと馬も泣くかね」

という奇抜な感想であつた。町を歩いていて出合う馬車の馬という馬が、大きな目に、いつぱい涙をためていたというのだ。

それどころか、厳寒となれば、馬は吐く息から汗まですつかり氷りつき、口の下に長い氷柱をぶらさげ、全身白衣をまとつた姿と化すのであるが、氏の眼に映つたのが、満眼の涙だけだつたところをみると、時候は厳寒から、早春の日ざしに移ろうとする頃であつたかと察しられる。

筆者はこの言葉に刺戟され、馬匹協会（？）で出す馬の雑誌に「馬の目」という短文を書き、のち雑文集を編むときも、本の題を「馬の目」としたが、この本も終戦で出版不能となり、原稿は全部消え去つた。

中谷氏は四五日新京に滞在し、そのまま飄然と北満の旅に出たように思うが、記憶が確かでない。氏が満州で何を見たか、馬の涙以外にも、さぞ変つた話があろうと思うが、その後会つても、ついぞ満州の話は出ないようで、何か書いたものがあれば、いつか見せて貰いたいと願うばかりである。

浅見淵氏が来満したのも、恐らく中谷氏と前後してはいないかと思う。氏は寛城子の緑川君のアパートに泊り、悠然と腰をかまえた。

「浅見さんが来ている。いま『ほがらか』にいるから、やつてきませんか」

と誘いにきたのは緑川で、もとより喜んで同行した。

「ほがらか」は小さな酒場だ。板台を囲んで七八人も掛ければ満員札留めとなる。が、真昼間のことととて、筆者と三人きり、ゆつくり飲むこととなつた。

「やあ、はじめて」

「いや」

と、これが初対面で、名を名乗ると、緑川は

「へえ。初めてなんですか?」と、けげんそうに眼をみはつた。

東京では太宰治の「晩年」の会あたりで出会つていたに違いないのだが、挨拶なしで過していたのだ。

さんざん飲み、次の朝はわが家で朝食となつたが、どうしたわけか、氏のために迎え酒の用意もなかつたのは、われとわが身が疑わしくなる。そんな筈はなさそうなのに、あのときたしか朝酒を出しそびれた。家になくても、界隈で潤沢に売つていた頃なのに、要するに女房の気がきかなかつたか、遠慮しすぎたかげんだつたろう。

氏は味噌汁がうまいと、お代りをしていたが、どうして、そんなことですむ話でない。まことにもつて、不明のいたりである。

が、昼も「ほがらか」夜も「ほがらか」といつたありさまで、氏は悠然かまえたまま、ときに

は「八丁」へんへも遠征し、ゆつくり新京の酒に沈湎して帰つたようだつた。

長駆北京へ立ち寄つたのも、このときのことだつたろう。万寿山だかでで写した写真が、のち出版の随筆集「満州文化記」だつたかの巻頭にあるのを見た。(註・このとき氏は、坪田譲治氏と一緒に来たようだつた。坪田氏だけ市中の旅館住いだつたと思われる。なお、坪田氏はのちに――十八年か?――もう一度来満したと、さいきん竹内正一氏から聞いた。してみると同行したのはこの時のことか?)

筆者が家族だけ置いて東京から帰つたのは、六月末か七月初めのことである。狭い家も、家族がいなければ急に広い。のびのび暮しているうち、偶然、もつと奥にある三輔街の中村アパートというのへ引越すことになつた。アパートといつても、例によつて五六軒の棟割長屋が三棟ほど並ぶばかりの、お粗末きわまる代物である。一匡街の家が、前に藤研天妻が住んだ由緒つきなら今度は坂井艶司、横田文子が住んだという因縁づきの家だつた。

ここも近隣は何何部隊とかの軍属ばかりだつたが、左隣りに前から住んでいたのが、上原といふ新京駅詰めの平服憲兵で

「軍属ばかりじや叶わん。せめて一軒ぐらい別人種に住んで貰わないと」

と、家主の中村氏にいつぽん釘をさしておいたのを、ニッケの美術係奥山君が聞きこんで筆者

に知らせてくれ、急に引越しのはこびになつたものだつた。憲兵といつても、上原氏は穏かだつた。背広に小さな鳥打ちを冠り、毎日駅へ出かけて事務をとるもようだつた。別人種を望んだのは、つまり憲兵と軍属では、お互いに鼻がつかえすぎるからだつたろう。

移つて間もないころ、満日の筒井記者から電話がかかつた。

「いま、川端さんから電報がとどいた。読み上げるから、聞いてくれ」

と、読み上げたのが「シユンレン新潮社からしゆつときんまつた」という電文だつた。「シユツは出版、キンマツタは決つただろうね」と、筒井君は念を押してくれた。

さて大内君の日記（前引）から、もう少し記事を抜き、本章を終る。

「三月『岡田益吉君離京、文話会臨時総会』四月『哈日、報告文学発表』五月『僻土残歌出づ』六月『文話会役員会、瀬沼三郎氏死去、独ソ開戦』七月『文芸家協会準備会（七、一七）文芸家協会成る（七、二七）文芸家協会委員会（七、二九）』八月『文協委（二回）芸文連盟成る（二五）』十月『芸文書房開く』『芸文準備進む』十一月『「満州文学の二十年」着手』十二月『対米英開戦（八）「芸文」創刊号出づ』

引きつづき大内は、新しく成つた文芸家協会の役員、会員の名をあげている。序でにこれも写しておく。

「文芸家協会は山田清三郎を委員長とし、古丁、呉郎、爵青、大内、楳本捨三、宮川靖、逸見猶吉、筒井俊一、宮井一郎、穆儒丐、野川隆を委員とし（野川は後に退いた）会員は安達義信、夷夫、今村栄治、上野市三郎、植村敏夫、上脇進、牛島春子、袁犀、楳本捨三、大内隆雄、王則、王秋螢、岡本隆三、奥一、神戸悌、外文、北尾陽三、北村謙次郎、北小路功光、疑遅、季瘋、弓文才、共鳴、呉瑛、顧影、古丁、呉郎、爵青、坂井艶司、山丁、小松、晶埜ふみ、辛嘉、辛実、高森文夫、檀一雄、張我権、筒井俊一、杜白雨、仲賢礼、長谷川濬、逸見猶吉、松畑優人、丸山海介、緑川貢、三好弘光、宮川靖、望月百合子、山田清三郎、山崎末治郎、李文湘、劉漢、励行建、青木実、安犀、小杉茂樹、成弦、譚鉄鐸、佟子松、穆儒丐、富田寿、中山美之、日向伸夫、町原幸二、宮井一郎、三宅豊子、山田健二、楊野、李雅森、霊菲、加藤秀造、君頤、支離、平八郎、陳隄、竹内正一、莫迦、塙政盈、洙南、岩本修蔵、上野凌峪、金音、古屋重芳、秋原勝二、苦土、黄河、鈴木啓佐吉、石軍、高木恭造、工清定、棚木一良、陳燕、田兵、野川隆、李妹――を最初会員とし、関東州在住の麻生練太郎、井上麟二、加納三郎、島崎曙恨、城小碓、武田勝利、西村真一郎、古川賢一郎、古川哲次郎、木風、八木橋雄次郎、也麗、吉野治夫を会友とした。なおその後高橋勇、尾田幸夫、島田清、林田茂雄、小林実、大野沢緑郎、八木義徳、山口正幹、酒井美津子、横田文子、石河潔、菅忠行、楊葉、希文、星雁を会員に、川島豊敏、福家富士夫、田村昌由、白塩を会友に加えた」云々。

右のうち、石河潔は、大内の日記にある「芸文」創刊時代の初代編集長だつた。もと満州日日新聞出身で、熱河へんの支局長になつていたのが「芸文書房」の小原克己に見込まれて編集を引き受けたものといわれる。終戦後、引揚げが開始されても、彼は頑として諾わず、遂に最後まで

残つて、凄惨な最後の国共戦に遭遇した筈だが、幸に一家無事に過せたかどうか、いつさい消息不明である。

彼はサンデイ毎日の懸賞小説に当選したこともある男で、別れるときは感傷的になり「石河というしがない男が、最後まで残つたと、内地の人たちに伝えてくれ」と「サンデイ毎日」もどきの別辞をのべたが、彼の生活はすつかり中国人の社会にとけこんでおり、案外、名も石何とか変えて生きのびていそうな気もする。

まつたく奇妙な羽目になつたものだが、戦後彼は中国人と日本女性の結婚媒介をやり、双方から頼みにされていた。「嫁さん、いつきてくれるか」そう云つて、よく何人もの中国人が、彼のもとへ催促に来たものだ。「そう急ぐと、花嫁に嫌われるよ」彼は悠然と応対していた。

「芸文」は大内日記にあるとおり、今年十二月、新年創刊号を出した。創作は次のようなものであつた。

東北（北村謙次郎）星雲序章（長谷川濬）城性地帯（山丁）冬夜譚（日向伸夫）

なお、十二月には古くからの同人誌「作文」が終刊号を出し、長い文学活動に終止符を打つた。

かくて十二月八日、いよいよ対米英戦詔勅下り、日満おしなべて、未曾有の緊張状態に陥つ

た。戦況はますます苛烈、文筆家の生活も、もはや根こそぎ嵐にさらされる運命にあつた。

五十章

建国十周年記念――「満州民俗慣習制度研究」――千種達夫――現住民族の音楽調査――丸山和雄――菊五郎来演――娘々祭点描

康徳九年（昭和十七年）は、建国十周年記念祝典が行われた年である。戦の様相が激しくなればなるほど、この種の行事で民心の安定を図るというヂェスチェアも必要だつたろう。

それに、緒戦に得た勝利は、一般民衆の心を意外に弾ませ、意気大いに揚つていたことも事実である。

祝典が催されるに際し、例により肩書つきの船頭が山と並んだことは、想像にかたくない。

が、このとき満州側に十周年祝典事務局、日本側に十周年慶祝会が設けられて、各種の記念事業を企図したことだけ記し、人名等は省くこととする。

満日文化協会は、このときも推進的な役割りをつとめ、前にも書いたとおり芸術院会員の献納

画を斡旋、これを東京の帝室博物館、新京の日満軍人会館で展観したほか、東京に満州国宝展覧会を開催して、満州古来の文化を日本に紹介した。

東京音楽学校で組織した音楽使節団が、大挙して来満、各地に演奏旅行を開いたのもこのときである。なお同校は、このとき制作した「大満州行進曲」を皇帝に献納した。

この他、文協自体の紀念事業として、池内、羽田両博士により完成した「明代満蒙史料」の刊行を企画し、洋装三十冊の巨篇として出版することになり、次年（十八年）度に第一冊を、つづいて逐次発刊して行つた。

当時建大教授（満州民俗学会員）大間知篤三氏によれば、当年文化事業の圧巻は、次の二つに止めをさすという。

第一は「満州民俗慣習制度研究」なる尨大な著書で、数多くの学者を動員したが、主として編纂に当つたのは民法専門の千種達夫氏だつた。

第二にあげられるのは、満州現住民族の音楽調査である。オロチョン、ヤクート、ゴルヂその他原住民族の中へ踏み入り、曲は録音、歌詞は丹念にノートしたもので、想像以上の艱苦努力の結晶だけあつて、現存すれば貴重な遺産となるものであるが、惜しいことに、田辺尚雄氏のライブラリーに一部を残すきり大部分の録音盤は消滅した。

これはもと、日本における文化振興会の黒田某氏が企図し、上野音楽学校作曲科出身の丸山和雄氏が、電々放送局の後援をまつて実地踏査にのりだした結果、漸く成つたものだつた。当時ビクターでも録音不能といわれたのを、電々技術陣がみごとに完成、共同制作の意図から、原盤を東京へ送つたとたんに、爆撃で焼失し去つたものと云われる。完成すれば、英独仏諸国へも贈られる計画だつたというが、惜しいことをしたものである。但し、当の丸山氏はいま高知に健在であり、ノートをもとに、当時の記憶を探つて原譜を複原すべく努力中であると聞く。

十周年の式典は、郊外の南嶺に式場を設けて行われたらしいが、筆者らは参列したわけでもなく、ハッキリしたことは記憶しない。何でも市内では大同広場に、紅白の幔幕が張られ、開拓義勇隊あたりも参列して慶祝行進が行われたようである。こちらの方が、一般市民の式場でもあつたのか？　時候はちようど秋にさしかかるころだつたように思う。

さきに原住民族の歌唱を録音した話を書いたが、式典の行われた夜は、実際に各地から招かれた各民族が、公会堂の舞台に上り、それぞれお国ぶりの歌舞を演じて喝采を浴びた。ところでヤクートかオロチョンか忘れたが、宿舎に泊るのが苦痛とあつて、戸外にテントを張り、漸く寝つかせることが出来たという、いかにも原始の匂いのする話をきいたこともあつた。

いま中国の各族各界代表大会には、漢民族に伍してウイグル族、ドウ族、カザベック族など、

広範囲の民族が集まつてお国自慢の歌舞を演ずる例のようであるが、それを一回り小さくしたような、しかし極く特異な色彩をもつ各民族の交驩図が、いち早く昭和十七年の交、いまの東北地区と呼ばれる朔北の地にくりひろげられた事実は、もう一度回顧されていいと思われる。

このほか六代目菊五郎が来満して全満各都市で巡演し、奉天では北京から招いた名優程硯秋と座談会を開いたりした。程硯秋は梅蘭芳につぐ名女形である。新京交響楽団と哈響の合同演奏も行われ、満映も紀念作品を出品した。またソ連とは黒竜江一つで隔てる黒河の町で、日本人の花火師が大花火をあげ、それを対岸のソ連人が珍らしがつて見物したなどの挿話もあるようだが、けだしこれは余興中の余興か？　かくて十周年の祝いは、いかにも民族のお祭りらしく賑かに終始した。しかし文筆人としての筆者らは、まつたくこの国家的祭典の埒外にあり、いつたい何がどうなっているか、いわば風馬牛のツンボ桟敷で過した。憎まれ口を叩くようだが、筆者などにとつては、春秋に行われる寛城子の娘々祭のほうが、よっぽと身近なお祭りのようで、そのつど、新京から友人を招いては、中国人群集の渦巻く廟の内外を彷徨したものである。

次はそのころの雑文の一節だ。

「家の横丁へ一丁ばかり北へ行くと一本の楊樹がたち、その木陰に小さな廟が祀られている。話によれば娘々廟だそうで、敢歩ついでに自分も二、三度ほど立寄つたことがあるが普段の日なので別に何の奇もな

く、心にとめるほどのこともなくて過していた」

「その娘々廟のそばに、気がつくといつの間にか、朱塗りの柱も鮮かな新しい堂が一棟建つようになつた。（略）そしてその新築（改築？）披露の祭礼が、九月初旬――旧暦の七月十四日から五日間にわたつて挙行された（略）」

「前後五日間のお祭りというのも、満州らしくてよかつた。僕は『お祭りだ、お祭りだ』と云つて、新京に住む友人たちに電話をかけたりした（略）」

「美しく着飾つた姑娘が行く。路傍で甜瓜（まくわ瓜）売りも叫ぶ。一束の砂糖黍を後生大事に担いで人混みを縫いながら売歩く小孫がある。廟の前には香煙が流れ、道服を着けた僧侶の手で鐘が鳴らされる。三体の娘々が飾られ、新装なつた一棟には、中央に老子、右に呂祖、左に邱祖を祀り、その前に鞠躬の禱をささげる男女の姿が絶えない。廟の背後へ廻つてみると、広い畑地を覆う人混みである。一番奥まつた場所に小高い舞台が設けられ、三四人の俳優たちによつて大立廻りが演じられている」

「思い思いの場所に射撃場、覗きからくり、曲馬団、煙草を賭ける輪投げ遊びなどが客を呼び、右手に一列に、さまざまな飲食店がアンペラ囲いの軒を並べ、シナ料理独特の油の匂いを、むんむんあたりに漂わせている」

「ジンタが流れる。「空に囀る鳥の声」という、九段の招魂祭で聞いたのとちつとも違わない甘悲しい曲である」

筆者らは、中国人の吹奏するこんな音楽をききながら、汚穢そのもののような料理店で白幹児の酔を呼ぶのだが、それは盃に入れてマッチを近づけると、爆発的勢いで青い焔をあげるほど強烈なものだつた。

「こうして火で消毒して飲むのがコツだ」
などと、逸見猶吉あたりが知ったかぶりをならべて悦に入つていた。
外は残暑がきびしくとも、アンペラ囲いの中はすでに秋気身に沁む爽快さである。

五十一章

檀一雄帰る——「芸文」作品抄——「北窓」——「満州短編小説集」

この十七年春にも、筆者は東京へ帰る機会があつた。去年の冬、対米英戦が始まると同時に、勇ましく興奮しだし、新京の籔医者の評によれば「よくハネたものだ」という騒ぎがあつたことから、みごと右足を折つた。その治療に帰京したのである。
大学病院（東大病院）構内の桜がさかりだつた。レントゲン写真は、ハッキリと折れた脛骨を映しだしていた。
「どうしてそんなことになつたんでしよう」
病院からの帰途、家内はそう云つて涙ぐんだ。

お産で留守をしている間に、こういう不始末をし出かされては、立つ瀬がないというものだつたろう。
しかし、前後二箇月ほど、温泉治療をする間に、折れた骨はみごとにくつつき、ビッコにもならないですんだ。あのときの外科の先生は、まことに達人であつたと、感謝の念を禁ずることが出来ない。「温泉で治せ」だけで、立派にその通り治つたのである。
新京へ帰つて文化協会を訪れたら、杉村勇造理事が
「ほう、ビッコになるだろうと楽しんでいたのに」
と、残念そうに見上げ見下したものだ。
新京帰着は、六月中だつたろう。入れ違いのように、檀一雄君が郷里九州へ帰つた。逸見から聞いたように思うが「お嫁さんを貰いに」ということだつた。これがたしか「リツ子」の主人公たる運命の女性である。
雑誌「芸文」五月号には、檀君の「魔笛」という短篇が載つている。彼はこの作品の褐載を見ず、匆々に帰郷したと記憶する。それから彼は上京し、報道班員として中国へ渡つたが、爾来二個年にわたり、広い中南支を跋渉しつくして帰国した。運がいいのか悪いのか、それはそつちのけで、空寂として「空むいて行く檀一雄」だつたのだろう。

「芸文」はいろいろな批評を受けながら、とにかく毎月市場に出て行つた。創作だけ拾つてみれば

二月号「野狐」北尾陽三「旅にしあれば」坂井艶司「墟園」呉瑛。三月号「女」牛島春子「悪魔」爵青。五月号「魔笛」檀一雄。六月号「大凌河」戈禾「鶯」晶埜ふみ。七月号「老宋」山田清三郎。八月号「馬」加藤秀造「燃える町」百瀬宏。九月号「県城」神戸悌。十月号「或る軍医の手記」仁木良介「アパートの親分」小林実。十一月号「河のほとり」麻川透「路傍の花」中山美之。十二月号「草奔唱」秋原勝二「白鼠」冬木羊二。

以上が「芸文」一箇年の文学的収獲。このうち神戸悌の「県城」は次年（十八年）にいたり第一回芸文賞というのを受けた。

ハルピンから出る雑誌に「北窓」というのがあり、今年八月同誌に載つた木畑卯一氏の「丘の子供たち」が好評であつたと、大内の「満州文学二十年」に出ている。「北窓」は昭和十四年、満鉄ハルピン図書館から、書誌を兼ねて出された一種の文化雑誌で、館長竹内正一氏が主力となり、菅忠行氏がこれを助けていた。同誌執筆者に、渡辺伸吉、三宅豊子、木崎竜、赤川幸一、山口もと子、大滝重直、加納三郎、紫藤貞一郎、藤原定、唐木順三、島木健作、富田寿、石森延男、吉野治夫、合志光、井田潑三、村岡勇の諸氏があつた。（昭和十五年まで）

なお十七年九月、中央公論は爵青の「凍つた園庭に降りて」と牛島春子の「福寿草」を載せ、

「文芸」「新潮」なども、それぞれ在満作家の作品、随想など掲載した。「三田文学」が和木清三郎氏の努力により「満州文学特集号」を出したのも、本年度のことと記憶する。

新京では筒井俊一、楳本捨三等の編集で「満州短篇小説集」というのが満州有斐閣から出版された。

筒井俊一「姉妹の宿」野川隆「狗宝」田辺澄夫「美わしき季節」（放送劇台本）北尾陽三「虚宿」北村謙次郎「鶴」楳本捨三「夫は妻を叱るべからず」（戯曲）大内隆雄「満系文学の展望」（評論）

有斐閣の支店長は、名を失念したが一風ある人物だつたとみえ、二階を文芸家協会の事務所に提供したりした。薄暗い部屋だつたが、そこで働いていた事務員、坂井艶司、斉藤慎一君などの顔が、ぼんやり浮んでくる。

楳本捨三はすでに満日連載「成吉思汗」を終り、つづいて長篇「阿片戦争」を出版したり、進んで出版書肆を目論むなど、意気さかんだつた。

中央公論編集長だつた佐藤観次郎氏が来満し「黄塵風」という戦記ものを出版したが、これがたしか楳本君の店の処女出版ではなかつたかと思う。

五十二章

ここでただ一つ、政治的な意味あいのことで、日系作家たちの注意をひくことがあつた。それは対米英戦の勃発が、中国系知識層にたいし、非常に明朗な空気を与え、それがひいて彼らの行動に、或るきつぱりした態度をつけ加えるようになつたということである。

このことは当時、日本内地の知識人も、同じことを口や筆にしているのを見聞したが、それと同様なことが、政治に敏感な彼ら満系層に、また別の意味を含めて、大きく映つて行つたようだつた。とにかく今後の敵は、同じ民族国家たる中国でなく、毛色の違う米英であることがハツキリし、それが彼らの気分転換に役立つたというのである。

十二時黙禱といふ習慣は、いつから始まつたことだろう。あまり実質的な効果があつたとも思えないが、十二時の時鐘とともに、あの「海行かば」が聞え、仕事最中のものも立つて頭を下げる。多分あれは内地から輸入された行事であろうが、満系諸君にしても、肚の中はともかく、日本人と一緒に黙禱している姿は印象的だつた。

というのも「日本よ勝て」と願つている満系諸君が、決して少なくなかつたろうと、察しられ

る理由があるのだ。

そこで戦いが、対米英戦にまで進展していなかつたら——これは終戦後よく聞く「仮定」の一つだが、また別に「対中国戦が、あのとき完了していたら」というのも、結構成り立ち得る「仮定」の一つである。何故、蔣、毛を打つて一丸とした中国に対し、和平交渉を進めることが出来なかつたか？　場合によれば、彼を日本側に引き入れるほどの大芝居が、なぜ打てなかつたか？

せつかく日本から、中国、満州へ来往する政治家、文化人も年とともに多かつたことだし、あのころ、中国人の心を敏感にとらえ、日本をして進むべき方向へ進ませるほど、力量のある人物がなかつたことは、何とも惜しいことであつた。

対中国戦があの時に終止符を打たれていたら、日本の進路は大きく変化していたに違いない。このことは将来にわたつても、強く記憶されていいことではないかと思われるので一言つけ加えたいのだ。

さてこのような戦争の空気を反映し、文芸家愛国大会がひらかれたり、軍隊慰問や、ひいては一日入隊ふうのことが行われたのも内地同様である。そのどれにも、例により筆者は参加をすすめられたことがないので、相かわらず寛城子で蟄息しているばかりだつたが、それより前の昭和十七年「満州浪曼」と縁のふかい大学書房主にすすめられ、錦県綏中にある佐渡の漁業開拓団を

見に行つたことがあつた。

書房の主人石見栄吉氏は、やはり佐渡出身である。その郷土関係から、開拓団入植にあたつては私財を投じ、親身に世話をしていたらしい。

満州はもちろん大陸の地つづきで、陸地こそひろくても海岸線は乏しい。安東から関東州貔子窩にいたる短い線、それと綏中沖にあたる渤海の一部、遼東湾に面するあたりだけが、僅かに満州のもつ「海岸線」ということになる。

ここに二つの開拓団が、前後して入植した。興城海岸にある亘理開拓団、綏中佐渡開拓団の二つがそれである。

その頃の文章に、次のように記してある。

「佐渡金泉村姫津の沖合いといえば、日本海の怒濤ここに極まると思われる荒浪で知られる。この海で鍛えた漁夫たちこそ、渤海の幸をひらくにふさわしい人たちであつたといえよう」

「先遣隊として十名が入植したのは、昨年二月のことだつた。（略）今は家族を加え百十名の団員を擁する」

「今年五月には新潟で新造した二隻の漁船を廻航するという放れわざを演じている。わずか三噸そこそこの発動機船で対島を突破し玄海灘を乗切り、二十五日の航海中には、朝鮮人の難破船を救つたこともあつた」

これが開拓団入植の序章である。筆者はこの漁業開拓団を見たのがきつかけとなり、つづいて秋には北満の興安牧場、ジャラントンあたりの旅に出た。それでも足りず、翌十八年には北満各地の開拓団をめぐり、十九年になると、三江省鶴立県公署の世話で、県下にある十八の開拓団を次々にまわつて「開拓十年史」なる報告文を起草するにいたつたことは、本書の序章で触れた。十九年から二十年終戦直前まで、殆ど鶴立県の田舎まわりに過したわけである。

つまりこういつた開拓団めぐりの、これが最初の滑り出しとなつただけに、綏中への旅のことは、記憶の中に鮮かであるが、満州芸文というたてまえからは、開拓団のことばかり書いてもいられない。

ただし筆者がこのとき得た大きな収穫は、田舎の副県長とか開拓科長といつた、満州のお役人が、少しも役人臭をおびず、どこか孤独の相をもつ人間像として映じたこと、開拓団が日本の郷里の匂いを、ふんだんに満州へまで持ちこんでいた事実で、開拓地へ行きさえすれば、日本へ帰らずとも、日本の田舎へ帰つたような気分になれるという、この方は、しごく手前勝手で、自分好みの理由によるものだつた。大陸同化などといいながら、あくまで日本の匂いに執著するこの傾向を、筆者らは最後まで決して矛盾とも思つていなかつたのだ。

綏中の旅は雨に祟られ、町から団まで二十四キロを、荷馬車で揺られどおしで、お尻の皮が剝

けるほどひどい目にあつた。雨合羽を頭から冠り、小さな椅子にかけたまま、身動きひとつとれぬ難行軍だつた。道路は見るも物凄い泥濘で、走りなやむ馬たちも哀れだつた。

「団にはさまざまな問題が山積していた。防波堤の工事、防風林の増殖、水田開発、塩田開発、燈台設置学校改築、その他――ちよつと小耳に挿むばかりでも、まつたく眼のまわる忙しさだ。草創の苦はここでも大きく、そのまま満州国全体の縮団とも見られる」

と、筆者は同じ文章の中に書いている。大内著によれば、多くの文学者たちも、やはりそれぞれの外的活動に入つていることがわかる。

「国家的各種行事への参加、満州国新国歌制定への協力、政府及び軍の各種報道隊への参加、華北との作品交驩、大東亜文学者会議への代表派遣等があげられる。諸行事への参加とは、協和会臨時全聯への芸文人代表としての古丁氏の出席、興亜動員大会への文学者の参加、建国十周年式典への作家の参加、民族芸文祭に際しての作家の動員等を指す。報道隊への参加は、戦車隊演習への参加、開拓地報道隊への参加産業報道隊への参加等であつた。これらはそれぞれ、報告文学、詩文として結晶している」

どうにも賑かなことだが、これが大勢とあつては、いつまでも苦りきつてばかりもいられない。したがつて筆者も筆者なりに爾来大いに発憤することになつたわけである。

この一文にある大東亜文学者会議には、爵青、古丁、小松、呉瑛、バイコフ、山田清三郎の六氏が出席した。

なお、今年発行された小説、評論などの単行本には、前に触れたもののほか、次のようなものがあつた。

バイコフ「さわめく密林」山田清三郎「私の開拓地手記」横山敏男「新京郵信」報告文学集「地平線を行く」（以上東京）

小林実「開拓祭」青木実「部落の民」楳本捨三「阿片戦争」高木恭造「奉天城附近」竹内正一「復活祭」工清定「迎春花」爵青「欧陽家的人們」小松「人和人們」秋螢「河流的底層」疑遲「天雲集」長谷川四郎「デルスウ・ウザーラ」

また新聞発表の長篇に、尾田幸夫「暁の満洲」山田清三郎「建国列伝」北尾陽三「白い庭」山丁「緑色的谷」などがあり「建国列伝」はたしか次年度まで続掲されたように思う。終戦後、この作者が一応国家協力者リストにのり、シベリヤ行きとなつたのは、この「建国列伝」のおかげであるといわれたのは、一文芸作品の影響も、意外な運命を人にもたらすものとの印象を人に強うるものである。

五十三章

木山捷平大旅行のこと――二度の来満――鶴立県にて

中谷、浅見両氏に次ぎ、十七年のたしか秋に入るころ、やはり「日本浪曼派」の木山捷平が来満し、北は黒河へんまで足をのばしたばかりか、帰途は大連から船で天津へまわり、序でに北京まで見物「蝗の大旅行」を敢行して人目を惹いた。

彼はスロモーで太儀がり屋の風貌にも似ず、いつたん思い立つと想像も出来ぬ精力を駆使し、こまめなところを見せてアッと人をおどろかす。偏えに健康で、疲れを知らぬところがあり、境遇に順応する柔軟性があつて、たいていのことなら眼をつぶつて過せるからでもあろう。

新京到着のときは、電報遅着で迎えに行けず、そのうち駅の宿引きの手で、いんちき宿らしいのへ案内された。

後刻訪れた筆者に向い、さんざん宿の不届きさかげんをならべ

「女中の奴め、窓を明け放しにしたといつて文句を云やがつた。どうも話がうまく通じなくて閉口だよ」

と、愚痴タラダラだつた。

観音びらきの硝子窓ときて、開けたら開けたで、煽り止めの留金をかわなければ、風に煽られてガタンとなる。それを注意されて憤慨したらしいのだが、要するに剣つくを食わすだけで、せつかくの先生の「ユーモア」が不通となり、「あんな非常識な女中があるか」と、話が逆になつ

たわけ。

腹を立てながらも、次の宿がみつかるまで、どうやら眼をつぶつて過せるところが、彼の一徳というところだろう。

満州新聞には、緑川貢君が健在のころで、彼らはのんきに朝から将棋をさして遊んでいた。暇をみて六七枚の紀行文を紙上に発表し、多少の稿料を得てタバコ代にあてたりする工合だつた。日本から届く筈の旅費が、なかなか届かないと、これが愚痴の最大なるものの一つだつた。

このとき木山君は、新京滞在が目的でなく、間もなく鉄道総局弘報課の日向伸夫君から全満旅行パスが届けられるのを待つて、遍歴の旅に出たものと思うが、越えて十九年、こんどは農地開発公社といういかめしい会社の嘱託となつて、ふたたび彼の童顔が大陸風にさらされることになつた。嘱託といつても、北満の開発地をめぐり、紀行なり創作なり発表してくれればいいというような条件だつたと思う。ただし一応は新京が本拠になるわけで、最初は例により市中の安宿に足をとめたが、後は南新京のアパートに移り、会社へ出たり、休んで将棋をさしたり、北満旅行を企てたりといつた日を送つていたようだ。

最初に八島通りへんの宿屋へ落著いたのは、もはや寒さもきびしい頃で、石炭不足の折柄でもあり、先ず夜の寒さに閉口したらしい風情だつた。

「水筒へ湯をつめて湯婆にしようと思うんだが、あいにく栓を紛失しちやつたんでね」
「それなら、いつそ一升瓶へつめたらどうだろう。ただし、栓が抜けたらことだぜ。電器コタツがあるといいがね」
「何しろ寒いのは、かなわん。あの水筒へ、毎晩二合買つてきて、飲んだ勢いで寝こむことにしているんだが」
こんな佗びしそうな会話を交したものだが、この暮れから二十年にかけてのことは、彼の作品「海の細道」に詳しいから、読んだ人も多いだろう。これは終戦後「素直」という季刊誌に載つた、割に長い作品である。
しかし寒さはきびしくても、大陸の乾燥性の空気は、持病の神経痛に大変よかつたらしく、痛い思いをしないですんだのは何よりだつた。その代り、音楽家の朝比奈隆氏などと同じく、十九年といえば、次の年は云うまでもなく終戦の年である。そこでけつきよく彼も、引揚げの苦労をなめに来たような結果になつた。おまけに、ドタン場の応召に引つかかり、たとえ何日間かにしても、兵営生活の苦労までなめさせられたのは、彼にすれば、まつたく思いの外のことだつたろう。
開発公社の関係係長は、某というのつぽの世話焼きで、これが好いときはいいが、生嚙りの芸談（？）などを愛好する癖があり、ときどきハタ迷惑のことがあつた。こういう人種は、往々に

して新京で幅を利かしていたから、女中にユーモアが通じない以上に、さすがの木山先生もお愛嬌のやり場がなくて閉口頓首することが多かつたようである。
十九年から二十年春にかけ、筆者は三江省鶴立県の住人となり、せつせと開拓地めぐりをつづけていたことは前に書いた。そこへひよつくり訪ねてくれたのが木山で、何はともあれ附近の中国飯店で一酌のこととなつた。
白乾児も豚肉も、ようやく不足がちのときだつたが、そこは馴染み甲斐でどうにか都合がつき、豆腐と豚をいためた豆腐湯（タン）かを肴に、久潤をのべあつた。（湯（タン）は中国風スープだが、この場合はむしろポタージュである）
「浅見淵先生に寄せ書きをしよう」と、あり合せのハガキに俳句めいたものを書いてポストへ入れたが、浅見氏は折りから南方旅行で不在中の筈だつたし、満州日本間の郵便もそろそろ怪しい頃で、無事に到着したかどうかハッキリしない。句にいわく「春寒むの昼静かなり豆腐湯（タン）」

五十四章

満洲文芸春秋社――藤沢閑二――永井竜男――池島信平――香西昇――式場俊三
徳田雅彦――小松正衛――ふたたび甘粕正彦の横顔

昭和十七―十九年の項が、やや長くなつたが、もう一つつけ加えたいことがある。長期決戦の様相がきびしくなるにつれ、内地の出版事情はいよいよ窮屈となり「中央公論」「改造」などの大雑誌社から、各種の図書出版社まで在外の紙の獲得と、割に緩かな出版環境を期待して、まず中南支方面に地盤を築こうと奔走しだした。

これには文化的海外進出の意味も加わり、現地側でもむしろ希望するところ多かつたから、期せずして各社競争の形となつたのは当然である。

折りから満州日日新聞理事後藤和夫氏が上京中だつたが、氏は前に上海にあつたころ、文芸春秋の永井竜男氏らと親しく、その縁故によつて極力文芸春秋社の満州進出をすすめた。文春社としても、一考に価する問題と見てとり、さつそく重役会議がひらかれたが、その席上、後藤案に非常な賛意をしめしたのは菊池寛の女婿藤沢閑二氏で、案外、気乗薄だつたのが、社長菊池氏だつたといわれるが、とにかく出版界の将来は暗憺としていたうえ「ここで何か新しい手を打たねば」と願う気持ちが大勢を決したか、一応現地視察を兼ねて瀬踏みを敢行することになり、十八年まづ藤沢氏が単身現地視察の旅に上つた。（註・これは同年春のことだつたと思はれる。筆者は旧知の彼と一緒に、まだ寒い市内をうろつき、平康里（ピンカンリ）の案内役などつとめた憶えがある）彼が帰ると間もなく、永井竜男氏が来満し、つづいて千葉源蔵氏、池島信平氏の来訪となつた。当時

永井竜男は「文芸春秋」編集長だつた。いつぽう、満日の後藤はすでに新京支社にあり、永井氏らのため宿舎その他の世話をみながら、文春の使命が決して軽くないことを、口を酸くして説いたといわれる。内部的な詳細は、知るよしもないが、この間の事情は、一応筆者らにも正当に反映していた。文春社が渡満したら、あくまで声援するようにと、ねんごろな訓示をたれたのは、文化協会の杉村氏だつた。橋渡しをつとめた後藤氏は、満日の新聞小説掲載以来の知己ではあり、同社進出は何より芽出度いことになりそうだと、双手をあげて歓迎したかつたのは筆者ばかりではなかつたろう。

かくて新京に落著いた三人は、関係機関との折衝に奔走、十八年十一月三日の明治節を卜して、新たに満州文芸春秋社の設立を見るにいたつた。

資本金十九万円、社長はもちろん菊池寛だが、満州側の専務として、永井が就任、取締役に吉川英治、藤沢閑二、前防衛庁長官たる船田中諸氏が就任したというのも変つている。監査役斉藤竜太郎、編集部長池島信平、業務部長千葉源蔵――これが当時のスタッフである。このうち、千葉は約三個月の滞在で帰日し、代つてやはり業務担当の小松正衛氏が、千葉の帰る前日、新京に着いていた。

最初は単に図書出版が目的だつたようだが、越えて十九年、雑誌「芸文」の刊行にもあたるこ

とになつた。創刊号は七月に出たが、百ページ前後のもので、創作に芥川賞作家小尾十三氏の「雑巾先生」が載つた。この「芸文」は、たしか二十三年三月まで出たと、小松正衛氏が云つている。前に小原克已氏らによつて出されていた「芸文」は、小原が「満州公論」を発行するようになつて休刊となつていたのを池島氏らが芸文聯盟と協同して、新発足するはこびとなつたのだ。

他に単行本の出版としては、次のようなものがある。菊池寛「航空対談」井伏鱒二「花の町」吉川英治「柳生石州斉」大間知篤三「満州民俗雑記」小尾十三「雑巾先生」バイコフ「我らの仲間」

さて、そうこうするうちに、まず永井が帰日し、次で池島も帰つて、代りに来満したのが、香西昇、式場俊三、徳田雅彦の三氏だつた。けつきよく二十年のドタン場へ行き合わせる不運を背負うのはこの香西、式場、徳田、他に前からいた小松四名ということになる。

短日月のあいだに、相当に来往が激しいので、こまかなところは記述違いがあるかとも思うが、だいたいはまず、右に述べたとおりの経緯を辿つた。香西昇の記憶によれば、氏らが来往したのは新京神社の秋祭りのころだつたという。それは十九年秋——とすると、ちようど同年春の終りかと思われるが、街で飄然と散歩する永井竜男氏に出会つたことがある。何でもこまかい久

留米の対を着て、いかにも身軽ないでたちだつたが、季節はすでにきびしい峠を越し、肩に暖かな陽が光るころだつた。（或いは十九年秋か？）

「どちらへ？」

という質問に、氏は、苦い微笑をみせて

「本を探しに出たのだが、それより、どこかに美味いそば屋はありませんかね」

十九年春から秋といえば、新京もそろそろ諸事ご倹約で、おいそれと「そば」もありつけないことが多かつたようだ。例の「田毎」はどうだつたか、このころになると。あまり顔出しもしていないし、場所も少し遠い。ちよつと考え、近くにあるそば屋の名を思い出した。

「一茶というのが、多分、やつていると思いますがね。そこを曲つて、すぐ左手です」

店まで案内すればよかつたろうが、先きを急ぐ用があつたのか、今ごろ行つて、そばがなくては話にならぬと気おくれしたか、氏とはそのまま別れることになつた。

そのころ、そのへんでひらいているのは今の「一茶」だけ、しかも義理にも「美味い」とは云いかねた。ちようど昼どき、夕どきの二回ほどに限り、満員客の中で、急いで席をあけなければならぬ仕組みになつていたようだ。この店を教えてくれたのも、よく町を歩く逸見猶吉で、行けばカレーそば（うどん？）を三、四杯ぐらい食べていた。四杯とは驚くが、何しろ盛り少なのあ

たじけないものだつたから、さして驚くに当らない。

永井氏は新京で健康を害して帰京したと聞いているが、そういえばあのときも、どこか病気上りめいたやつれが見えたように思う。

「芸文」は文芸春秋、文芸家協会の合作で、次々に発刊された。文芸家協会、演劇協会その他を打つて一丸とした芸文聯盟理事長には、最初に三井実雄、次に甘粕正彦が就任し、香西氏あたりは、彼らや配給社との折衝で骨折つていた。そんな関係から、万事控え目だつたのは無理でなく「芸文」は表紙にたしか文芸家協会編集の文字も入つていたようで、文春好みからは遠かつた。

文芸家協会の事務所には、今村栄治あたりが頑張り「文春が協会を乗つとる」などとあられもない放送をしていたというから、香西の苦労も相当なものだつたに違いない。が、筆者らはそんな察しもなく「ナンダ、文芸家協会編集かね」と、自然とよそ向きの恰好になつたのも、いま考えればしかたのないことだつた。

それにしても、甘粕正彦とは不思議な人物である。香西の言にしたがつても、正直に腹を割つて相談しかけて行けば、たいてい「うむ」と善諾の返事があつたというから、満映社員あたりが、一図に震え上つておつかながつてばかりいるのを見馴れた筆者らには、ちょつと見当のつきかねるところがある。

何でも満映就任当時、社員が何列かに並ぶと、号令係りが

「幹部は三歩前へ！」

と大声を張りあげる。製作部長マキノ光雄氏あたりが

「えらいことになりよつた」

と、青息ついたというのも、もつともなことに思われるのだ。

筆者は十五年あたりから、満映の社員ではなくなつていたが、その後も用があつて訪れると、折りから理事長に就任したばかりの甘粕が、廊下の扉をガタンとあけ、背は低いが、すでにウィスキーでも入つたらしい赤ら顔をのぞかせ

「おい、誰々はどこへ行つたか」

と呶鳴る。

とたんに、部屋じゆうの社員が、すつくとばかり直立不動の姿勢をとるのを、呆気にとられて見守つたおぼえがある。

というのは、もともと放慢に流れすぎ、社員の「志気」沈滞してダラシなさすぎるのを気に病み、当時協和会から移つたばかりの彼甘粕が、懸命になつて叩き直しにかかつたという事実があつて、一概にこれをもつて行きすぎとばかり責められないフシもあつたのだ。おかげで社規

は、きちんと九時出社だかに改まり、大いに社運があがるようになつたというから、いずれにせよ一人材だつたと評すべきか。

香西のみならず、当時招聘された藤原義江などが、甘粕を評して「義理がたい人」と云つているところから考えても、満州へ行つてからの甘粕が、相当以上に、修行の年季を入れたであろうことが察しられる。二十年、氏の自決を知り、満系作家古丁たちが「甘粕は偉い」と、よく云うのを耳にした。満州の日本人でお賞めにあずかつたのは、甘粕一人ぐらいなものだつたろう。

こうして、満州文芸春秋社は、漸く軌道に乗りかかつたが、二十年に入るとともに、とんだ大もめにぶつかつた。日本内地と軌を一にして、諸雑誌の統合運動がおこり、このため満州文芸春秋社も、満州公論社もいつさい政府へ返上ときまり、あとは単行本の発行と、新しく計画された雑誌の担当を振当てられるだけになつてしまつた。このときは綜合雑誌専門の社も出来たが、文芸春秋担当は婦人、娯楽、開拓、児童向け専門のもので、誌名を満州国々花にちなみ「蘭」と名づけ、さつそく編集にかかることとなつた。要するに満州文芸春秋社は解消、香西も徳田も政府要員となつて働く仕儀となつたのだ。香西は青くなつて東京へ長距離電話をかけた。民間電話はすでに打切りだつたろう。おおかた軍、政府の専用電話でも借りたものと思われる。東京からの返事は、いま引揚げるのは不得策につき、そのまま頑張れということで、悲愴な決意をもつて新京

に留まり「蘭」編集をつづけることになつた。七月、すつかり割付けは終り、印刷所へまわそうとしたとたんに、八月の終戦にぶつかり、せつかくの編集努力は水泡に帰した。校正刷りも見ないままだつた。

当時は白水社その他も、六社聯盟を組織して新京に進出していた。あのまま終戦にならずに発展していたら、満州の出版文化も特異な開花を見せたろうし、香西、徳田両氏など、文化大勲章を貰つて、国務院にでもおさまることになつていたかもしれない。

それはともかく、折から来満中の真船豊氏が、ハルピン滞在中に満州を背景とする尨大な劇と小説を執筆した。その中には甘粕を主人公とした「赤いランプ」という戯曲もあり（上演）氏はそのどれだつたかを香西に預けて北京へ去つた。それが終戦で遂に日本へ持ち帰れなくなつたと聞くのも、惜しいことの一つである。

五十五章

十八年から二十年にかけて——徳田秋声逝く——「縮図」——「細雪」—諸家の訃相次ぐ

昭和十六年に来満した川端康成氏が、十八年、十九年と、三度連続して来遊した。十八年のときは、関東軍の招聘によるものだつたようだ。ヤマトホテルのロビーに迎えたきり、ゆつくり話す間もなく氏は帰京した。滞満朝間は前後十日間くらいのものではなかつたか。北満各地を飛行機で翔んでまわり、筆者らは冗談に「まるで雲上飛行のよう」と、忙しい旅路を思いやつた。

起えて十九年のときは、奉天の瀋陽館という古くから有名な旅館に泊りこみ、煙草女工を題材とする作品にかかつておられるとかで、つい訪問も出来ずに過した。瀋陽館というのは、満州事変当時、土肥原その他が額を合せて謀議をこらした旅館としてきこえている。

十八、十九年といえば、前章にも触れたとおり、満州もいよいよ最後の様相をしめし始めた頃である。もうこのあと芸文界といつたところが、かくべつ書きとめるほどのこともないくらい、すべて混沌状態に陥つていたといつてよい。

新聞雑誌に、休刊廃刊が相次ぎ、日満系おしなべて、ゆつくり小説など書いていられる時期でもなかつたのだ。十八年夏から秋にかけ、筆者は哈爾浜日日新聞に「西風に寄す」という長篇を書いたが、当然この切抜原稿もなくなつて本にもならずに終つた。

同年十一月、筆者は三度帰京したが、それは在東京の老父が死去したためで、折りから新聞小説の最後の何章かにかかつていた筆者は、汽車旅行の途中も、せつせと執筆をつづけ、最寄りの

駅から郵送するといつた殊勝な芸当を演じた。

東京へ着いて間もなく、徳田秋声氏の訃を聞いた。「縮図」全篇が、完成しない中の訃であつたように思う。

二十年になり、この「縮図」が出版されるはこびになつたと、在新京の徳田雅彦氏から聞き、新著到着を待つていたが、終戦でそれどころでなくなり、二十二年引揚後、ようやく一本を手にすることができたのも、当時らしい思い出というべく、思えば「縮図」も、意外な時勢の「縮図」となつたわけである。

このとき、青山の斉場では、久しぶりに川端氏にも会い、木山捷平、上林暁君らとも語りあつたが、ついゆつくりも出来ずに別れた。ゆつくりしたところが、どうにもならぬような、辛いご時勢でもあつたのだ。

谷崎氏の「細雪」の「中央公論」掲載が中止となり、自家版として出版されたのもこのころ（七月）のことだつた。氏の「細雪」回顧に

「昭和十七、十八、十九の三年は熱海で書き、二十年になつて熱海も不安になり逃げ歩くようになつてからは岡山県の勝山でようやく五十枚くらい、平和になつてからは京都と熱海で書いた」

云々と見える。

一日、暇を見て芝のどこだつたか「文学報国会」本部を訪れたことがあつた。俳人伊東月草氏が、俳句部の部長として出勤していたからで、珍らしく背広姿の氏は、書画帖に「芭蕉二百五十年忌」と題し「遠き世を思いいる身に落葉ふる」の句を書いてくれた。ちょうどこの年、芭蕉の二百五十年忌が営まれたばかりのときだつたのだ。

その月草氏も、終戦直後の二十一年に病歿された。最後に氏に会つた十八年といえど、今やまさに「遠き世」にほかならぬことになつた。同年三月、平田秀木歿、八月島崎藤村歿、そして秋声の忌日は十一月十八日である。

十九年に移れば、二月、三上於菟吉歿、四月、近松秋江歿、十一月、辻潤歿、十二月、片岡鉄兵歿。なお十九年六月には「中央公論」「改造」休刊、七月東条内閣総辞職の重要事項が、文学年表に見えている。

もう少し拾つてみる。十一月、東京空襲初まる。そして二十年には、一月、野口雨情歿、六月、西田幾太郎歿、八月、島木健作歿、九月、三木清歿、十月、薄田泣菫歿、同月、木下杢太郎歿、同月、葉山嘉樹歿、十一月、三宅雪嶺歿。なお十月には太宰治の「お伽草紙」刊、十二月「十年」（里見弴）発表など、ごく僅かな記事があり、七月、ポツダム宣言、八月、広島、長崎被爆、ソヴエト対日戦布告、八月十五日、太平洋戦終結、九月連合軍進駐占領の諸記述につづ

き、十月日本共産党再建、十一月には早くも「新潮」「文芸」の二文学雑誌再刊の文字が見えて二十年の記事が終る。悲しむべき大詰の日は、そのまま新たな発足の日につながつているわけである。

秋声の訃を記しながら、筆のみ走つて、思いもかけず、かく多数の文学者、哲学者等の訃に触れる結果となつた。慌だしく、不幸であつた年を葬るには、これも相応わしいであろう。

ここに記した物故作家のうち、葉山嘉樹氏は昭和十七、八年ごろ渡満し、しばらく北安附近の双竜木曾開拓団にとどまつていたことを、前に聞いたことがある。

筆者は北安に近い老街基開拓団を訪れたことがあり、そこで葉山氏在村のことを聞いたのだつた。老街基開拓団は埼玉県出身者からなる転業開拓団で前職は米屋、醸造業からクリーニング屋自転車屋、自動車運転手、それに女流飛行家に花火屋まで混るという多彩の開拓団だつた。

女流飛行家の名は猪岡某女、のち西崎氏に嫁し、村の小学校の先生をしていた。この人の書いたルポルタージュは、たしか浅見淵氏の編んだ「地平線を行く」の中にも収められていると思うが、題を「大空から大地へ」といい、二度も海に落ちた冒険談を録したものである。

その頃かいた筆者の文章に、次の一節がある。

「双竜木曾開拓団には、葉山嘉樹氏が来ているとのことで、出来れば同氏にも会いたく、またあ

の冠には五大連峰火山もあり、それも見たかったが、限られた旅程では連峰も冠には成らず、素山氏もすでに日本へ帰ったあとと聞き、北安一泊のまま、満洲につくことにした」

この雑文「旅程断月記」は、二十年出版の「旅信」に記おきめた。

五十六章

航空文学会――「八雲」――春天兼行場見学――ソ連書記――変った出撃記念会――支文連盟解散――国民政府

せっかく出来た文芸家協会も、内部に役員間の反目があったりして、根本拾三、逸見猶吉などは別行動をとり、十九年冬から二十年にかけ、日本の航空文学奉国会を真似たような航空文学の会を作りたいと、再三にわたり筆者らを懇請にかかった。ダイヤ街くんの料亭へ、三三度招かれたおぼえがあり、したたに治安部（満州国国軍の管掌機関）の航空将校である安田参謀、田川参謀などと相識るようになるとともに、関東軍報道班の鈴木調査と語合う会合もあった。

この相談しをつとめたのは根本君で、彼は既に治安部嘱託となり、軍服に長靴、腰に軍刀ぎさげて出勤するという、当時でなければ想像もつかない愛国士的外貌をさせていた。そのくせ多情で、感激とあとでも泣口のように医者に来てもらい、心臓麻痺の疲労とめたの、さかんに注射してもらっていたから、軍幾はいわば治安部神士たるべきチケットにはかならなかったのだろう。

種子で話がまとまるところなど、いかにも自民党めいているが、それも根本君の場合は、イタについて不自然でなかった。二年ほど前まで、相当貧窟をつぎこんだ書房の主人であったから、呼ばれるほうも、何となく本屋さんの御贔屓になるほどの気軽さで出向いたものだ。だいたい話がまとまると、まず飛行機へ乗る計画をたて、会員がそれぞれ日を選んで、軍用機へ乗せてもらうことになった。筆者が乗ったのは、二十年七月ごろだったと思うが、旧式の輸爆機に乗り、折りから断続して流れる千切れ雲の中を、四五回ほど新京上空を旋回した。

この前年だか、東京で出る季刊誌「八雲」に、高井半作氏の航空随筆が載ったことがある。航空文学奉国会は、同氏が会長だったように思うが、それはともかく、この随筆は簡潔でふくらみがあり、高井さんの文章の中でも優れたもので、筆者らは愛読した。飛行機に乗ったからは、せめてあの随筆にあやかり、いい作品をと思い、これも根本君のすすめにまかせ、真先きかけて二三十枚の短篇を書いて手渡した記憶がある。（後間雑誌「雅天」の計画があったので）

彼の寓居は芝浦通りにあり、その大世、三度のアパートへ、よく井まつて田川、安田氏らと

歓談した。あの物資の乏しいときに、よく酒やご馳走が手に入つたものと思うが、それも軍関係なら、エチケットひとつで、どうにもなつたものか。

航空文学会は、飛行機以外に、こんな別の魅力もあつて、会員を熱心にさせた。木山捷平君あたりも、後日にいたつて

「楳本君には、よくご馳走になつた」

と、述懐的な言葉を吐いたものだ。

報道班の鈴木嘱託は、会とは別に空への興味を喚起すべく、芸文聯盟に働きかけて飛行場見学を前後二回ほど実施した。最初は新京飛行場、次には奉天飛行場へ泊りがけの見学旅行をおこなつたが、このとき本土は被爆いたらざるなく、奉天飛行場も飛行機の数は少かつた。

それでも高度五六千メートルの上空で、キラキラ機体をきらめかせながら、隊長機に二機づつ挑む実戦訓練が怠らず実施されるのに感動したり、朝鮮方面の基地に集結する隼戦闘機の歓送に立会つたりもした。飛行機は遠い森林中に隠蔽されているとのことだつたが、それが長い列を作つて現われると、つぎつぎに滑走路をスタートし、上空に半円を描く間に三機編隊を組み、両翼をふりながら東の空さして飛び去つて行く。乗員はいづれも二十歳前後の若鷲ばかりだつた。白のスカーフをつけ、いずれも塔乗席から軍刀の柄がのぞいていた。名は戦闘機でも、重い爆薬をつけ

て敵に体当りする運命を担うと聞き、戦いの苛烈非情が胸に泌みて、遠ざかり行く機影に涙が滲んだ。

それが八月五、六日のことである。あと十日で終戦だつた。ノートをとつたり、写真をとつたりして、それがどうなつたというのか？

かくて八月九日、ソ連参戦の報飛ぶや、全満日本人は混乱の坩堝に投じられ、新京は白城子方面から優勢なソ連軍が来襲するとのことで、先づ軍関係の家族につづき、各特殊会社の社員家族たちが安東方面へ避難を開始した。

筆者らはまだ寛城子にとどまつていたが、前から甘粕正彦氏を隊長とする芸文報道隊が結成され、連日のように電々会社にもうけられた本部へ通つて、ニュースをとつていた。

国家最後の日である。大同大街から、中央通りにかけ、大小さまざまな荷を負つた人々が長蛇の列を作つて新京の駅に向う。逃げたところで、安全かどうか分らぬ状態だつたが、その人々に餞けするため、電柱や塀にべたべた「安全を祈る」むねの伝単を貼りつけたりした。このとき満映は牧野氏すでに去つて松竹に入り、根岸氏は今年三四月のころ、北鮮経由帰日して、残るスタッフは製作部長にもと満新の和田日出吉氏、経理担当理事北村三郎氏、資材関係に渡瀬成美氏などあつて甘粕理事長を助けていた。満映の家族が、撮影用の自動車まで馳り出して大同大街を走

り去る姿は印象的だつたことを思い出す。

文化協会があつた大興ビルには、日本の兵隊が罐詰となり、やけ酒を飲みながら放歌高吟し、将校は軍刀を抜いて並木に斬りつけたり、潤滑油を作るとかで、いたるところ栽培されていた蓖麻を薙ぎ払つたりしていた。

十五日、終戦の詔勅を、奥山禎三君の家で白露人たちと聞いたてんまつは序章にのべた通りである。

十七日、甘粕正彦自決。報道隊はその前日、すでに解散となつていた。時日が前後するが、今年も満州国展（国展）は数百点の洋画、日本画を選んで市内の八島小学校に華々しく展観のフタをあけたのが、八月九日のことだつた。

十日が招待日とかで、その前日、筆者は単身会場を訪れたが、ひろい会場はすつかり飾りつけを終り、その中に文化協会の三枝朝四郎氏が、ぽつんと立つて絵を見上げている姿がひどく孤独そうで、目にいつまでも残つた。

同日、ソ連参戦、展覧会どころでなくなり、出品画は全部外して倉庫に収めたまま、不幸な終戦を迎えた。筆者は終戦後、別の用で同校を訪れたことがあるが、せつかくの絵が、狭い倉庫の中で斜めになつたり、逆さに倒れたりしているのは何とも哀れで正視に耐えなかつた。あのとき

の絵は、遂に陽の目を見ずに終つたわけだが、新京最後の日に、黙々として展覧会が開かれていたことは満州芸文の最後を飾るにふさわしい散華と云えるのである。

五十七章

邦人引揚げ——高橋匡四郎——江上波夫——滝川政次郎——栗原信——最後の饗宴

在満邦人の引揚げが開始されたのは、前にも触れた通り昭和二十一年晩夏の頃からであるが、そのとき文協の杉村、建国大学の諸教授、文春の香西その他、およそ三四十名が興安大路の一角にあつた日本人会に集り、引揚げに伴う文化遺産（文化財）の処理についての相談会を催した。（註・日本人会は戦後いち早く設けられて一般邦人——殊に奥地から避難する難民の世話に当つていた。のち高碕達之助、平島敏夫氏らが主となり中国側と協力態制を整えるに及んで、日僑俘善後連絡処と改め、瀋陽（奉天）に本部、長春に支部をおいて折衝連絡の事務に当つた）

相談会の結果、杉村勇造、藤山一雄、建大教授高橋匡四郎、江上波夫、滝川政次郎、他に三枝朝四郎諸氏委員となつて、美術品ならびに図書類を蒐集、これを無傷のまま中国側へ譲渡する計画が成つた。

計画としては妥当であり賢明な策と思われたが、そのうち引揚げ（当時は中国側の呼称に基き

遣送といつた。立場が反対になるわけである）開始と同時に、今日はA地区、明日はB地区と、否応なしに内地引揚げの場面となつて、委員といえど帰国せざるを得なくなつた。遂に杉村が帰る、藤山が帰る、文春も帰るで、委員組織に大穴があいた。

それに屈せず、何とか無理に留用といつた形で居残つたのが、美術担当江上波夫、三枝朝四郎、図書担当高橋匡四郎、滝川政次郎の諸氏で、彼らは牡丹公園内にあつた振武殿を本拠に、日本人会から多額の予算を割いて貰つて、美術品や図書の買上げにかかつた。

前にも書いた三浦直彦氏の莫大なコレクションを始めとし、民間所有の有名無名の書図工芸品、多数の稀観書などが、振武殿の道場せましと、波を打つて掻き集められたのはこの時のことである。中でも高橋匡四郎ときては、狂四郎とでも書いた方がふさわしい熱中屋の熱情漢ときて、持前の蛮声と生きのよさに物を云わせ、新京中を鳴りどよめかしてピラミッドのように本を集めた。ところが、集めた本をいざ整理にかかろうとする寸前だつたろう。好漢、どこにどんなスキがあつたか、コレラというご時勢柄の悪魔に見入られ、あたらあの元気な体軀を、大陸の一角に埋める運命となつた。一緒に本を集めていた滝川先生、今でこそせつせと本を書いてたまりたまつたウップンをだいぶ晴して居られるらしいが、あのときは一人のこされ、さぞ心細かつたことと推察される。それはともかく、美術品の方はどうやら無事に整理がついた。ためしにそれをずらつと陳列してみたら、さてこれが百花燎乱の見事さである。

それもその筈で、引揚げのドサクサまぎれに、大観だろうが梅原竜三郎だろうが、そこは素人の厚かましさも手伝い、こつちの懐ろに都合のいい適正価格で片つぱしからお譲り願つたのだから、一堂に列べてみれば、圧倒的な盛観だつたろうことは容易に想像がつく。

といつても、お互い引揚げを目睫に控えた日本人同士となれば、せつかくのこの宝物も、持つていたつて役に立たず、持つて帰ることはもとより許されない。そこで相談の結果、いつそのことここで大展覧会を開き、まだ何万と残る邦人たちに、眼の法楽を施してやつては、という意見がまとまつて急拵えの美術展覧会開催の運びとなつた。こんなことは大好きの三枝君あたりが、国展を開きそこねた腹いせも手伝い、さぞ大童になつて走り廻つたことと思われる。

かくてこの遺産文化財は、曾て猛者連が柔剣道を競いあつた振武殿の道場という風変りな会場を利用し、みごとに何日間か開場して、荒みきつた残留邦人に空前の眼の饗宴を提供した。（註・振武殿は鉄筋コンクリート白堊緑瓦（？）だかの秀れた構造で、新京でも最も美しい建造物の一つであつたと筆者は記憶している）

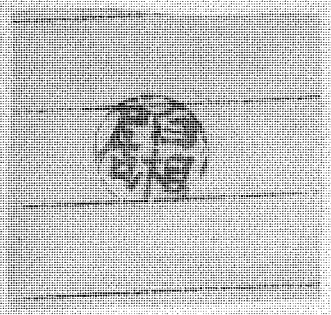
「あの騒ぎの最中、よく展覧会なんか開けたものだと、感慨無量だつたよ」と、近く（註・昭和三十一年八月三十日）江上波夫団長に随伴、遠くメソポタミヤのアッシリヤ文化遺跡の踏査に向う三枝氏は、目を細くして筆者に語つた。

あのときは駐在のアメリカ特派記者まで展覧会場におしかけ、接待に困つた主催者側は、洋画

の鑑定に訪つた二枠の老婦伯爵伯を囲わし、コーヒーを注れて出して貰つたという挿話も伝わつている。この老西伯はセロの高場古氏がそうだつたように、写生旅行中料理にちつかつたため、同じく西家の高田義雄（前出）などと二階に、喫茶店を開きながら悠々たる渡世生活を送つていた。パリでどん底ぐらしをした経験があるから、たいてい不自由な生活にはへこたれないと、お仲間のレバー料理の鍋を片手に振り振り語るのを聞いたことがある。

残された本や絵は、その後どうなつたか。それらは大部の目録と共に、集団兵武庫たる中国側に引渡された筈で、中共の世になつても、どこかに保存されているのではないかと想像する。或いは国展出品の作品と同じく、逆さになつたり、裏返しになつたりのまま、空しい墓を浴びているかもしれないが、それは筆者の深く冒瀆するところでない。満州芸文は独り絵画図書などにとどまらず、国家滅亡と同時に平家没落の如く土崩瓦解した。それでよかつたのである。

（了）



北辺慕情記

長富随筆

著者略歴

明治三十七年七月五日東京麻布生、大連一中卒後青山学院・国学院大学等遍学、昭和九年青い花同人、全十一年日本浪曼派同人、全十二年満映入社、全十三年満洲浪曼同人、全十四年満映退社自由生活に入る、全二十二年宮島・佐世保を経て東京引揚

著書長富春秋（新潮社）他

昭和三十五年八月二十五日　印刷
昭和三十五年九月　一　日　発行

定価　二八〇円

著者　北村謙次郎
発行者　東京都千代田区神田錦町三ノ一四　石見栄吉
印刷所　株式会社新栄堂
発行所　株式会社大学書房　東京都豊島区池袋六丁目一九七三　電話(971)三四七三　振替東京五一六七番

印刷　株式会社新栄堂　製本　株式会社山本製本所